保存用

10

御津町埋蔵文化財発掘調査報告5

原遺跡、山条・富谷地区

発掘調査概報

1989年3月

岡山県御津町教育委員会

御津町教育委員会

序

県営圃場整備事業河内第五工区は弥生時代中期からの遺構があり，その調査のため昭和62年度に主として遺構の消失部分，用排水のところを調査したものである。

調査に当っては，調査担当者が得られず止む得ない処置として町内在住の内田亮氏に依頼した。

したがって，充分とはいかないが一生懸命色々な障害を踏み越えて何とか期限内に完了することが出来た。こゝにその労苦に対し心から敬意を表するものである。又、協力助言に当たった県文化課及び地元の方々や直接作業に従事された方々に感謝申し上げます。

平成元年３月30日

御津町教育委員会
教育長　宮　本　久　雄

例　　言

1．本書は岡山県御津郡御津町教育委員会が，国庫補助を受けて実施した「原遺跡、山条・富谷地区」の発掘調査概報である。

2．遺跡は御津郡御津町大字宇垣に所在する。

3．発掘調査は御津町教育委員会発掘調査員内田亮が担当し，昭和62年４月８日から昭和63年３月31日まで実施した。

4．発掘調査にあたって，御津町役場農業土木課職員，教育委員会職員，御津町文化財保護委員，地権者等関係各位にあたたかい援助を受けたことを記して謝意を表します。

5．遺物の整理は御津文化センターで，整理作業員寺門節子の協力を得て内田が行った。
なお，遺物（石碆の一部を除く），実測図，写真等は御津町教育委員会において保管している。

6．本概報の執筆，編集は内田が行った。本書作成にあたっては，拓本等寺門節子の協力を得た。

7．本書に使用したレベル高は海抜高である。方位は，第１，２，７，８，17図が真北，他は磁北である。

8．本書第２図に使用した地形図は，建設省国土地理院発行の50,000分の１地形図を複製したものである。

目　　次

第１章　地理的・歴史的環境 …… 1

第２章　調査の経緯と経過 …… 5

（１）遺跡の位置 …… 5

（２）調査に至る経緯 …… 5

（３）調査の方法と経過 …… 5

日誌抄 …… 7

第３章　調査区の概要 …… 16

Ｆ－１

ａ．調査区概要 …… 16

ｂ．遺構 …… 20

Ｆ－２

ａ．調査区概要 …… 21

ｂ．遺構 …… 22

ｃ．遺物 …… 27

Ｆ－３，４，11

ａ．調査区概要 …… 27

ｂ．遺構 …… 32

ｃ．遺物 …… 46

Ｆ－５，６，９

ａ．調査区概要 …… 46

ｂ．遺構 …… 46

ｃ．遺物 …… 52

Ｆ－７

ａ．調査区概要 …… 54

ｂ．遺構 …… 55

ｃ．遺物 …… 68

Ｆ－８

ａ．調査区概要 …… 72

ｂ．遺構 …… 72

c．遺物 ……77
F－10
a．調査区概要 ……77
b．遺構 ……78
c．遺物 ……78
F－12
a．調査区概要 ……81
b．遺構 ……85
c．遺物 ……92
F－13
a．調査区概要 ……92
b．遺構 ……94
c．遺物 ……99
F－14
a．調査区概要 ……99
b．遺構 …… 100
c．遺物 …… 104
F－16
a．調査区概要 …… 104
b．遺構 …… 104
c．遺物 …… 110
F－15
a．調査区概要 …… 110
第4章　山条地区出土の古代瓦について …… 113
第5章　石器 …… 120
第6章　まとめにかえて …… 123

図　目　次

第１図　原遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡地図 …… 3
第３図　原遺跡、山条・富谷地区地形図 ……10
第４図　第５工区圃場整備区画図 ……11
第５図　原遺跡、山条・富谷地区調査区全図 …12
第６図　原遺跡、山条・富谷地区字名図 ……15
第７図　遺構配置図 ……13～14
第８図　富谷地区遺構配置図 ……16
第９図　Ｆ－１，Ｆ－２遺構配置図 ……17～19
第10図　Ｆ－１土層断面図 ……21
第11図　Ｆ－１　No.７住居（？）……21
第12図　Ｆ－２　No.11柱穴列 ……22
第13図　Ｆ－２　No.12柱穴列 ……23
第14図　Ｆ－２出土遺物実測図 ……24
第15図　Ｆ－２　No.15遺構 ……25
第16図　Ｆ－２造成土出土遺物 ……26
第17図　山条地区遺構配置図 ……28
第18図　Ｔ－１トレンチ土層断面図 ……29
第19図　Ｆ－３，４，11遺構配置図 ……30
第20図　〃 ……31
第21図　Ｆ－11　No.18住居 ……32
第22図　No.18住居中央ピット断面図 ……33
第23図　Ｆ－11　No.19ピット ……33
第24図　Ｆ－11　No.19ピット出土遺物 ……34
第25図　〃 ……35
第26図　Ｆ－11　No.20土壙 ……35
第27図　No.20土壙出土遺物 ……35
第28図　Ｆ－11　No.21構 ……36
第29図　Ｆ－４　No.22溝 ……37
第30図　Ｆ－３　No.23溝 ……38
第31図　Ｆ－11青銅器出土状況 ……39
第32図　Ｆ－11出土青銅器 ……42
第33図　Ｆ－３　No.26建物 ……40
第34図　Ｆ－３　No.27，28建物 ……41
第35図　Ｆ－３出土遺物 ……38
第36図　Ｆ－11　No.29建物 ……42
第37図　Ｆ－11　No.30，31，32住居（？）……43
第38図　Ｆ－11　No.30，31遺構出土遺物 ……44
第39図　Ｆ－３，４出土遺物 ……44
第40図　Ｆ－５，６，９遺構配置図 ……47
第41図　Ｆ－５土層断面図 ……47
第42図　Ｆ－６　No.42建物 ……48
第43図　Ｆ－６　No.43建物 ……49
第44図　Ｆ－６　No.44柱穴 ……49
第45図　Ｆ－６　No.45土壙 ……50
第46図　Ｆ－６　No.46土壙 ……50
第47図　Ｆ－６遺構出土遺物 ……51
第48図　Ｆ－６　No.49土壙 ……52
第49図　Ｆ－５，６造成土出土遺物 ……53
第50図　Ｆ－６遺構出土遺物 ……53
第51図　Ｆ－７トレンチNo.２土層断面図 ……54
第52図　Ｆ－７遺構配置図 ……56～57
第53図　Ｆ－７東南部柱状土層断面図 ……55
第54図　Ｆ－７　Ｐ３－19遺物（91）出土状況…58
第55図　Ｆ－７　No.63溝状遺構（道？）……59
第56図　Ｆ－７　No.66土壙 ……60
第57図　Ｆ－７　No.69土壙 ……60
第58図　Ｆ－７　No.70土壙 ……61
第59図　Ｆ－７　No.77土壙 ……61
第60図　Ｆ－７　No.79土壙 ……62
第61図　Ｆ－７　No.81，82建物 ……63
第62図　Ｆ－７　No.83，84建物 ……64
第63図　Ｆ－７　No.85建物 ……65
第64図　Ｆ－７　No.86建物 ……65
第65図　Ｆ－７　No.87柱穴列 ……66
第66図　Ｆ－７　No.88石列 ……67

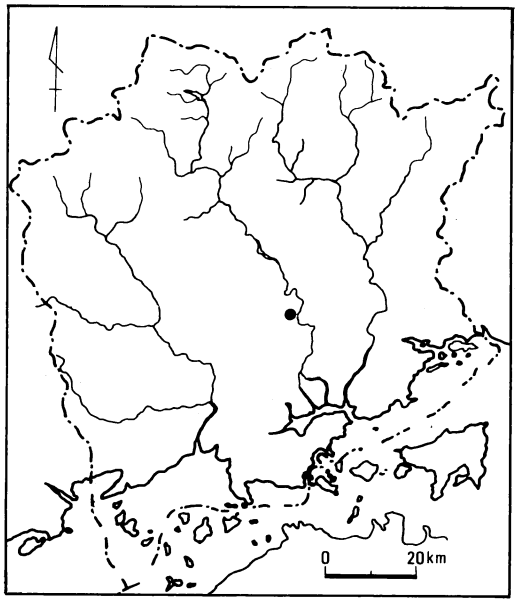
第67図　F－7　No.89土壙 ……67
第68図　F－7　No.91土壙（？）……68
第69図　F－7遺構・造成土出土遺物 ……69
第70図　F－7出土遺物 ……70
第71図　F－7造成土出土遺物 ……68
第72図　〃 ……72
第73図　F－7遺構・造成土出土遺物 ……71
第74図　F－8遺構配置図 ……73
第75図　F－8東南部土層断面図 ……74
第76図　F－8西壁土層断面図 ……75
第77図　F－8　No.97柱穴列 ……75
第78図　F－8　No.99遺構 ……76
第79図　F－8　出土遺物 ……77
第80図　F－8　造成土出土遺物 ……77
第81図　F－10遺構配置図 ……78
第82図　〃 ……79
第83図　F－9～F－10東西方向土層断面図 …80
第84図　F－6～F－10東西方向土層断面図 …81
第85図　F－12，13，14，16遺構配置図 …82～84
第86図　F－12土層断面図 ……85
第87図　F－12　No.101溝 ……86
第88図　F－12　No.102溝 ……86
第89図　F－12　No.103土壙 ……87
第90図　F－12　No.103土壙遺物出土状況 …88
第91図　F－12　No.104土壙 ……88
第92図　F－12　No.105土壙 ……89
第93図　F－12　No.106土壙 ……89
第94図　F－12　No.107建物 ……90
第95図　F－12　No.108ピット ……91
第96図　F－12　No.109ピット ……91
第97図　F－12出土遺物 ……92
第98図　F－13南側柱状土層断面図 ……93
第99図　F－13土層断面図 ……93
第100図　F－13　No.110溝 ……94
第101図　F－13　No.114，115溝 ……95
第102図　F－13　No.116土壙 ……96
第103図　F－13　No.117土壙 ……96
第104図　F－13　No.118建物 ……98
第105図　F－13　No.119建物 ……97
第106図　F－13　No.120建物 ……99
第107図　F－13出土遺物 …… 100
第108図　F－14南側柱状土層断面図 …… 101
第109図　F－14　No.125溝 …… 102
第110図　F－14　No.126土壙 …… 103
第111図　F－14　No.127土壙（？）…… 103
第112図　F－14　No.128土壙 …… 104
第113図　F－14　No.129土壙 …… 105
第114図　F－14　No.130土壙 …… 105
第115図　F－16　No.131土壙 …… 106
第116図　F－16　No.132溝 …… 106
第117図　F－16　No.132溝土層断面図 … 107
第118図　F－16　No.134，135ピット …… 108
第119図　F－16　No.136溝 …… 109
第120図　F－16柱穴列（？）……110
第121図　F－15遺構配置図および
土層断面図 …… 111
第122図　F－15遺構配置図 …… 112
第123図　F－14～F－15（ID－7）
土層断面図 …… 112
第124図　軒丸瓦実測図 …… 114
第125図　〃 …… 115
第126図　F－13　No.103土壙出土遺物 … 116
第127図　軒丸瓦・軒平瓦実測図 …… 117
第128図　軒平瓦実測図 …… 118
第129図　F－16出土軒平瓦実測図 …… 117
第130図　丸瓦・平瓦実測図 …… 119
第131図　F－4出土瓦製品 …… 119
第132図　山条地区出土石器実測図 …… 120
第133図　〃 …… 121
第134図　F－11南側土層断面図 ……45

図 版 目 次

図版１
１．山条地区・富谷地区遠景
２．山条地区近景
図版２
１．富谷地区近景
２．Ｆ－１完掘
図版３
１．Ｆ－２完掘
２．Ｆ－２東部
図版４
１．Ｆ－３，４完掘
２．Ｆ－３No.26,27,28建物
図版５
１．Ｆ－３遺物出土状況
２．Ｆ－５完掘
図版６
１．Ｆ－６遺構検出状況
２．Ｆ－６完掘
図版７
１．Ｆ－７完掘
２．Ｆ－７遺物出土状況
図版８
１．Ｆ－９完掘
２．Ｆ－９の西道路下部分
図版９
１．Ｆ－８完掘
２．Ｆ－10完掘
図版10
１．Ｆ－11　No.18住居
２．Ｆ－10　Ｒ－８新設道路部分トレンチ
図版11
１．Ｆ－11遺物（青銅器）出土状況
２．Ｆ－11　No.19ピット遺物出土状況
図版12
１．Ｆ－12完掘
２．Ｆ－12　No.103土壙遺物出土状況
図版13
１．Ｆ－13完掘
２．Ｆ－13　No.118建物
図版14
１．Ｆ－14完掘
２．Ｆ－16完掘
図版15
１．Ｆ－16遺構掘上げ状況
２．Ｆ－16　No.131土壙土層断面
図版16
１．Ｆ－16　No.134ピット土層断面
２．Ｆ－16　No.136溝遺物出土状況
図版17
１．昭和61年に検出された石組みの暗渠
図版18　軒丸瓦
図版19　軒丸瓦
図版20　軒丸瓦・軒平瓦
図版21　軒平瓦・丸瓦
図版22　石器・青銅器
図版23　石碾
図版24　Ｆ－２出土遺物
図版25　Ｆ－11　No.19ピット出土遺物
図版26　Ｆ－３，４，11，Ｆ－７，Ｆ－８出土遺物
図版27　Ｆ－２，Ｆ－11，Ｆ－６，Ｆ－13出土遺物
図版28　Ｆ－３，Ｆ－５，Ｆ－７出土遺物
図版29　Ｆ－７，Ｆ－８出土遺物

第１章　地理的・歴史的環境

原遺跡の所在する御津町は，岡山県の中央部を蛇行南流する旭川の中流域に位置し，東は赤坂町，山陽町，西は加茂川町，北は建部町，吉井町，南は岡山市に隣接する，面積約114㎢，人口約11,000人の町である。その地形的概観は，大まかに言って標高200ｍ～400ｍ級の山地部とその山間の河川によって形成された平地部とによって構成される。吉備高原の南縁部に当たる町の全面積の約80％は山地が占めており，主要な集落は，旭川とその支流周辺に形成された氾濫原，河岸段丘，沖積地等の平地部に集中している。最も大きな支流は，上房郡賀陽町を源流とする宇甘川で，その流れの左右に多くの氾濫原を形成しながら，金川で旭川に合流する。他の主な支流としては，新庄川，三谷川，野々口川等をあげることが出来る。いずれも水量，川幅ともに小規模のものであるが，それぞれの流域には数多くの遺跡を立地させている。



第１図　原遺跡位置図

御津町内で，縄文時代晩期の遺跡としては，鹿瀬遺跡，野々口遺跡，原遺跡が知られている。いずれも旭川流域の沖積地に弥生時代の集落址と複合して認められるものである。弥生時代の遺跡としては，鹿瀬，野々口，原の３遺跡をはじめとして，伊田大谷，岩井山，宅美池，塚の谷，新庄尾上などの遺跡が知られる。これ等の遺跡のいずれもが旭川及びその支流によって形成された氾濫原，沖積地，及びその周辺の山麓部，丘陵上に所在する。

御津町内にある古墳の多くは，各河川の流域を臨む丘陵上，尾根上に築かれている。各河川流域における分布を見ると，新庄川流域に最も多く，宇甘川流域では中泉，高津を中心に密度が高い。古墳の多くは，横穴式石室を内部主体とする後期古墳であり，前方後円墳としては，菅第２号墳，新庄の天神鼻１号墳，八つ塚古墳の３基があげられる。原遺跡の所在する宇垣においては，北東部の旭川を臨む丘陵上に金川古墳があり，平地部西端の丘陵の尾根上には，宇根山古墳群がある。

奈良～室町時代の遺物を出土する遺跡としては，原遺跡，岩井山遺跡が知られるが，歴史時

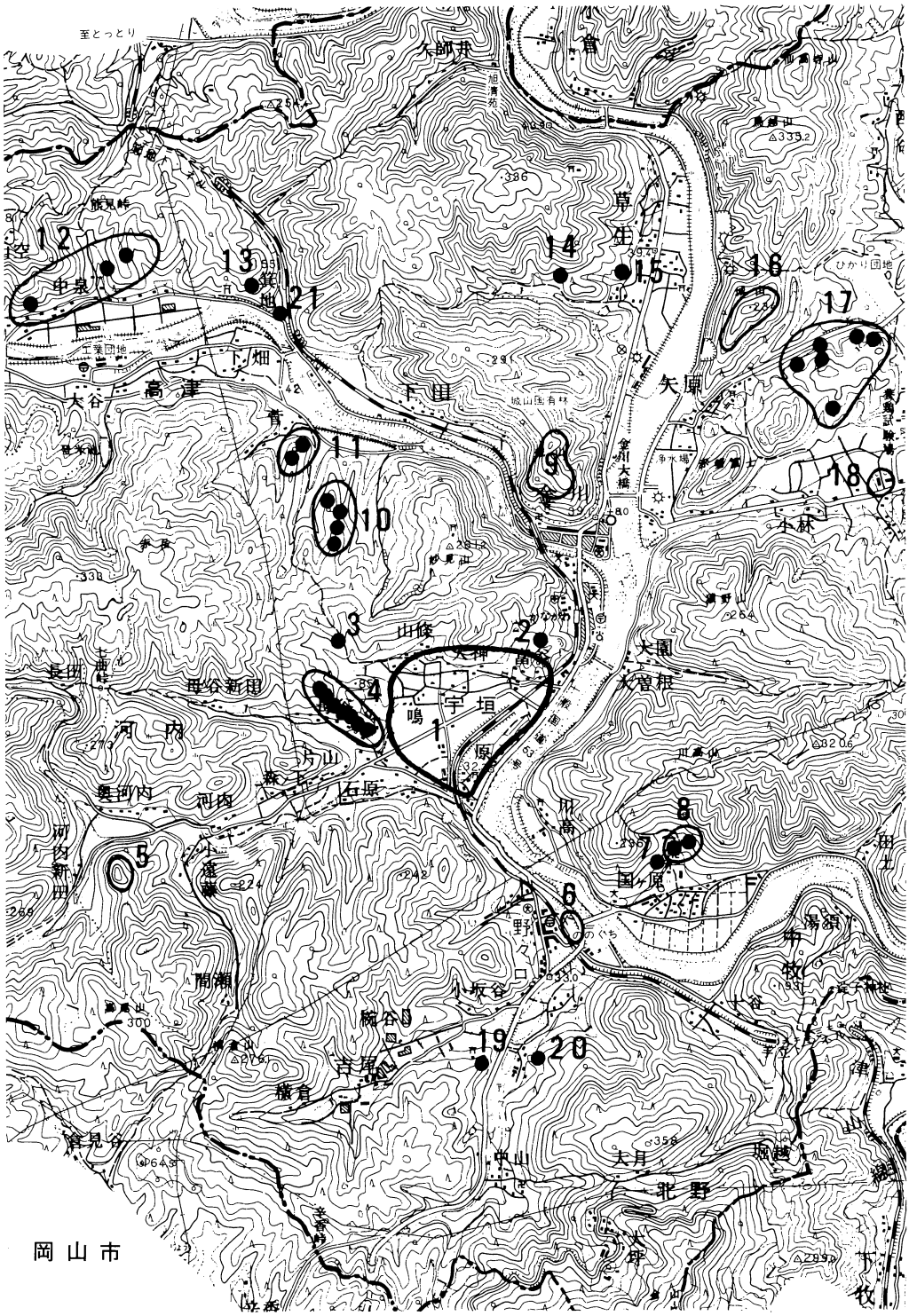
代以降の御津町の動向については，金川城，虎倉城，徳倉城に代表される中世の山城が現れるまで明らかではない。

現在の御津町は，昭和28年４月１日，旧御津郡牧山村，宇垣村，金川町，宇甘東村，宇甘西村，赤磐郡五城村，葛城村の７か町村が，牧山村の一部を除いて合併したものである。古代の行政区分で言えば，「倭名類聚鈔」に見える，備前（岐比乃美知乃久知）の８郡の内，赤坂（安加佐加）郡，津高（豆太加）郡の２郡に渡り，赤坂郡の６郷の内，宅美郷と葛木郷の部分が今の五城地区と葛城地区にあたり，津高郡４郷の内，今の宇垣地区・牧山地区は津高郷に，金川地区・宇甘東，宇甘西地区は健部郷に含まれる。旭川を境として東が赤坂郡であり，西が津高郡である。古文書の記録によれば，宝亀５年（774），津高郡郡家にあてた常地畠売買券に，津高郡菟垣村（宇垣村？）と見える。戸主は漢部阿古麻呂である。下っては正平10年（文和４年）（1355）に足利尊氏の名で備前国宇垣郷山条村を京都妙顕寺に寄進との記録も残されている。また，嘉吉２年（1442）宇垣郷，吉備津宮神領という記録も見える。

御津町は周囲を標高200ｍ～400ｍ級の山々に囲まれているため，町への出入りは，川添いの狭い谷筋を通るか，いくつかの峠越えに限られている。近世，美作往来と呼ばれた街道を辿って岡山から津山に至るには，辛香峠を越えて中山に入り，野々口を経て旭川右岸を北上する。約１㎞で眼前に宇垣沖積平野がひらけ，金川古墳の東を回って金川へ至る。金川は，戦国時代に松田氏の居城である金川城の城下町として拓かれ，交通の要衝として栄えた町である。金川から西に向きを転じ宇甘川沿いに約２㎞，菅から北へ箕地峠を越えて建部，福渡へと至る。現在では国道53号線が旭川沿いに整備されているが，以前はこの峠越えの道が主要な交通路であった。菅から峠を越えず西へ進めば加茂川に至る。加茂往来である。金川から東へは，伊田越えで現山陽町方面へ連絡されている。また，宇垣から山条を越え直接菅へ出る道もあり，「五輪だわ」と呼ばれている。この道沿いには，西奥遺跡，みそのお古墳群，菅古墳群と遺跡が密集している。宇垣から西へは，近年は新岡山空港設置に伴って県道御津妹尾線が新設され，岡山

周辺遺跡地図（縮尺＝50000分の１）

１.原遺跡	８.香雲寺古墳群	15.平野古墳
２.金川古墳	９.金川城址	16.熊谷城址
３.西奥遺跡	10.みそのお古墳群	17.岩井山古墳群
４.宇根山古墳群	11.菅古墳群	18.酒屋谷遺跡
５.徳倉城址	12.中泉古墳群	19.恋坂古墳
６.野々口遺跡	13.実盛山古墳	20.虫名古墳
７.国ケ原神社西古墳	14.いかとり古墳	21.雲生宅跡（刀工房跡）



第２図　周辺遺跡地図（S：１／50,000）

市日応寺から総社市方面への交通の便を利しているが，旧来は備中から入って来る峠越えの山道であった。この道を見下ろす標高約220mの山頂に徳倉城が築かれている。町内に20を数える中世の山城のほとんどが，交通の要所を押さえる形で主要な道すじを見下ろす場所に位置している。

松田元成が金川城に居城したのは，文明12年（1480）のことと伝えられる。松田氏は，永禄11年（1569）の落城まで，備前国西半の覇者として君臨した戦国大名である。備前法華宗（日蓮宗）は松田氏の外護を受けて隆盛し，その全盛期も，金川落城の頃までと言われる。明治になって，金川に妙覚寺（日蓮宗不受不施派祖山）が再興されるまで，近世においては禁教とされ弾圧を受けている。町内には，日蓮宗関係の文化財も多い。

このように，御津町においては，縄文時代晩期から，中世に至るまでの遺跡が認められ，その地形的特質からも，交通の要衝として，また地域文化の中心地として，歴史の一役を担って来た地域であると言えるだろう。

参考文献

（1）神原英朗他『岩井山古墳群』　岡山県御津町教育委員会　1976年
（2）平井　勝『金川古墳』　岡山県御津町教育委員会　1982年
（3）松本和男『原遺跡』　岡山県御津町教育委員会　1983年
（4）光永真一『西奥遺跡』　岡山県教育委員会　1986年
（5）御津町史編纂委員会『御津町史』　御津町　1985年
（6）赤坂町教育委員会（町史編集委員会 ）『赤坂町史』　赤坂町　1984年
（7）岡山県通史刊行会『岡山県通史』　永山卯三郎著　初版1930年

第2章　調査の経緯と経過

（1）　遺跡の位置

原遺跡は御津郡御津町宇垣に所在する。旭川と宇甘川の合流点から南へ約1㎞，旭川西岸に広がる町内最大の沖積平地に立地する。沖積地の四方は標高200ｍ～300ｍの山々によって囲まれ，一見して盆地状の地形をなしている。今回報告するのは，盆地の北端部にあたる山条，富谷の両地区についてである。両調査地区ともに，妙見山及び天神山山塊の山麓部にあたり，南向きの丘陵斜面上に所在している。

富谷調査地区は宇垣地区の東北部にあたる天神山東南部の南へ突出した尾根とその縁辺部に所在する。尾根の東にはかつて頂上に金川古墳の所在した丘陵を望む。

山条調査地区は，宇垣地区の北西部にあたり，妙見山から南へ張り出した緩斜面上に所在する。近隣の遺跡としては，昭和61年報告の西奥遺跡がある。

調査地区は，すべて耕作地（水田）として利用されていて，丘陵斜面上にあるため，階段状を呈している。

（2）　調査に至る経緯

原遺跡は，昭和33年に鎌木義昌，江坂進の両氏によって始めて紹介され，瀬戸内地方の晩期中葉の標式土器である「原下層式」土器を出土する遺跡として注目されてきた。昭和57年から昭和58年にかけて，文化課職員松本和男氏によって実施された発掘調査において，４つの大きな微高地が想定され，その遺跡範囲も沖積地のほぼ全域，約354,000㎡におよぶ広大なものであること，また遺跡の性格も縄文時代晩期から中世までの長期間にわたる遺物を出土する大規模な複合集落址であることが確認報告された。

今回発掘調査を実施した宇垣山条，富谷の両地区は，昭和57年に着工した，御津町県営圃場整備事業河内第五工区にあたり，昭和61年の確認によって拡大された原遺跡の遺跡範囲に含まれるため，圃場整備事業に伴って掘削を受け遺構の消失が予測される地区および用排水路部分について，遺跡の存否の確認と記録保存のため発掘調査を行うことになった。調査は御津町教育委員会が，昭和62年度国庫補助を受けて実施した。

（3）　調査の方法と経過

発掘調査は，昭和62年４月７日に開始し，昭和63年３月31日まで実施した。

調査地区は，圃場整備事業に伴って削平される耕作地ごとに，Ｆ－１，Ｆ－２，Ｆ－３……と仮称し，各調査区ごとに順次調査を実施した。

調査は，Ｆ－３から始め，Ｆ－１，Ｆ－２，Ｆ－４，Ｆ－５，Ｆ－６，Ｆ－９，Ｆ－10，

F－11，F－8，F－7，F－12，F－13，F－16，F－14の順で行った。

山条地区では，調査地区の遺構，包含層，土層の堆積状況等の確認のため，まず丘陵斜面に沿って南北に，F－7，F－6，F－3・4を横切る形でトレンチ（T－1）を設定した。全調査地区について言えることであるが，丘陵斜面上に耕作地を水平に造成するため，斜面の高位側（北側）はかなり削平を受けていて，消失した遺構もあるものと思われ，遺構の密度も低い。逆に低位側（南側）には厚く造成土が堆積している。造成土として遺物を含んだ土を使用するため，古い時代の遺物が上層から出土する地区が多い。トレンチ（T－1）から出土した遺物は，サヌカイトの小片，須恵器，土師器，中世の須恵質甕等であるが，特に南端部の造成土中から，素弁八弁蓮華文の軒丸瓦の瓦当部分とともに表面に布目，裏面に縄目文，格子状文の叩き目をもつ平瓦を整理箱約3箱分出土した。この地区からの瓦の出土は，付近では以前から知られていて，耕作土，畦畔等で採集されることもあった。

調査区全体としては，弥生時代～中世の遺物がほぼ全域でみられたが，造成土中からの出土が多く，検出された遺構は弥生時代～中世のもので，中世のものが大半を占める。出土遺物の内，量的には古代の瓦が最も多く，蓮華文の軒丸瓦，唐草文の軒平瓦を含む，丸瓦，平瓦等整理箱約25箱分を出土している。

（重機の使用について）

耕作土，畦畔部分および地区によっては造成土の移動について重機を使用した。F－1，F－2においては耕作土および造成土，F－5，F－6，F－11においては耕作土および南側畦畔部分，F－7，F－8，F－12，F－13，F－14，F－16においては，耕作土，畦畔および旧耕作面までの造成土について，重機によって移動を行った。

日誌抄

昭和62年

4月7日　作業用仮設テントの設置および発掘器材の運搬作業。

8日　山条トレンチ（T－1）設定および器材保管小屋設置。

9日　トレンチ（T－1)発掘作業開始。

17日　F－3発掘作業開始。T－1断面実測。

23日　F－3発掘作業。T－1位置図作成。

5月16日　F－3発掘作業。平面実測および写真撮影。

26日　F－1重機作業開始。

6月2日　F－1発掘作業開始。F－2重機作業開始。

25日　F－1発掘作業。平面実測および写真撮影。

29日　F－2完掘写真撮影。

30日　F－2平面実測。F－1写真撮影。

7月1日　F－1平面実測補足。

4日　F－2排水および埋めもどし作業。

16日　F－4排水作業。

22日　F－4耕作土移動。

23日　F－4掘り下げ開始。

8月4日　F－4発掘作業。遺構検出。

12日　F－4発掘作業。F－9重機作業開始。（耕作土移動）

19日　F－4発掘作業。F－5，F－6重機作業。

20日　F－4発掘作業。F－7重機作業。

21日　F－4発掘作業。F－10重機作業（耕作土移動）。

24日　F－5発掘作業開始。F－10重機作業。

25日　F－4発掘作業。平面実測。

9月4日　F－4発掘作業。写真撮影。

5日　F－4発掘作業。平面実測。

7日　F－4発掘作業終了。

10日　F－5発掘作業。遺構検出。F－6発掘作業開始。

14日　F－5発掘作業。遺構掘り上げ。写真撮影。

16日　F－5平面実測。東壁断面実測。F－6発掘作業開始。

↓　F－6発掘作業。掘り下げ。遺構検出。遺構掘り上げ。平面実測。断面実測。ポ

イント配置図作成。写真撮影。平面実測。

10月７日　Ｆ－６発掘作業終了。写真撮影。平面実測。

８日　Ｆ－９発掘作業開始。

14日　Ｆ－９発掘作業終了。写真撮影。平面実測。Ｆ－10トレンチ発掘作業。

15日　Ｆ－10トレンチ遺構検出。遺構掘り上げ。写真撮影。作業用仮設テントの移動。

17日　Ｆ－10発掘作業開始。

18日　Ｆ－10トレンチ平面実測。写真撮影。

20日　Ｆ－10発掘作業。遺構掘り上げ。平面実測。写真撮影。Ｆ－11発掘作業開始。

22日　Ｆ－10発掘作業終了。平面実測。写真撮影。

Ｆ－11発掘作業。掘り下げ。遺構検出。遺構掘り上げ。断面実測。平面実測。ポイント配置図作成。写真撮影。

11月18日　Ｆ－11発掘作業。平面実測。Ｆ－15トレンチ発掘作業開始。

19日　Ｆ－11発掘作業。写真撮影。Ｆ－15トレンチ発掘作業。

20日　Ｆ－11発掘作業。Ｆ－８重機作業開始。

24日　Ｆ－８発掘作業開始。

25日　Ｆ－８発掘作業。Ｆ－11発掘作業終了。写真撮影。平面実測。

12月７日　Ｆ－８平面実測。Ｆ－７トレンチ発掘作業。

８日　Ｆ－８平面実測。Ｆ－７トレンチ発掘作業。断面写真撮影。

11日　Ｆ－８発掘作業。Ｆ－７重機作業開始。

13日　Ｆ－８発掘作業終了。写真撮影。

14日　Ｆ－８平面実測。Ｆ－７発掘作業開始。

Ｆ－７発掘作業。掘り下げ。遺構検出。遺構掘り上げ。写真撮影。平面実測。断面実測。ポイント配置図。

２月６日　Ｆ－７発掘作業終了。写真撮影。作業用仮設テントの移動。

７日　Ｆ－12発掘作業開始。

25日　Ｆ－12発掘作業終了。写真撮影。平面実測。Ｆ－16発掘作業開始。

Ｆ－16発掘作業。掘り下げ。遺構検出。遺構掘り上げ。断面実測。写真撮影。平面実測。

３月５日　Ｆ－16発掘作業終了。写真撮影。平面実測。Ｆ－13発掘作業開始。

Ｆ－13発掘作業。断面実測。写真撮影。平面実測。Ｆ－11住居ピット掘り上げ。平面実測。写真撮影。

12日　Ｆ－13発掘作業。遺構検出。Ｆ－11住居掘り上げ。写真撮影。平面実測。

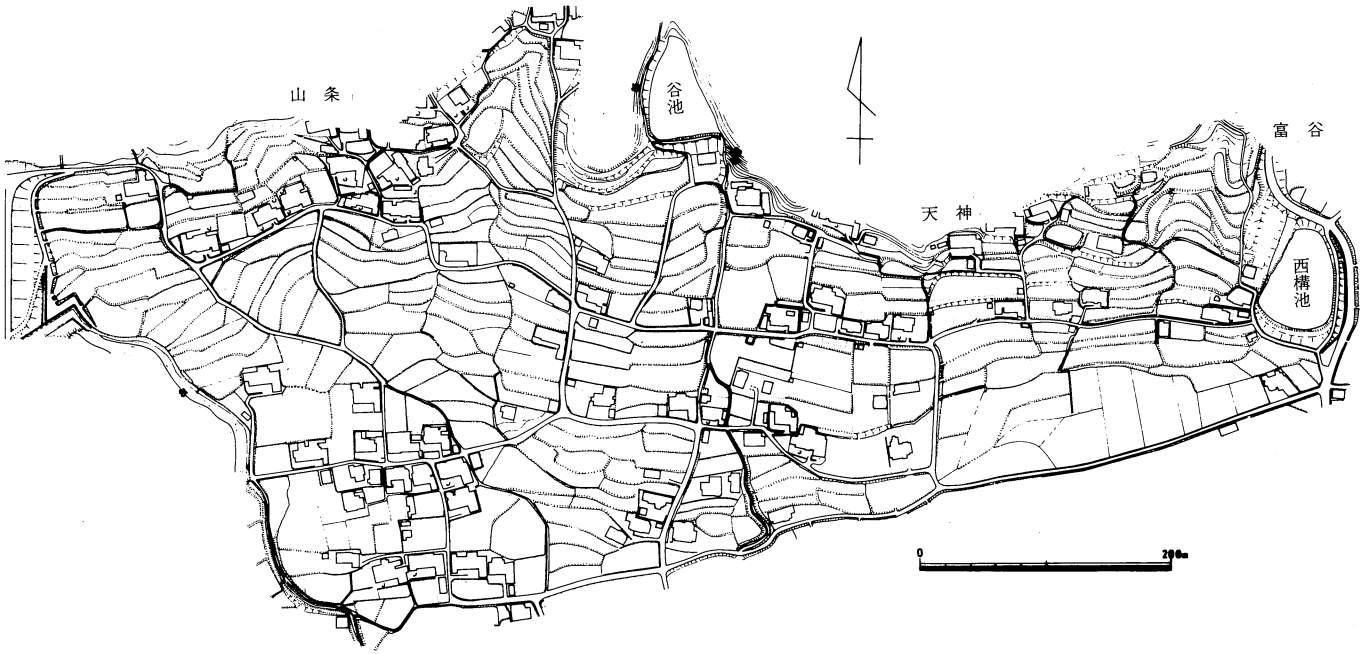
15日　Ｆ－13発掘作業。遺構検出。写真撮影。遺構掘り上げ。Ｆ－11発掘作業終了。遺構検出。遺構掘り上げ。平面実測。写真撮影。

16日　Ｆ－13発掘作業終了。写真撮影。平面実測。Ｆ－14発掘作業開始。

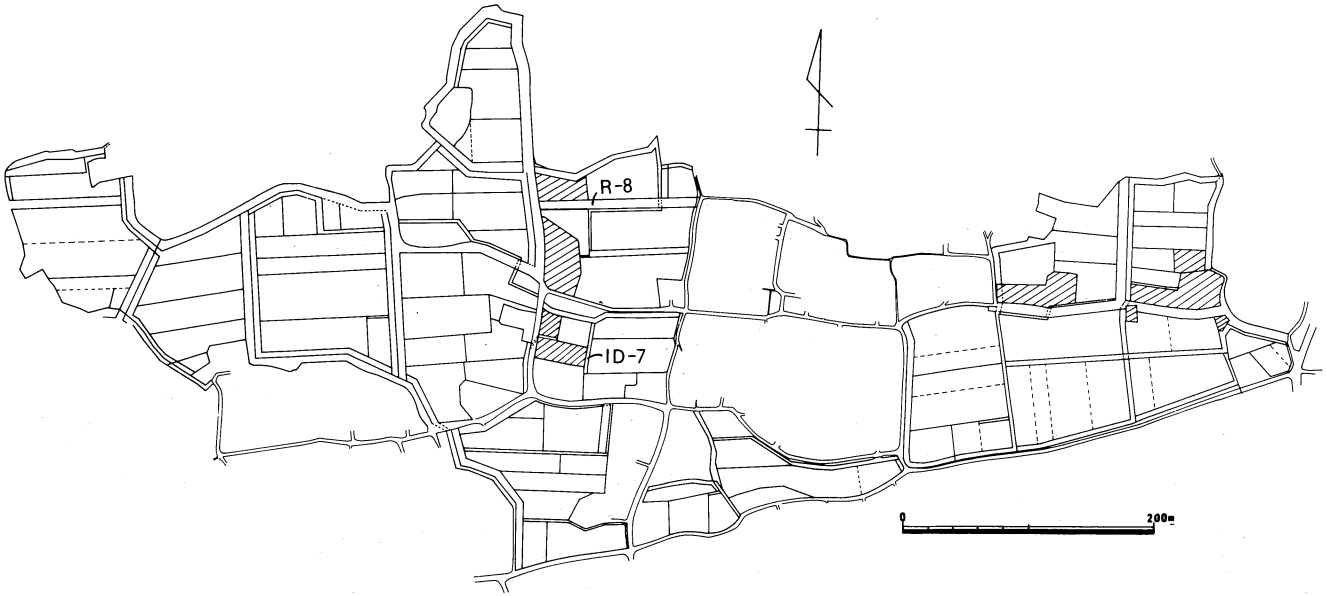
21日　Ｆ－14発掘作業。Ｆ－３・４とＦ－11の間，Ｆ－６とＦ－９の間の既設道路下部分発掘作業開始。

24日　既設道路下部分作業終了。

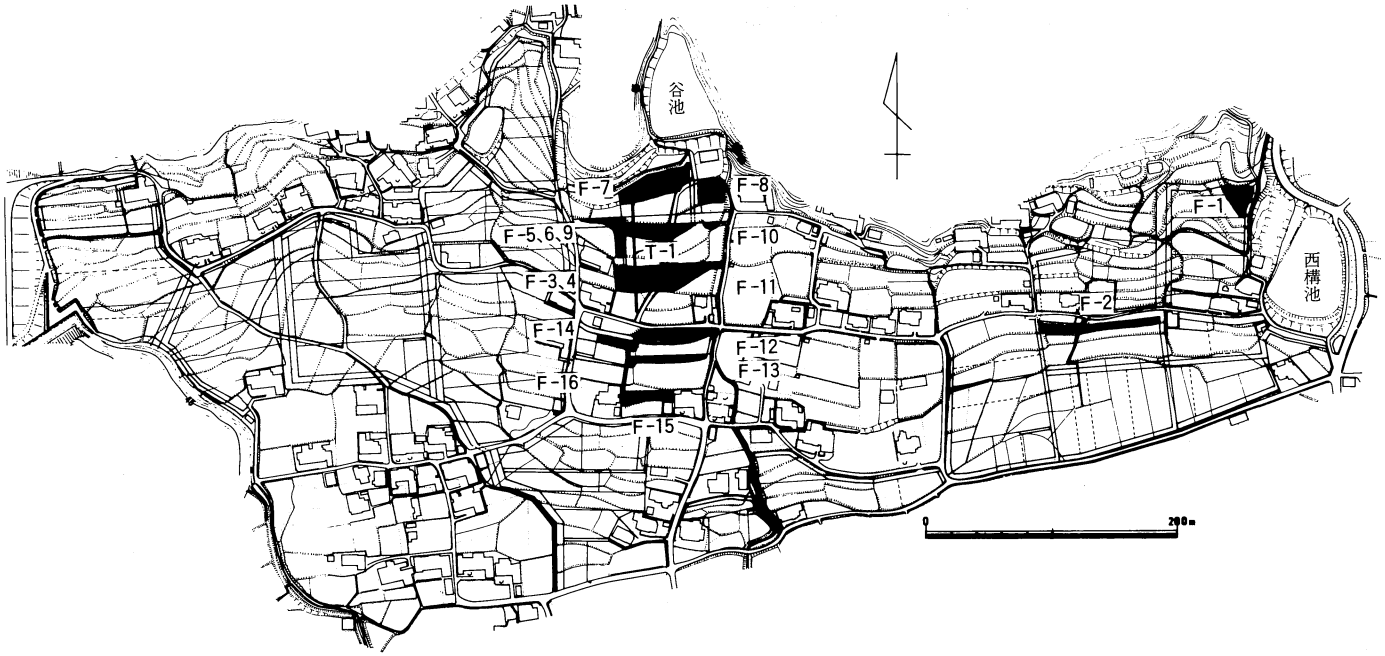
31日　Ｆ－14発掘作業終了。写真撮影。平面実測。発掘器材運搬。作業用テント，器材保管小屋撤収。



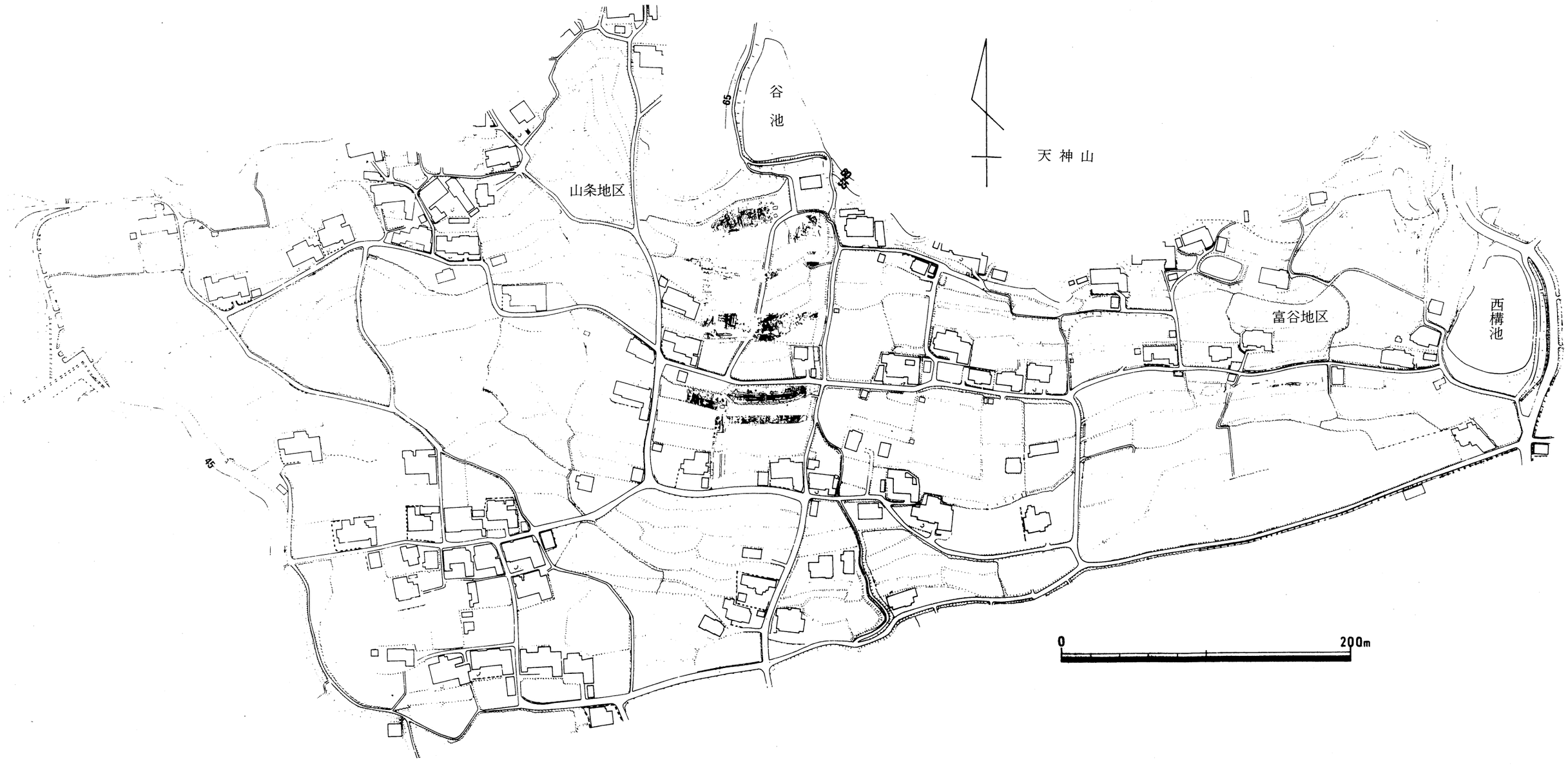
第3図　原遺跡、山条・富谷地区地形図（1／6,000）



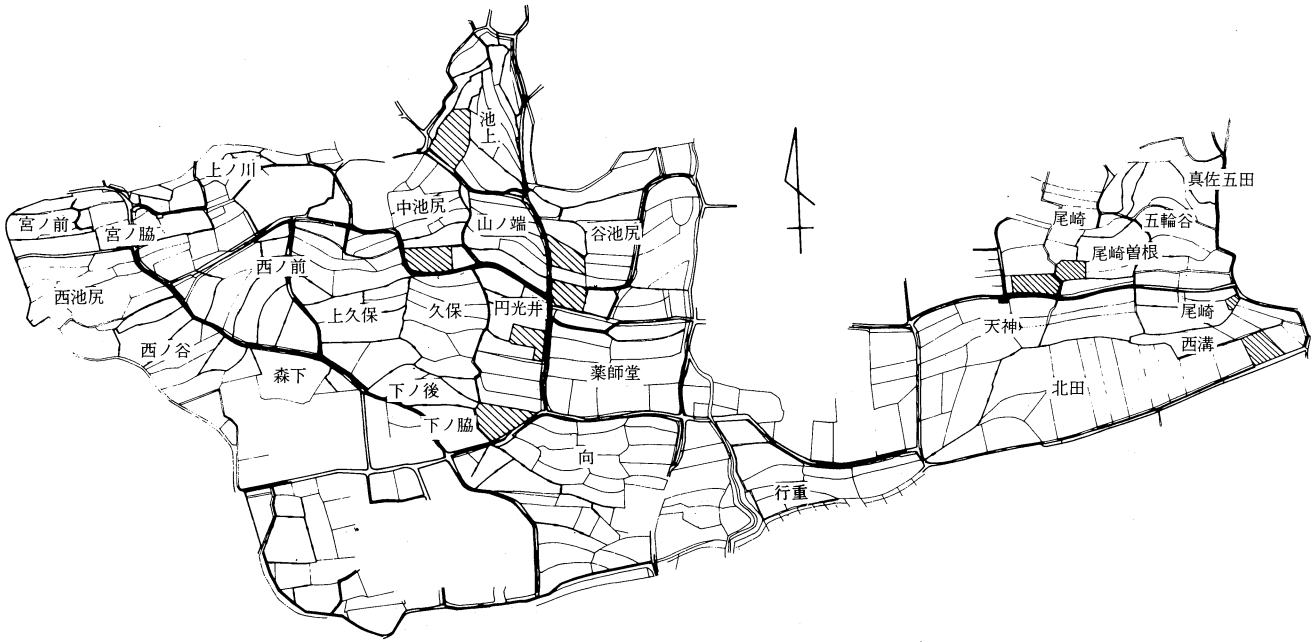
第４図　第５工区圃場整備区画図（１／6,000）



第５図　原遺跡、山条・富谷地区調査区全図（１／6,000）



第７図　遺構配置図（S：１／3,000）



第６図　原遺跡、山条・富谷地区字名図（１／6,000）

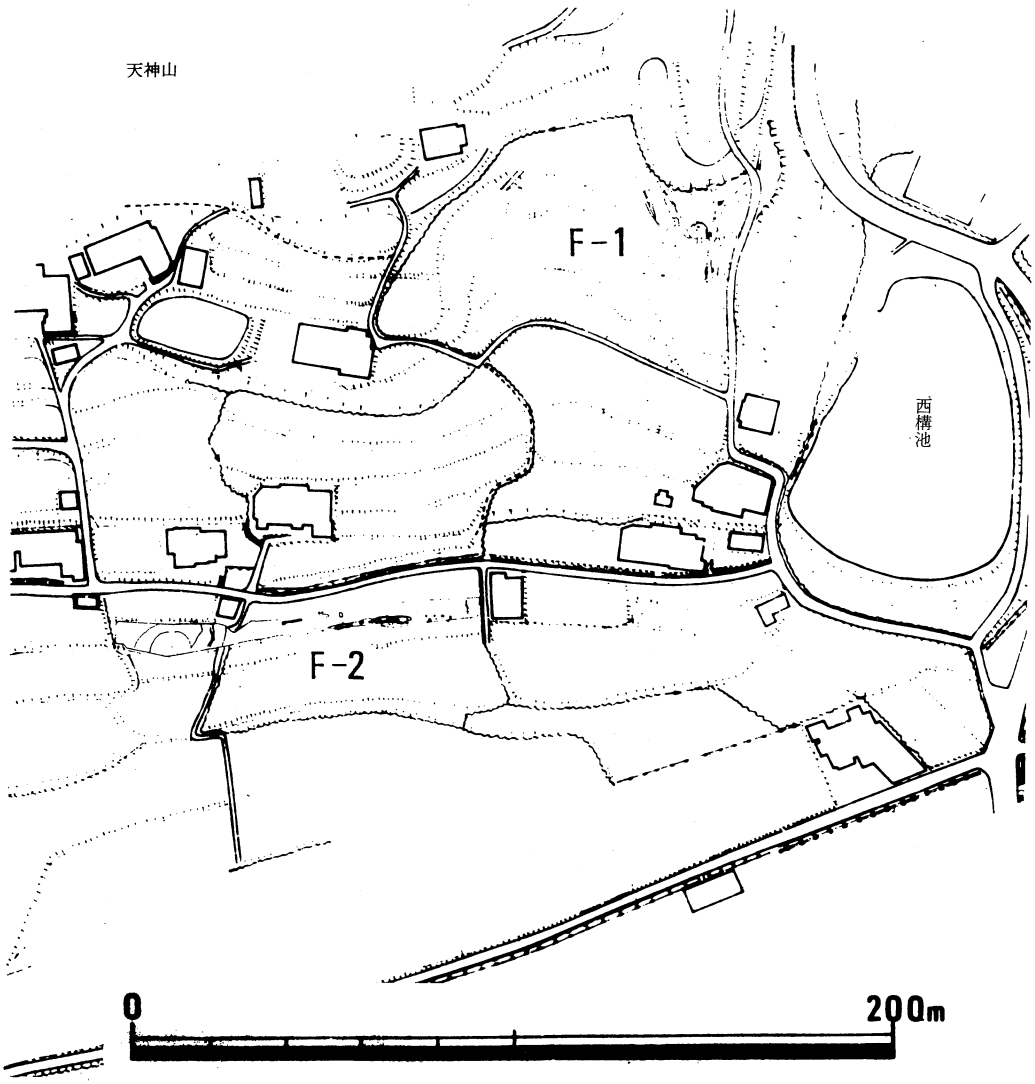
第3章　調 査 区 の 概 要

1．富谷地区

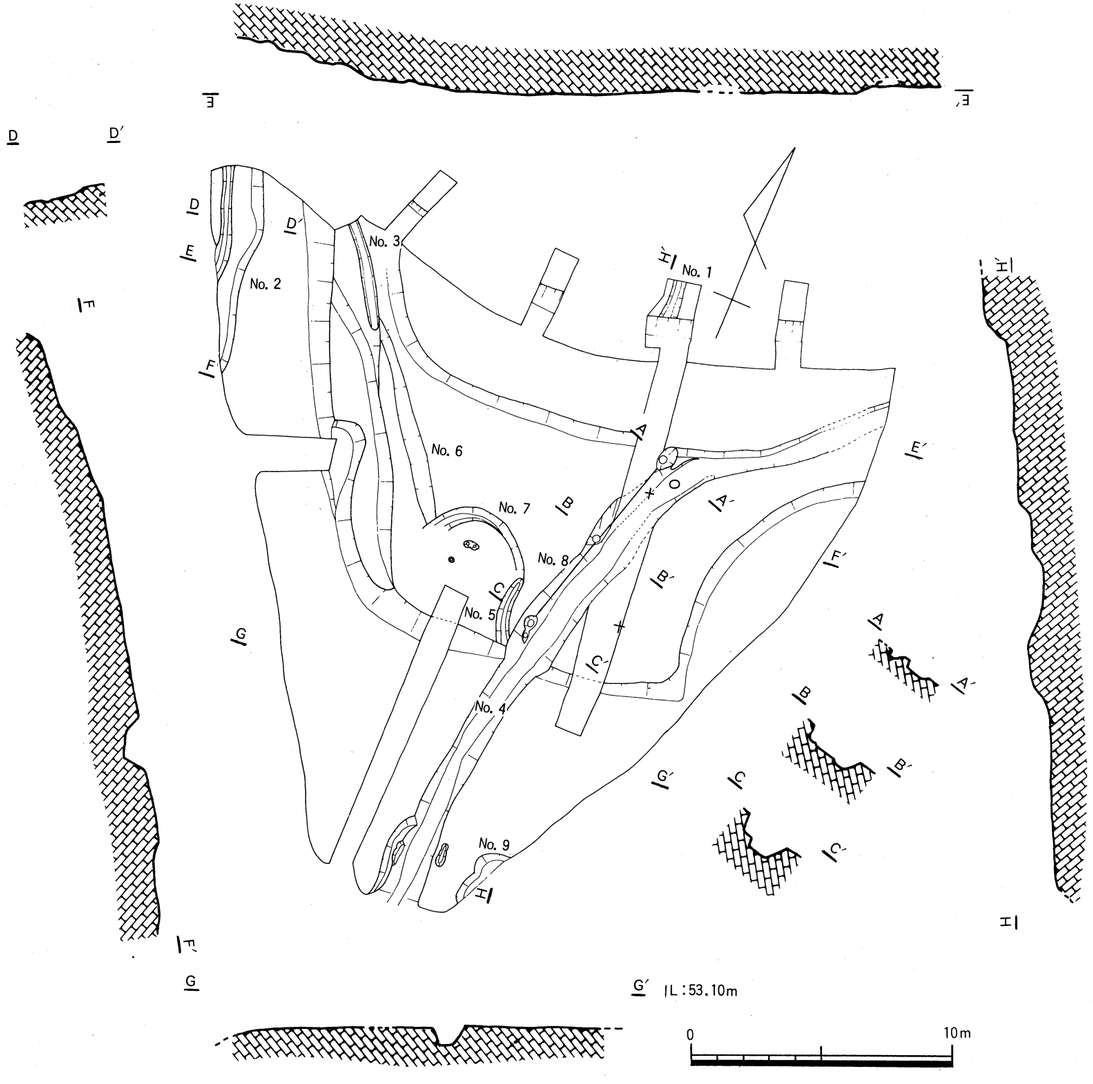
F－1

a．調査区概要

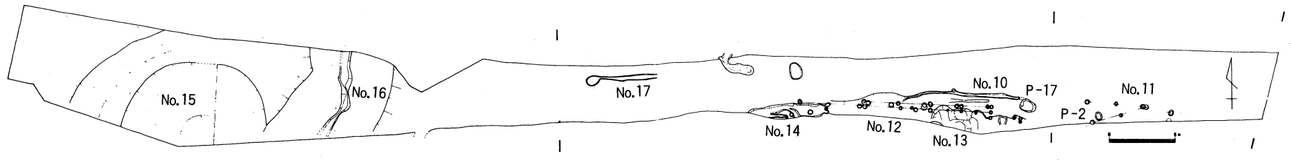
天神山から南東に張り出した尾根の南端にあたり，調査前は2段の水田として耕作されていた。調査区東部は現農道によって切られ，東側斜面はかなりの急傾斜である。他調査区についても全般に言えることであるが，造成によって斜面上部にあたる北側では地山を削平して行わ



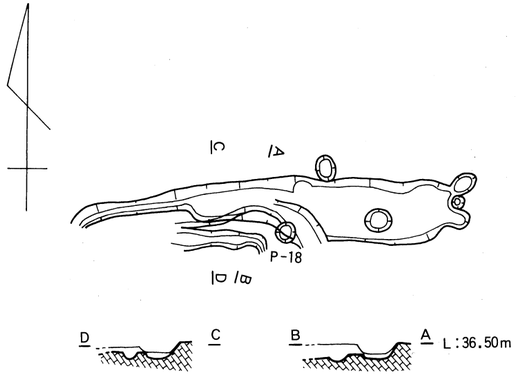
第8図　富谷地区遺構配置図（S：1／2,000）



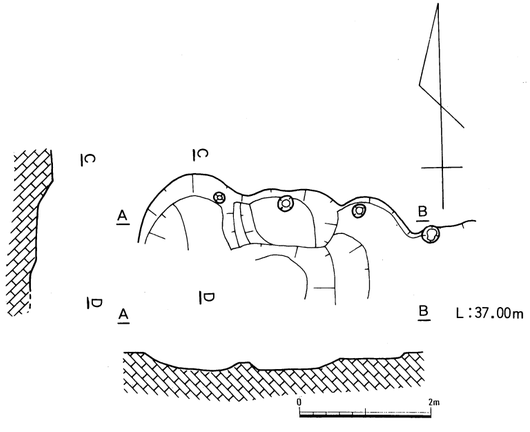
第９図　Ｆ－１、遺構配置図（１／200）



Ｆ－２、遺構配置図（１／300）



No.14　住居（？）



No.13　土　　壙

れており，その部分については，すでに消失している遺構もあるものと思われる。この調査区については，尾根上にあるため造成による掘削も大胆に行われており，地山面は，はっきりした段状を呈している。遺構は，造成土を取り除いた面で一括して検出した。（第９図）

ｂ．遺構

No. 1 溝

Ｆ－１の北側上段にいれた４本のトレンチの内，Ｔ－２で検出された，幅約50ｍ，深さ約15～29ｍを測る溝である。遺物はなく，時期は近世あるいは近代のものと思われる。

No. 2 溝

調査区西端に位置し，流方向は北から南で，西寄りにやや弧を描いている。幅約30～40ｍ，深さ約５～９ｍを測る。遺物は，埋土中から備前焼きと思われる小片の他少量を出土している。時期は近世のものと考える。

No. 3 溝

調査区の西北に位置する。流方向は北西から南東で，幅約40～50ｍ，深さ約６～10ｍを測る。遺物は出土していないが，埋土からみてNo. 2 と同時期のものと考える。

No. 4 溝

調査区を北東から南へくの字状に横切るもので，耕地造成によって掘削を受けている。幅約120～190ｍ，検出面からの深さ約85ｍを測る。南寄りの位置から須恵器片を出土しているが，時代は明らかではない。

No. 5 溝

調査区ほぼ中央に位置し，南側は掘削によって消失している。幅約50ｍ，検出面からの深さ約８ｍを測る。

No. 6 溝

No. 3 溝の南端から南東へ延び，No. 7（住居？）によって切られている。幅約30～70ｍを測る。

No. 7（住居？）

調査区中央部に位置する。全体に削平を受けており南側はすでに消失しているが，壁体溝（？）かと思われる半円形の浅い溝（幅約30～70ｍ，深さ約２ｍを測る。）とそれに伴うと思われるピットを検出した。（第11図）

No. 8 柱穴列

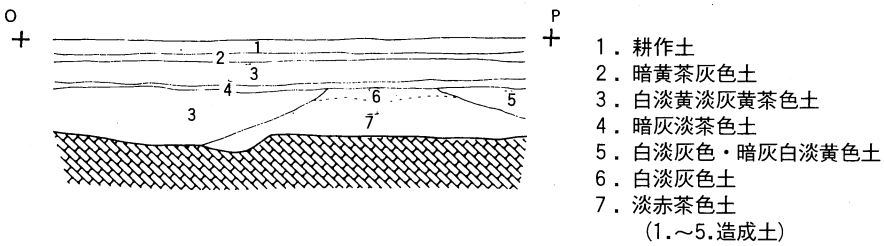
調査区ほぼ中央に位置し，No. 4 溝を切っておよそ南北に並ぶ。柱穴間約400ｍを測る。

No. 9（土壙？）

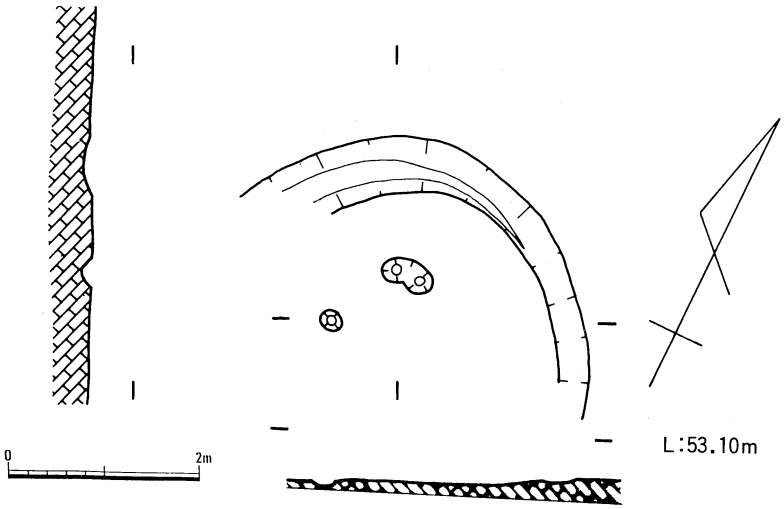
調査区南東端に位置する。全体の平面形は不明であるが，検出された部分は，不整の半円形

を呈している。遺物は出土していない。

また，調査区東部に約10mに渡って，人為的に掘り窪めたものと思われる半月形の落ち込みが認められるが，遺物も伴わず，時期，意図ともに明らかでない。



第10図　F－1土層断面図（S：1／80）



第11図　F－1No. 7住居(?)(S：1／80)

F－2

a．調査区概要

F－1の南西に位置し，天神山山麓部の南縁部にあたる。東西に細長い調査区である。現行の水田は2面の旧水田を1面に造成したものであり，南に低い階段状を呈していた。F－1同様，調査区北側は，地山まで削平を受けている。遺構は調査区の南部に集中し，中央部からや

や東寄りを中心に検出された。

b．遺構

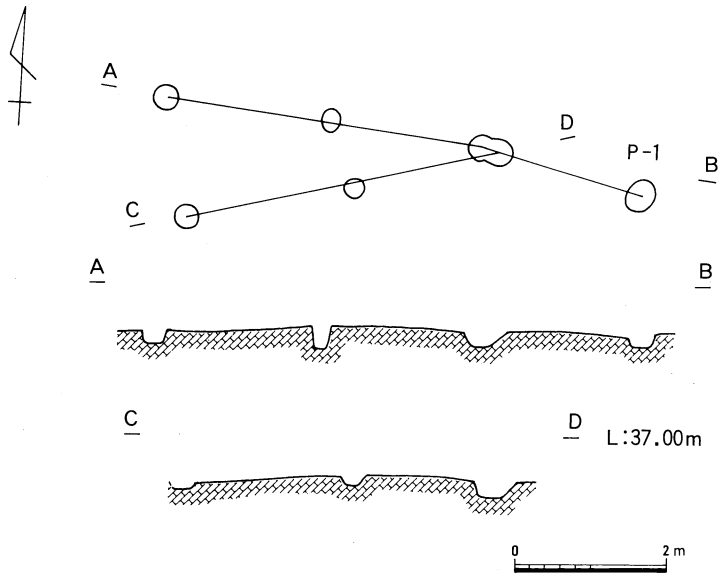
No.10溝状遺構

調査区の中央やや東寄りに位置し，ほぼ東西に走る。幅約15～25m，深さ約4～8mを測る。中央が高く東西に向かって傾斜している。高低差は東で約－3m，西で約－7mを測る。埋土中から須恵器，土師器の小片を出土している。

No.11柱穴列

調査区東部に位置し，柱穴間約220mを測る。南側に延びる可能性もあるものと思われる。P－1から早島式土器と思われる口縁，高台の小片等を出土している。

また，P－2からも早島式土器の小片，土師器の高杯（第14図・13）等を出土している。（第12図）

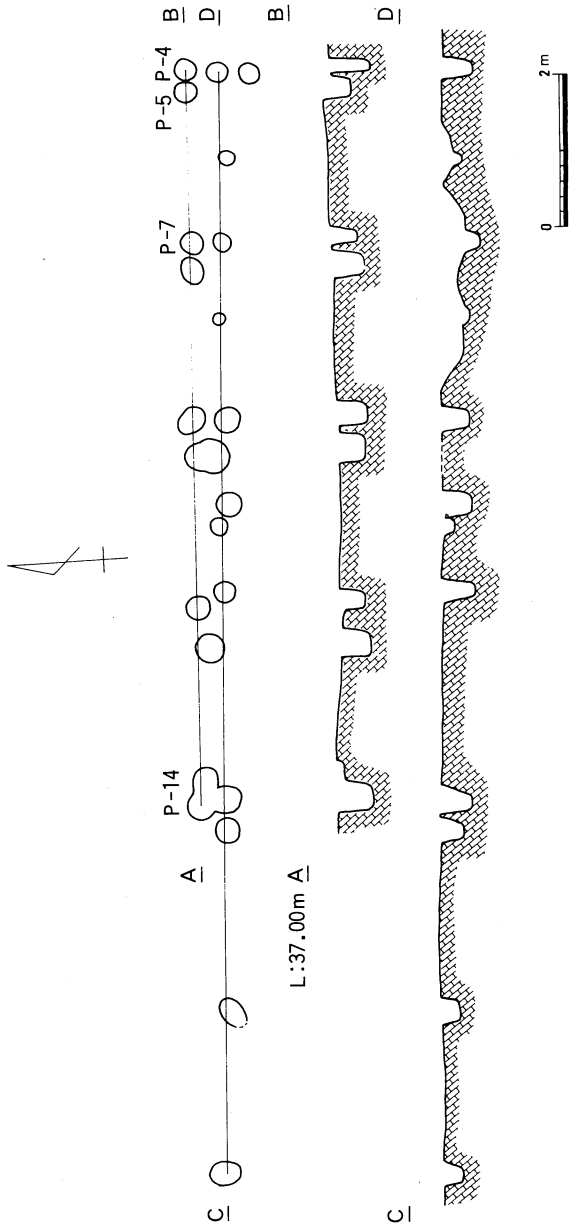


第12図　F－2No.11柱穴列（S：1／100）

No.12柱穴列

No.10溝状遺構の南に位置し，ほぼ東西に並び，柱穴間は約200～250mで，230mを測るものが多く，ひとつの基準を示すものと思われる。No.11同様，南へ建物として拡張される可能性も考えられる。P－4から土師器の小皿片，P－5からは硬質の緑釉陶器の椀口縁（12）を，P－7から土師器の皿口縁，P－14からは須恵器高杯（14）等を出土している。

No.12は遺物としてはNo.11よりも古い時期のものを出土しているが，ともに中世の枠でと



第13図　F－2No.12柱穴列（S：1／100）

らえられるものと思う。その時期の上限は12C後半頃と考えたい。（第13図）

No.13土壙

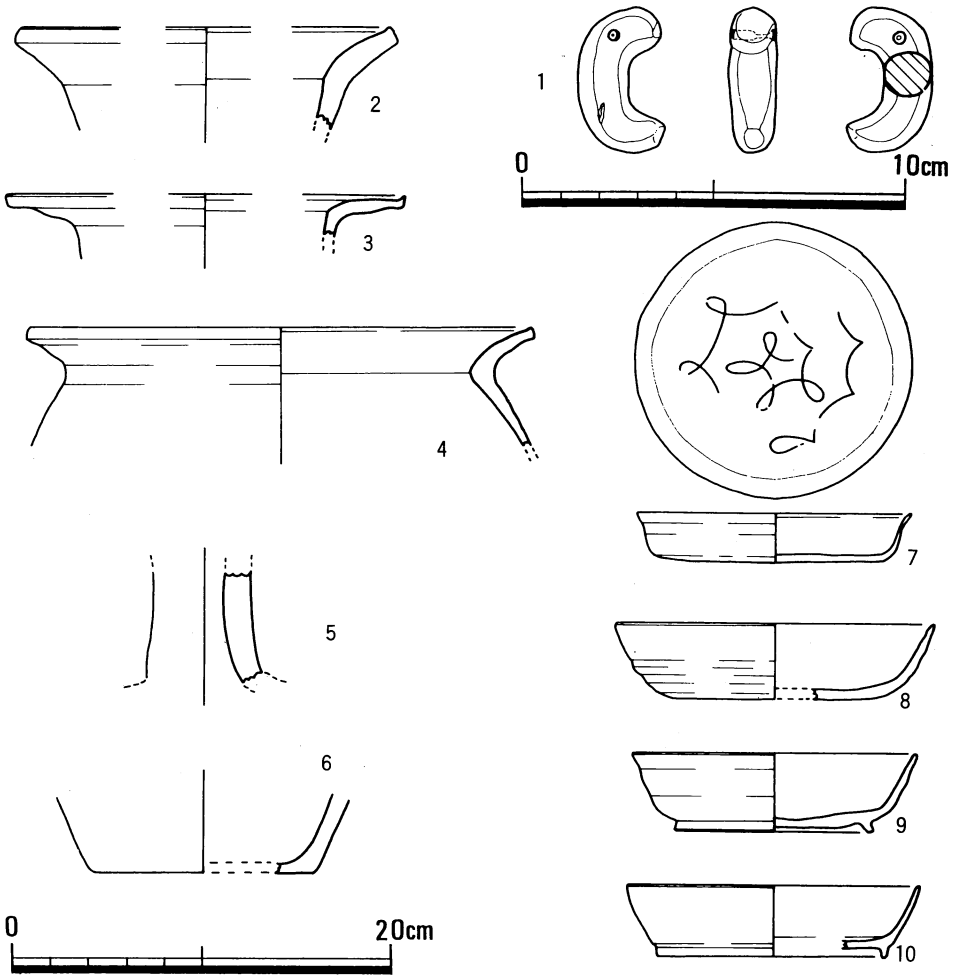
No.12柱穴列の南側に位置し，重なって検出された複数の土壙である。規模は調査区外に渡っており，全体の平面形等は不明である。検出された部分については，東西約400m，深さ約40mを測り，埋積土中から，メノウ製の勾玉（1），須恵器杯（8～10），長頸壷の頸部（5），底部（6），土師器甕口縁（4），等々の遺物を出土している。遺構の時期は，遺物から見て，7C後半～8Cを上限と考える。（第9図）

（第14図）において，（2），（3），（7），はともに土師器である。（7）は底面に丹（？）による線描きで幾何学的模様が描かれている。（図版24）

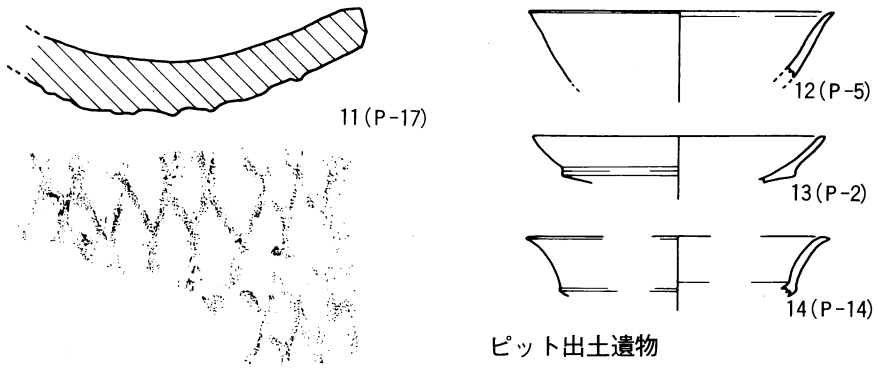
No.14（住居？）

No.13土壙の西に位置する。No.13同様南側に延びる遺構であり，検出された部分から隅丸方形の住居となる可能性が考えられる。その場合，遺構内に検出した溝は，壁体溝になるものと思われる。

遺物は，遺構東部から須恵器の杯（高台なし）（17），杯蓋，杯口縁（18），杯高台，高杯脚部（19，20）土師器の甕口縁（15）等を出土している。また，P－18からは須恵器片を出土し，柱根の残存が認められた。遺構の時期は，No.13土壙と同時期のものと考える。（図版24）



No. 13土壙出土遺物

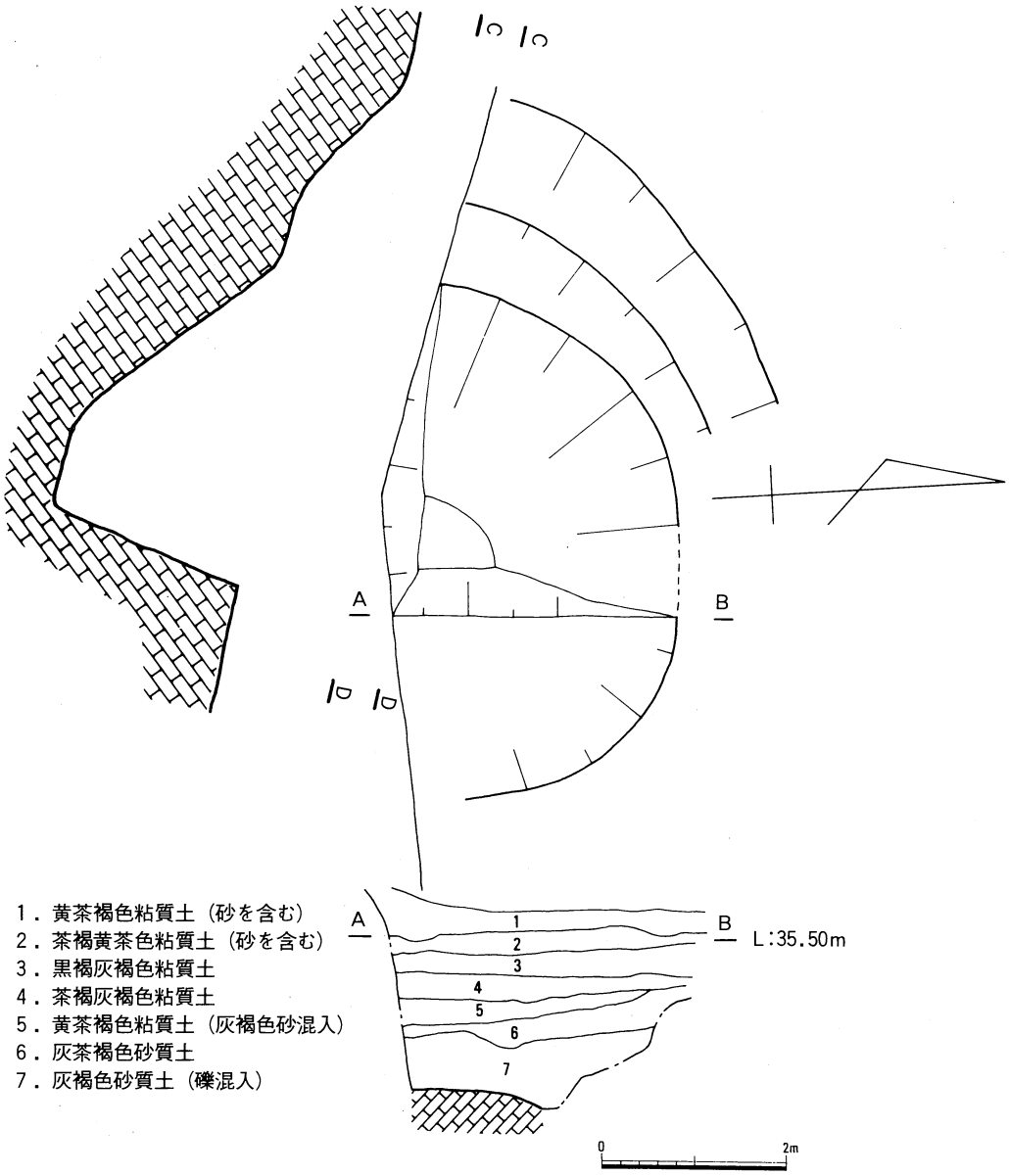


ピット出土遺物

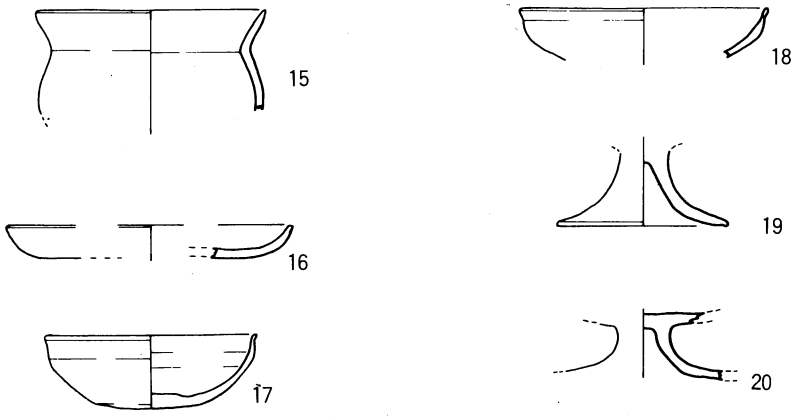
第14図　F－2出土遺物実測図（1／4）

No.15（？）

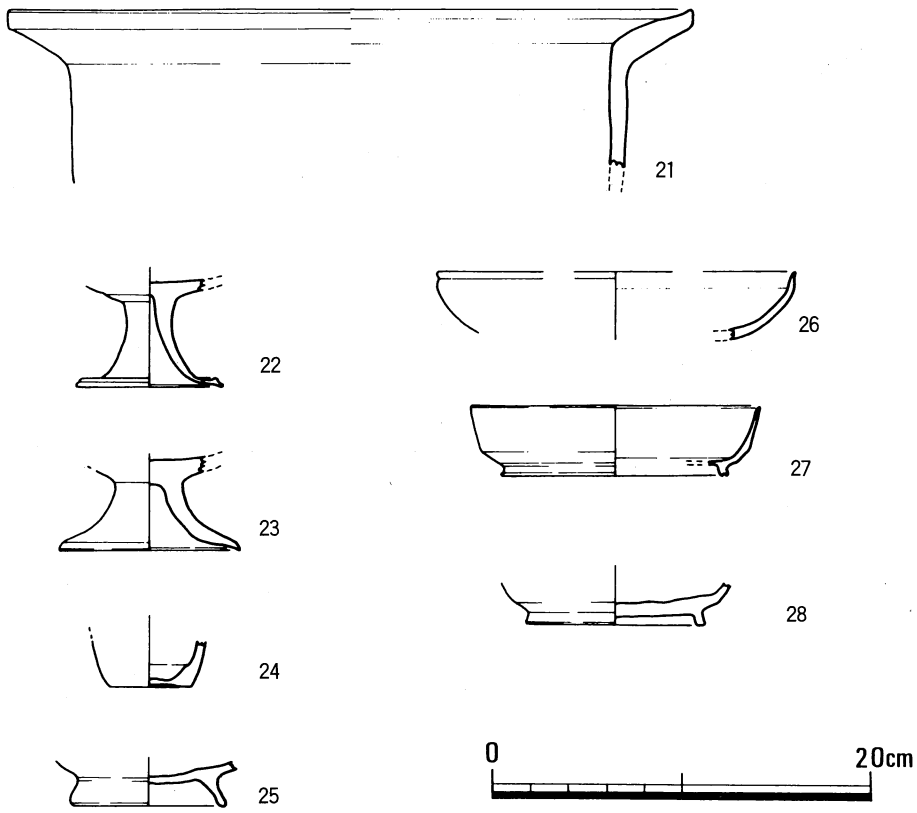
調査区西部に位置する検出部半月形を呈する落ち込みである。東西約10m，南北約６ｍを測り，なお南へ続くものと思われる。落ち込み部分を半掘し，人為的遺構であると思われるが，全体の規模およびその意図ともに不明である。埋積土中からの出土遺物なし。（第15図）



第15図　F－2 No. 15遺構（S：1／80）



No. 14住居（？）出土遺物



第16図　F－2造成土出土遺物

No.16溝

No.15の東に位置し，ほぼ南北に走る。幅約20～100㎝，深さ約30～40㎝を測る。遺物は出土していない。No.15の上層に位置する。

No.17溝

調査区ほぼ中央北側に位置する。東西方向に走り，幅約20～40㎝，深さ約４～７㎝を測る。流方向は東から西，遺物は伴っていない。

ｃ．遺物

（第14図）（11）はＰ－17出土の表面に布目，裏面に斜格子の叩き目を有する瓦である。（12）は硬質の緑釉陶器椀の口縁である。色調は暗緑色，断面は暗灰色を呈する。造成土からの出土も含めて全体的に見ると，古墳時代から中世に至る幅広い遺物を出土している。調査位置がかなり急な丘陵斜面の端縁部に位置することもあり，遺構は調査区より南を中心に延び広がるものと思われる。（図版24）

２．山条地区

調査地区は，妙見山山塊から南へ張り出した麓部の穏やかな丘陵上に所在している。北側には小さな舌状の尾根を，北東部には天神山を控えている。この尾根と天神山との間の谷間に堰を設け，用水として供している。谷池と称する。堤が改修され，現在の形となったのは近代のことであり，もとの築造の年代は明らかでない。おそらくこの地区の本格的な水田の経営，耕地造成の時期と重なるものと思う。

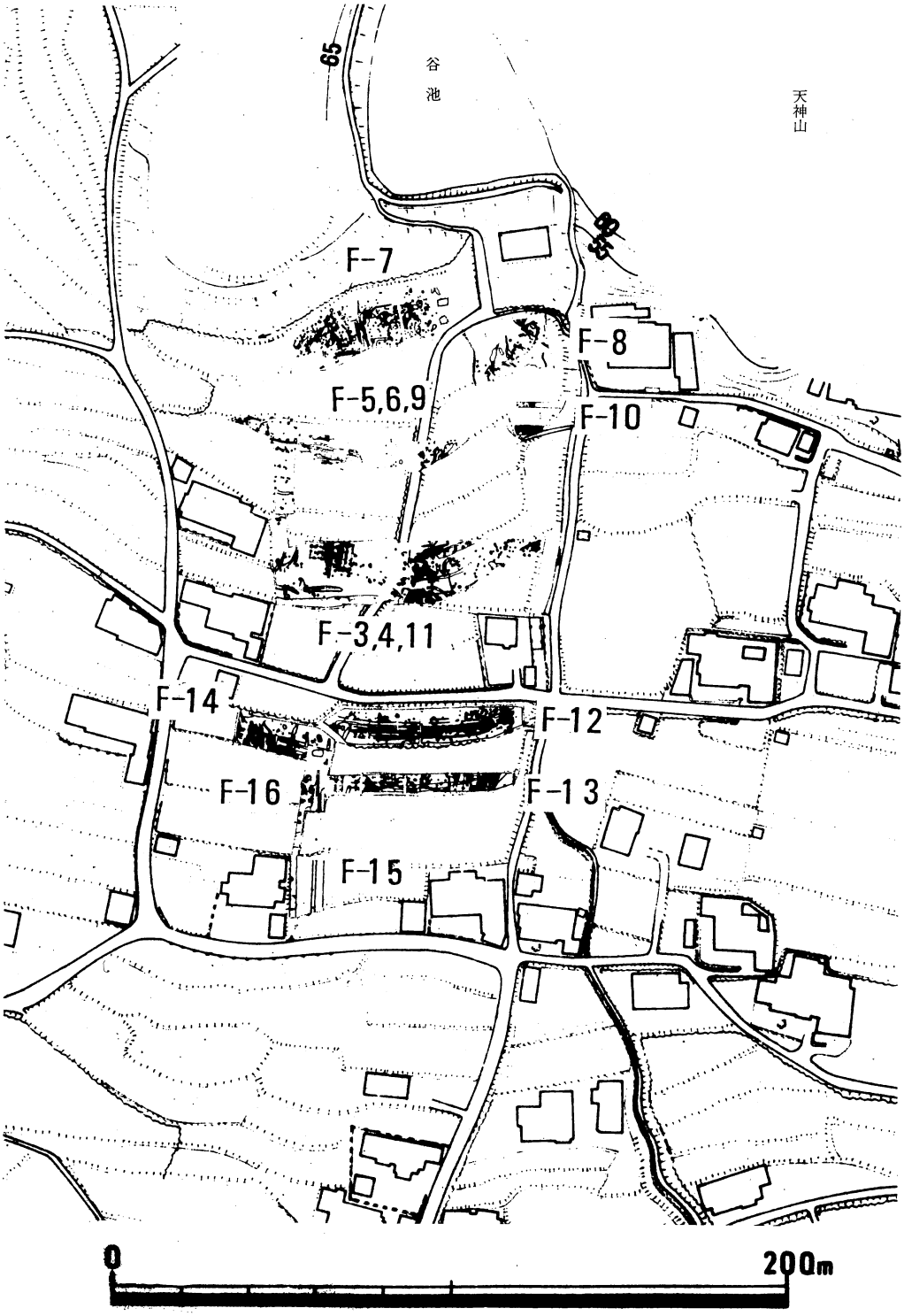
耕地造成は，斜面上部にあたる北側を削平し，斜面下部にあたる南側へと累積させて行われている。このため，各調査区の北側については地山まで掘削を受け，上部を削り取られた遺構も多く，消失した遺構も予想される。造成土は攪乱されており，上層に下層より古い遺物を出土する地区が多い。

Ｆ－３，４，11（調査区Ｆ－３，Ｆ－４，Ｆ－11および既設農道の下部分は，互いに接する地区であるため，ここではまとめて取り上げる。）

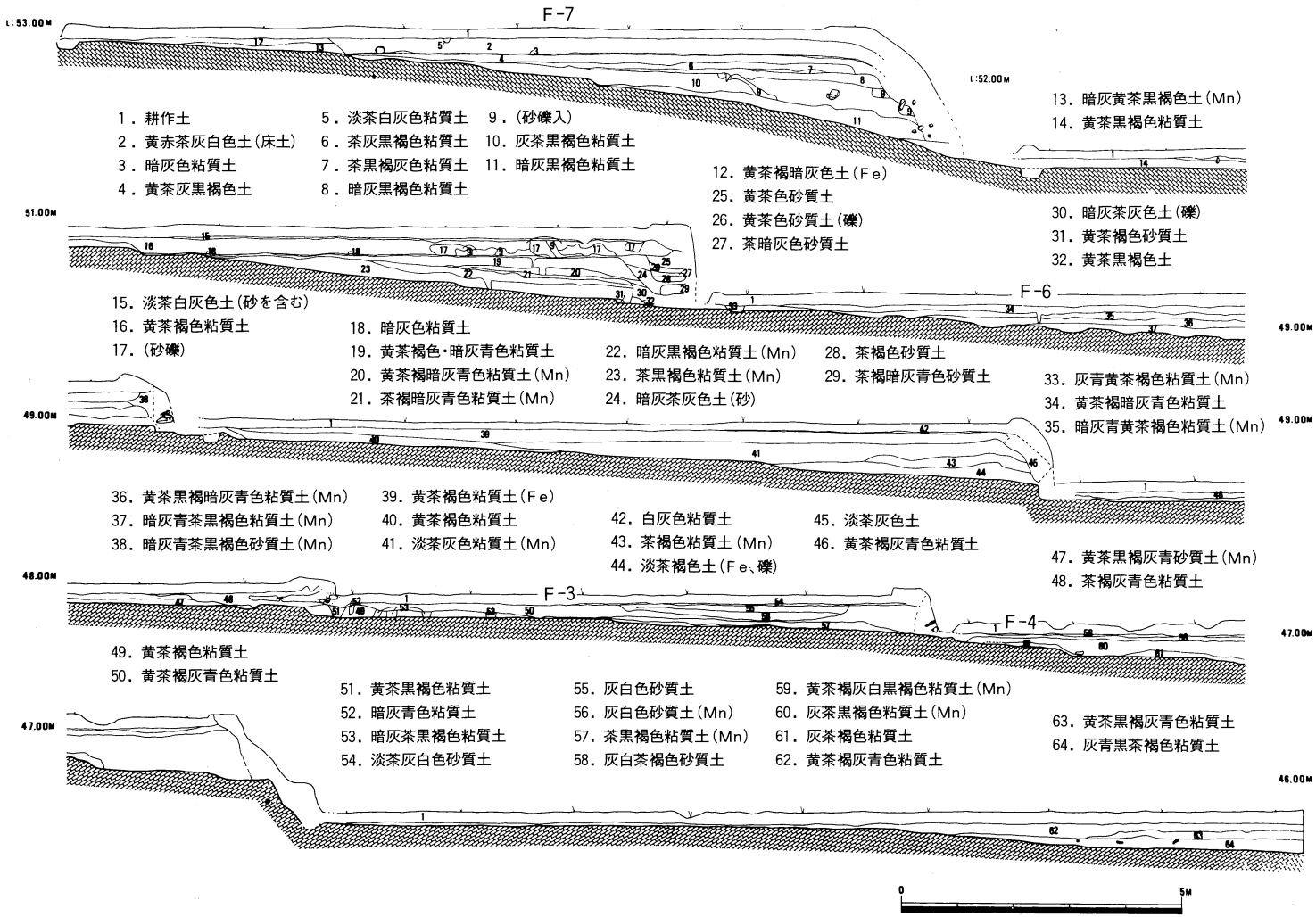
ａ．調査区概要

町道の北側にあたり，山条調査区，丘陵のほぼ中央に位置する。東西に長い調査区で，東側端部は約５ｍの段差をもって谷川に接している。全体に堆積は南に厚く，水平に平坦面を造成している。遺構は，その造成された平坦面および地山から検出された。

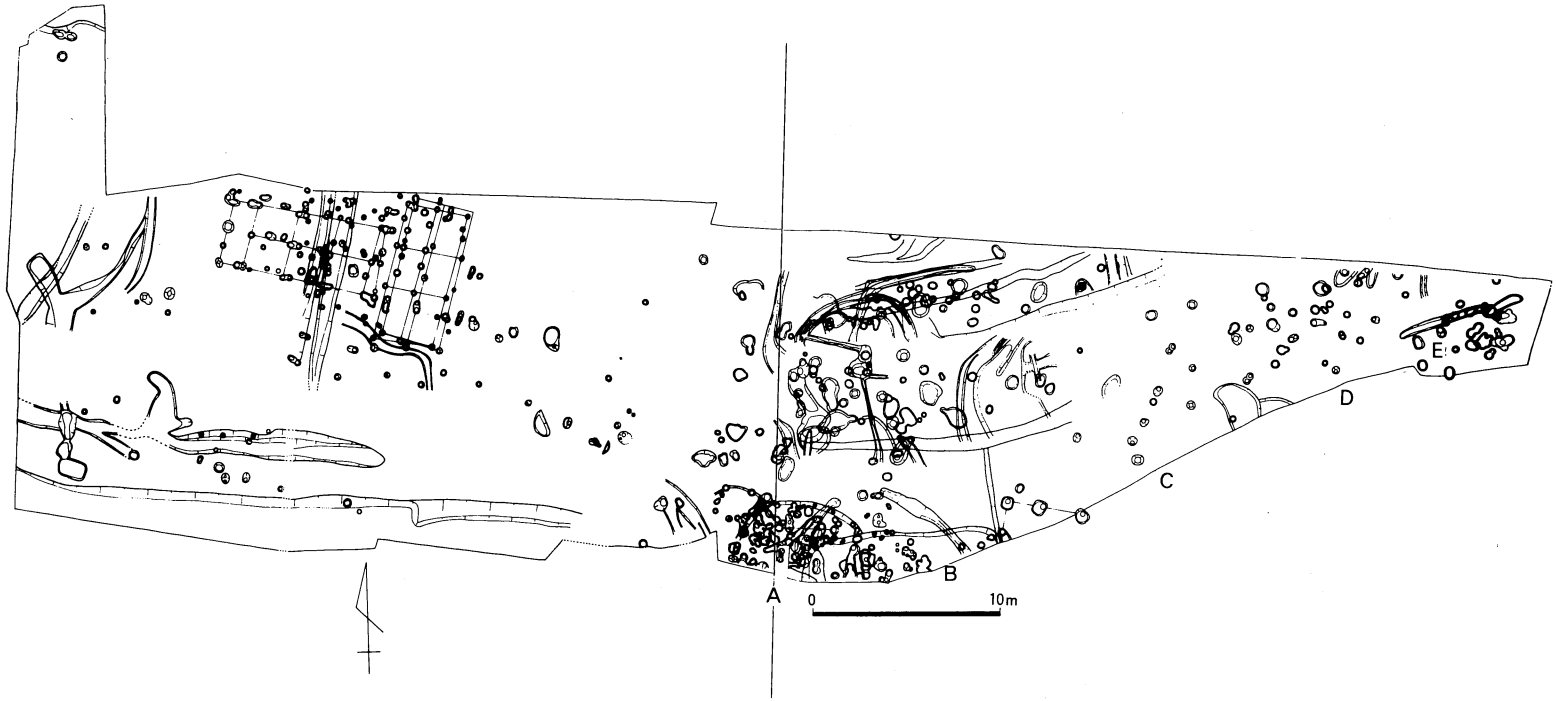
弥生時代と思われる遺構として，Ｆ－11において住居，土壙およびピット群を検出した。中世と思われる遺構として，溝，掘立柱建物，ピット群，および住居（？）等である。この他，



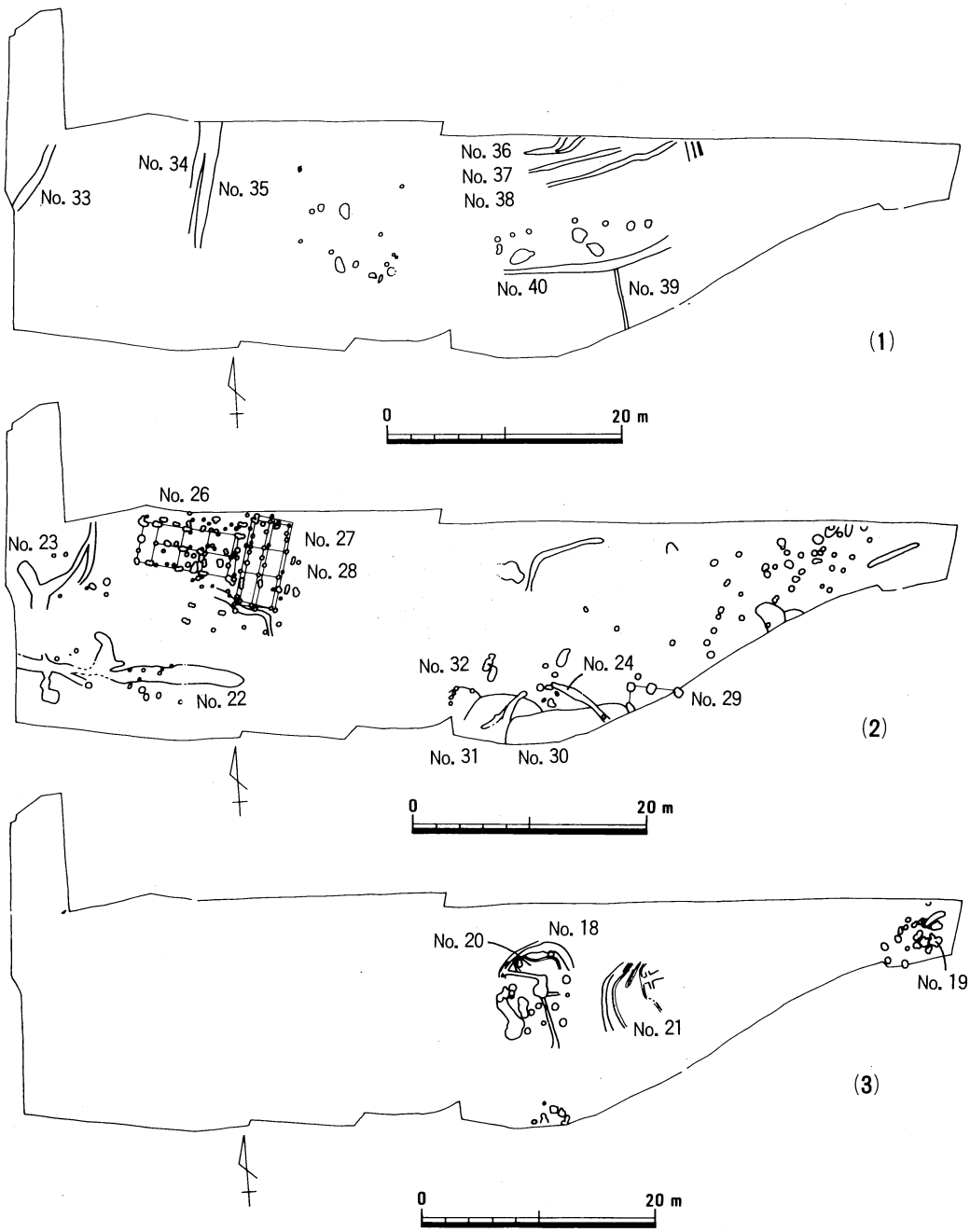
第17図　山条地区遺構配置図（S：1／2,000）



第18図　T－1トレンチ土層断面図（S：1／120）



第19図　F－3、4、11遺構配置図（S：1／400）



第20図　F－3、4、11遺構配置図（S：1／600）

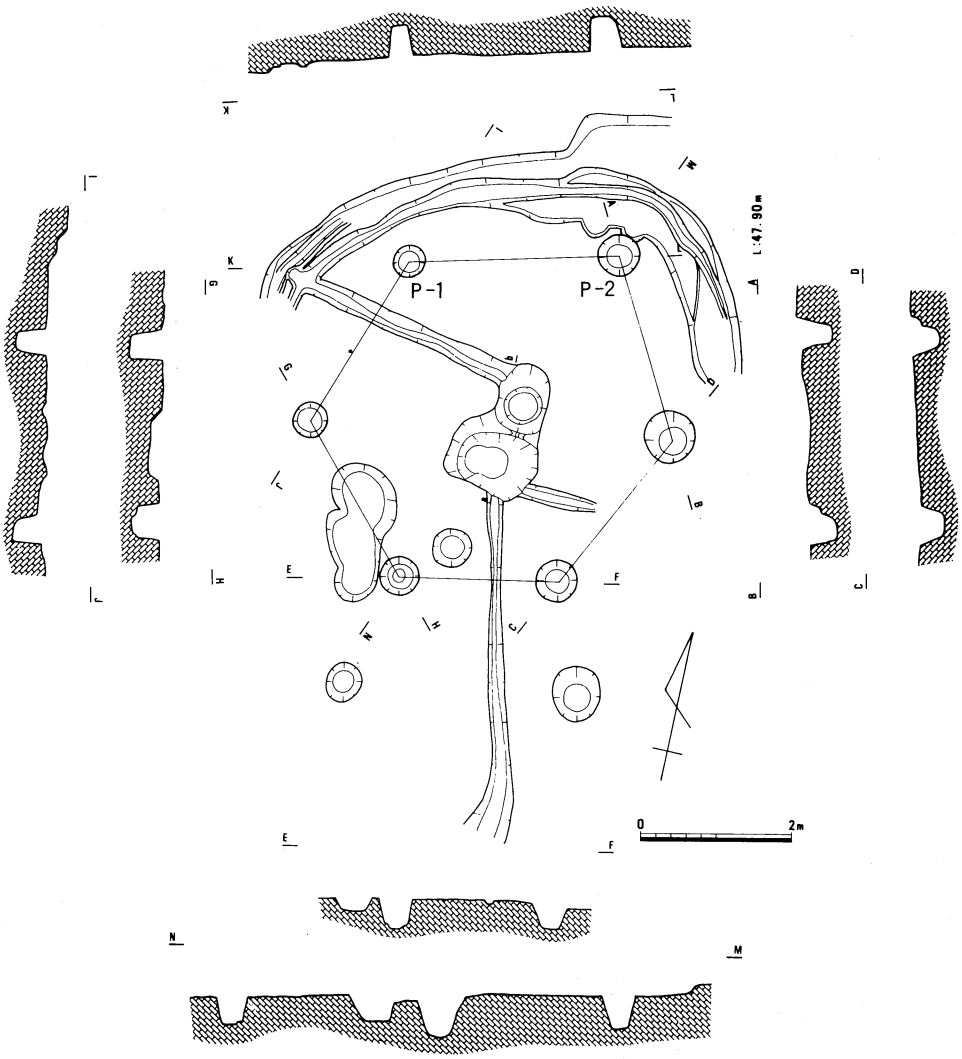
近世のものと思われる溝を検出している。（第19図）（第20図）

b．遺構

（弥生時代と思われる遺構）

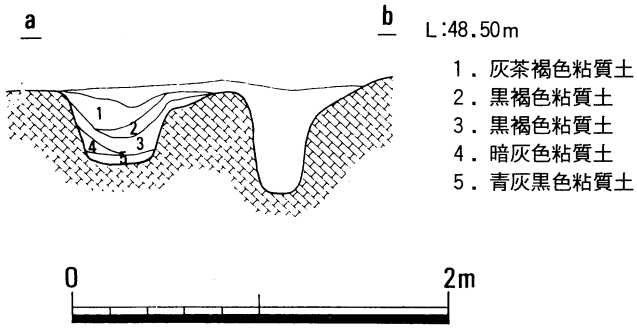
No.18住居

調査区中央東寄り北側に位置する。遺構は段状を呈する水田の畦畔部にまたがって位置したため掘削を受けていて，南側については，壁，壁体溝ともに消失している。全体の規模，平面形ともに明らかではないが，北側に残存する壁，壁体溝は隅丸の方形ともとれる不整の半円形

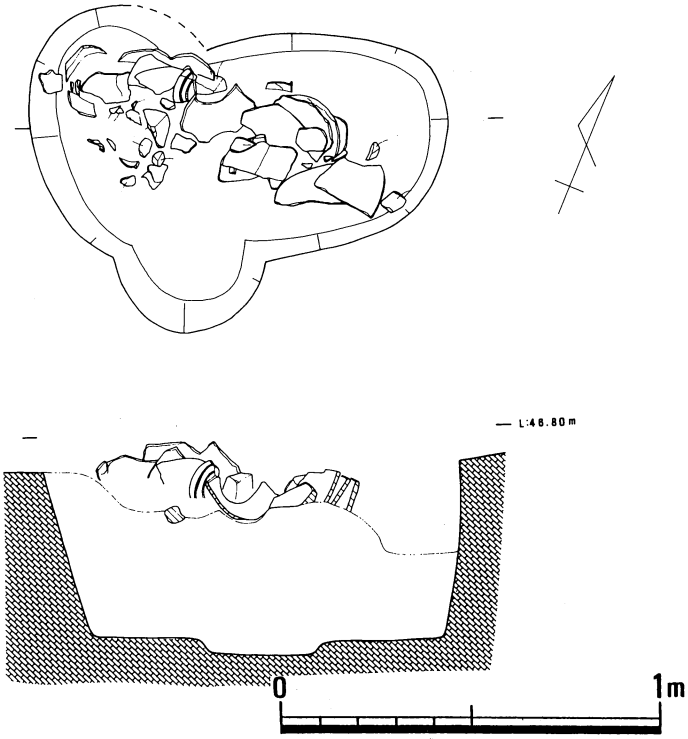


第21図　F－11、No.18住居（S：1／100）

を呈している。住居に伴うと思われる柱は6本と考えられ，中央穴2つを検出した。柱穴間は，200～280㎝を測る。6本の柱は北側のピットをほぼ中心としている。また，ピット上層には炭と焼土が認められた。P－1および壁体溝から弥生時代と思われる土器の小片を，P－2からはサヌカイトの細片も合わせて出土している。（第21図）（第22図）



第22図　No.18住居中央ピット断面図（S：1／40）

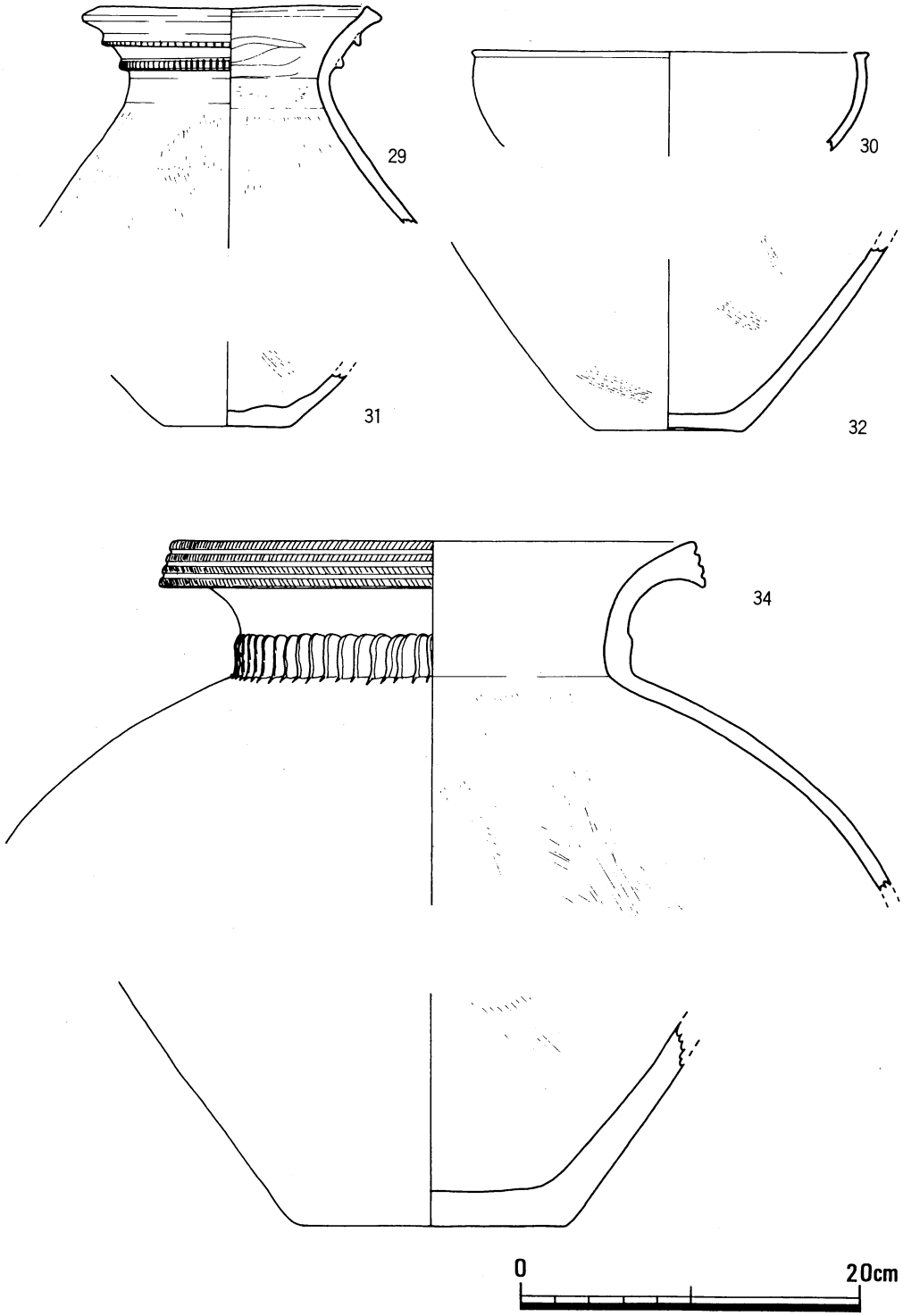


第23図　F－11、No.19ピット（S：1／20）

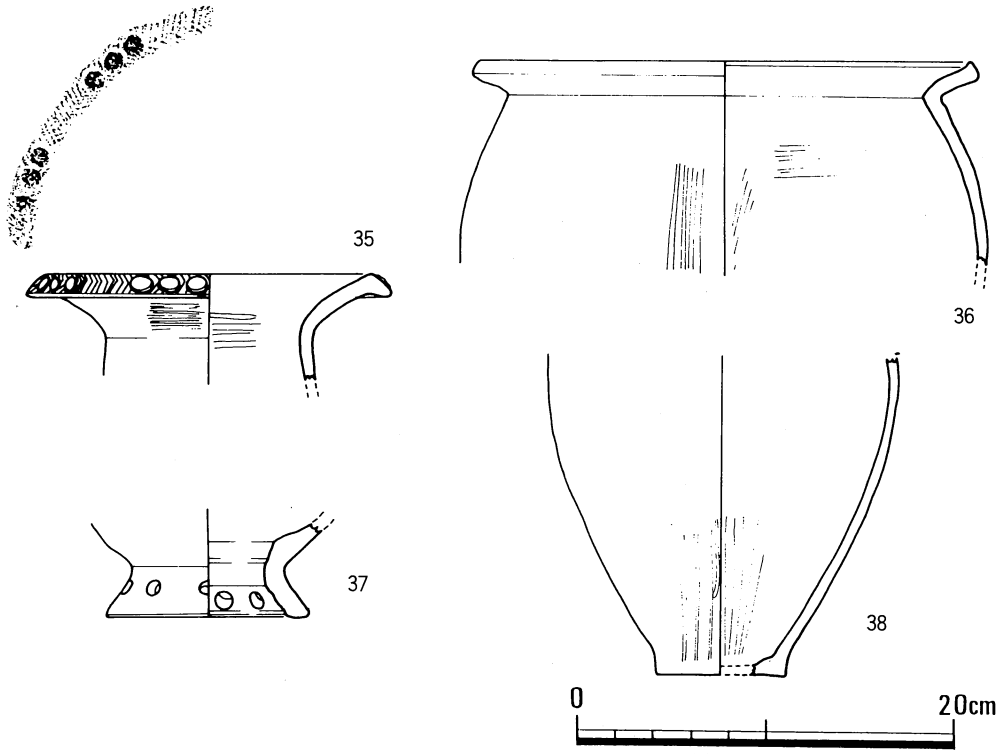
No.19ピット

調査区東端部に位置する。およそ70×110㎝を測る不整形のものであり，底部からは浮いた状態で，壷形土器，甕形土器等の遺物を出土している。（第24図）

（34）は，大型の短頸の壷形土器であると思われる。色調は淡橙淡茶白色で，2次焼成を受けた箇所は黒色を呈している。焼成は良好で，胎土は砂粒を多く含む。口縁端部外面に篦で綾杉紋を施した後，3本の凹線をめぐらし，頸部には舌状の装飾を施す。内面は刷毛目によって調整され，外面上部は大胆なナデ，下部は篦磨きによって仕上げられている。出土遺物は弥生時代中期の枠に納まるものと思う。（第23，24，25図）（図版25，26，27）



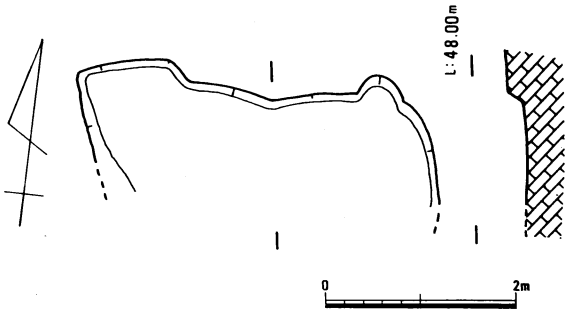
第24図　F－11、No. 19ピット出土遺物（1 / 4）



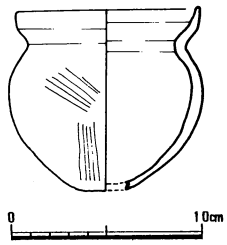
第25図　F－11、No. 19ピット出土遺物（1 / 4）

No.20土壙

No.18住居の埋積土に掘り込まれたものであり，南側は掘削され消失している。後出のNo.25溝によって切られている。残存部分は，約120×350㎝，深さ約20㎝を測り，埋積土中から弥生時代後期のものと思われる甕（第27図，39）等を出土している。



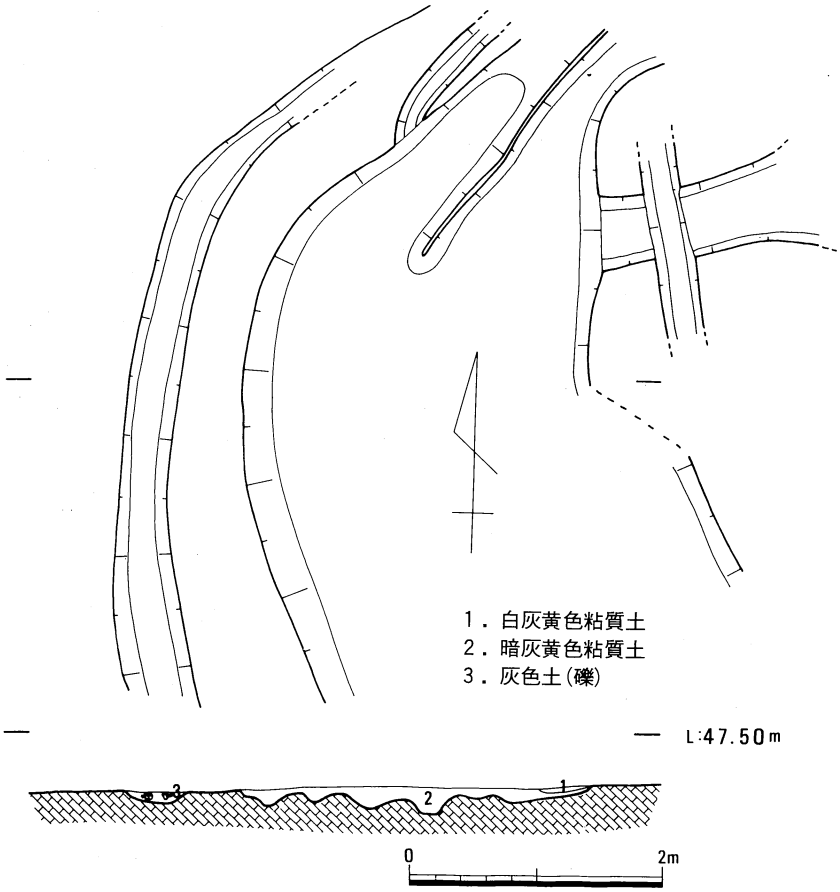
第26図　F－11、No. 20土壙（S：1 / 80）



第27図　No. 20土壙出土遺物

No.21溝

調査区東部中央，地山面で検出された複数の溝である。西へふくらむ形で弧を描き南北に走る。西端の溝は，幅約20～60㎝，深さ約８～10㎝を測り，礫を含む灰色土が埋積していた。東側の溝は，北側で２本であった溝が合流したものであるが，断面図に見る通り，底部にいくすじかの流路が認められる。最大幅約３ｍ50㎝を測る。東端に十字に交わるみぞは，南北方向に走るものが新しく，東西のものを切っている。南北方向のもの，幅約30㎝，深さ約３～10㎝，東西方向のもの，幅約60～80㎝，深さ約６㎝を測る。遺物は伴わず，時代は明らかでない。（第28図）

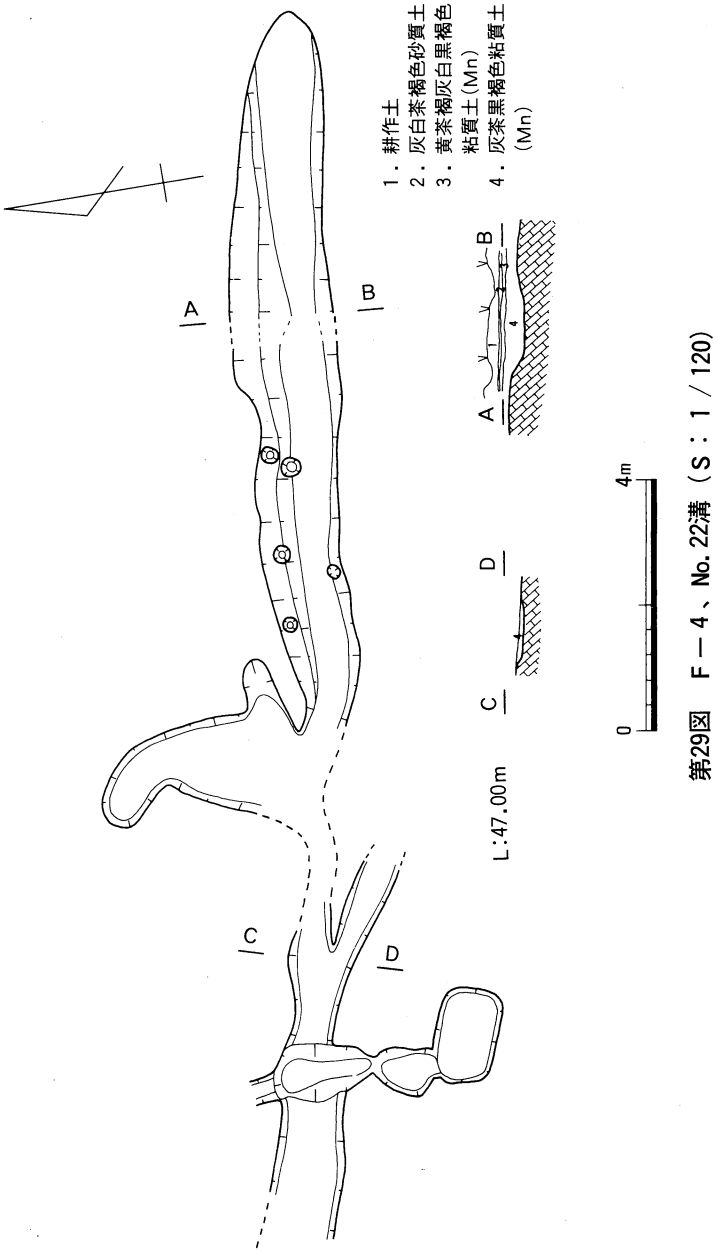


第28図　Ｆ－11、No.21溝（Ｓ：１／60）

（中世のものと思われる遺構）

No.22溝

調査区西側南に位置し，ほぼ東西に延び，西流する溝である。東側は削平され，消失している。幅約60～150㎝，深さ約３～35㎝を測る。埋積土中からの出土遺物は，中世の椀の高台，奈良時代のものと思われる丸瓦，平瓦の他，須恵器，土師器の小片を出土している。（第29図）



第29図　F－4、No.22溝（S：1／120）

No.23溝

調査区西端に位置し，南北に走る。幅約40～100㎝，深さ約４～20㎝を測る。埋積土からは，丸瓦，サヌカイト小片，土師器小片等を出土している。（第30図）

No.24溝

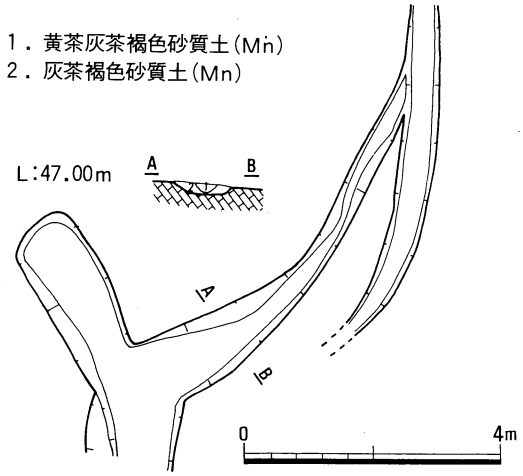
調査区ほぼ中央南に位置する。北西部から東南へ弧を描くように延び，南端は掘削され消失している。幅約40～80㎝，深さ約20～30㎝を測り，埋積土中から中世の小皿口縁，土師器の椀高台，緑釉の土師器小片等の遺物を出土している。

また，この溝南端の埋積土に掘り込まれたピットの埋積土上層から，折りたたまれた板状の青銅器を出土している。部分的に金箔（？）の残存が認められる。ピットは，

径約30㎝，検出面からの深さ約20㎝を測る。（第31，32図）

No.25溝

調査区中央北に位置し，東から南西へくの字状にNo.20土壙を切っている。南側部分は消失している。幅約30～60㎝，深さ約4～8㎝を測り，出土遺物は土師器小片等である。（第20図）



第30図　F－3、No.23溝（S：1／120）

No.26建物

調査区西部の北側に位置する。棟方向N74° Wで，梁行2間，桁行3間，西面に張り出し（庇？）を持つものと思われる。梁行340～370㎝，桁行は東から柱穴間を測ると，南側230㎝，210㎝，220㎝，130㎝（張り出し部），北側220㎝，220㎝，130㎝（張り出し部）と，7尺の基準を持つように思われる。柱穴は，径約30～50㎝を測る。P－11から第39図（45）を，P－35から土師器の小皿，（第39図・44）を，P－28から東播系と思われる捏鉢の口縁部（47）を出土している。（第33図）

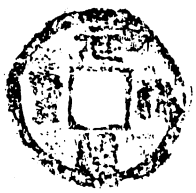
No.27建物

No.26建物の東に位置する。棟方向は，No.26にほぼ直交する。方位N18° E，梁行2間，桁行3間の規模で，梁行は，310～330㎝，桁行は北から柱穴間を測ると，西側，280㎝，220㎝，280㎝，中央230㎝，230㎝，270㎝となっている。柱穴は，径30～50㎝を測る。P－17から（46）を出土している。（第34図）

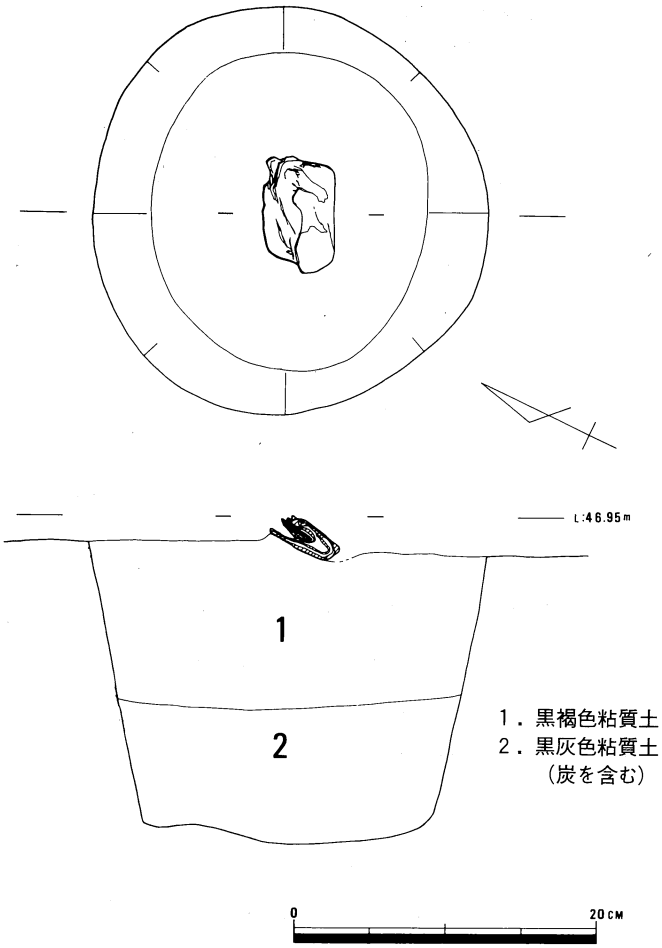
No.28建物

棟方向，梁行，桁行ともにNo.27建物とほぼ同様である。（同一建物の建て替えか？）（第34図）

No.26，27，28の建物の時期は，柱穴内から土師器の小皿（41，42，43），東播系捏鉢（47）等を出土していることから鎌倉時代初めを上限と考える。また，周辺から元祐通宝（北宋，元祐8年（1093）初鋳）を出土している。（第35図）



第35図　F－3出土遺物



第31図　F－11、青銅器出土状況（S：1／50）

No.29建物（？）

調査区東部南に位置し，南側を削平により失っている。検出された柱穴は4本，柱穴間は，180～220㎝を測る。土師器の小片を伴出している。（第36図）

No.30住居（？）

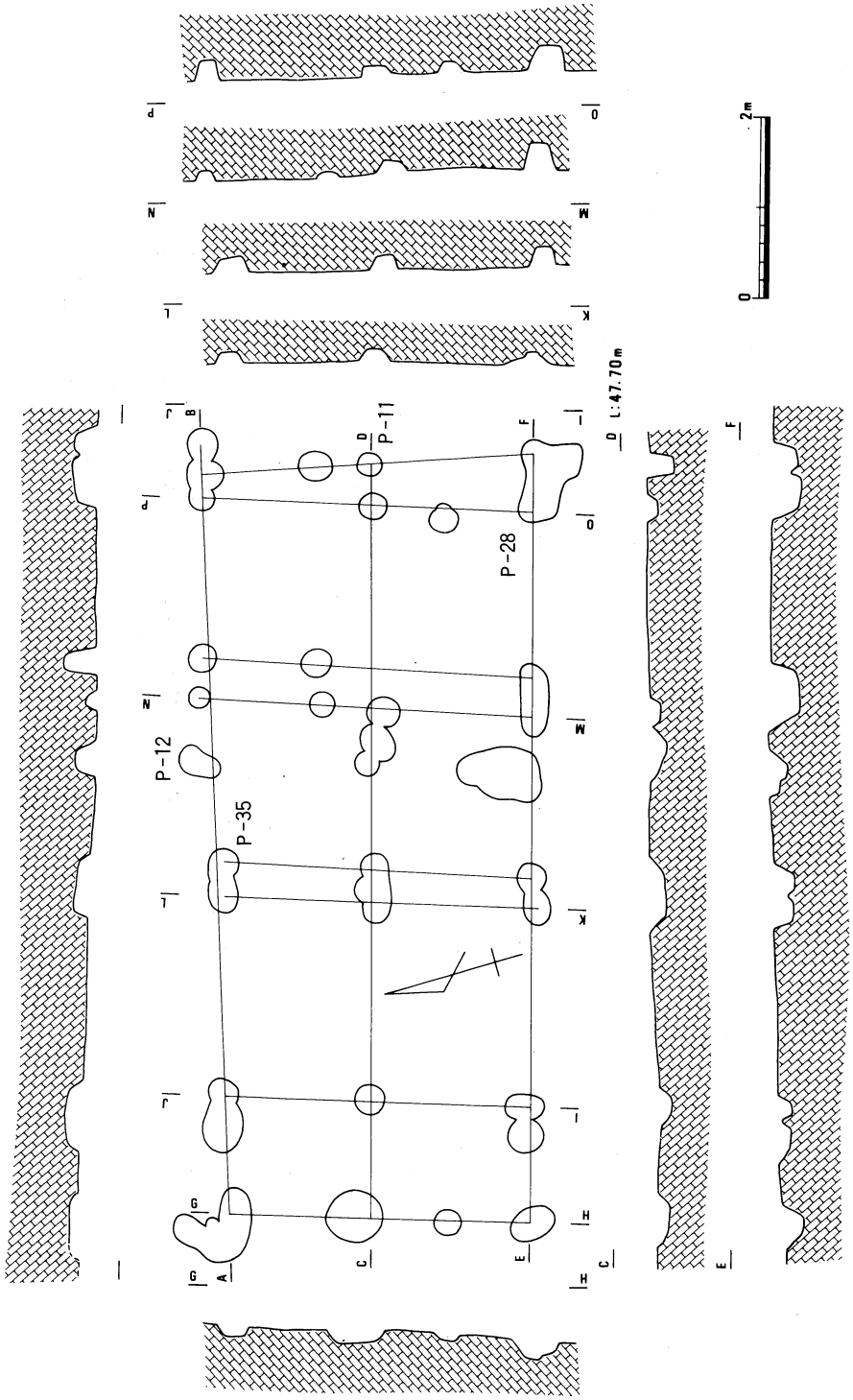
調査区南部，No.29の西に位置する。全体に削平を受けていて，特に南側は下段の水田造成のために削り取られ消失している。検出された残存部分は，隅丸の方形を呈し，東西約10ｍ40㎝，検出面からの深さ約25㎝を測る。壁体溝は検出されていない。No.24溝によって切られている。埋積土中からは，土師器の椀高台（54）をはじめ，小皿口縁，須恵器（甕ほか），土師器，瓦（格子状文，縄目文の叩き目を有する）等々を出土した。（第37，38図）

No.31住居（？）

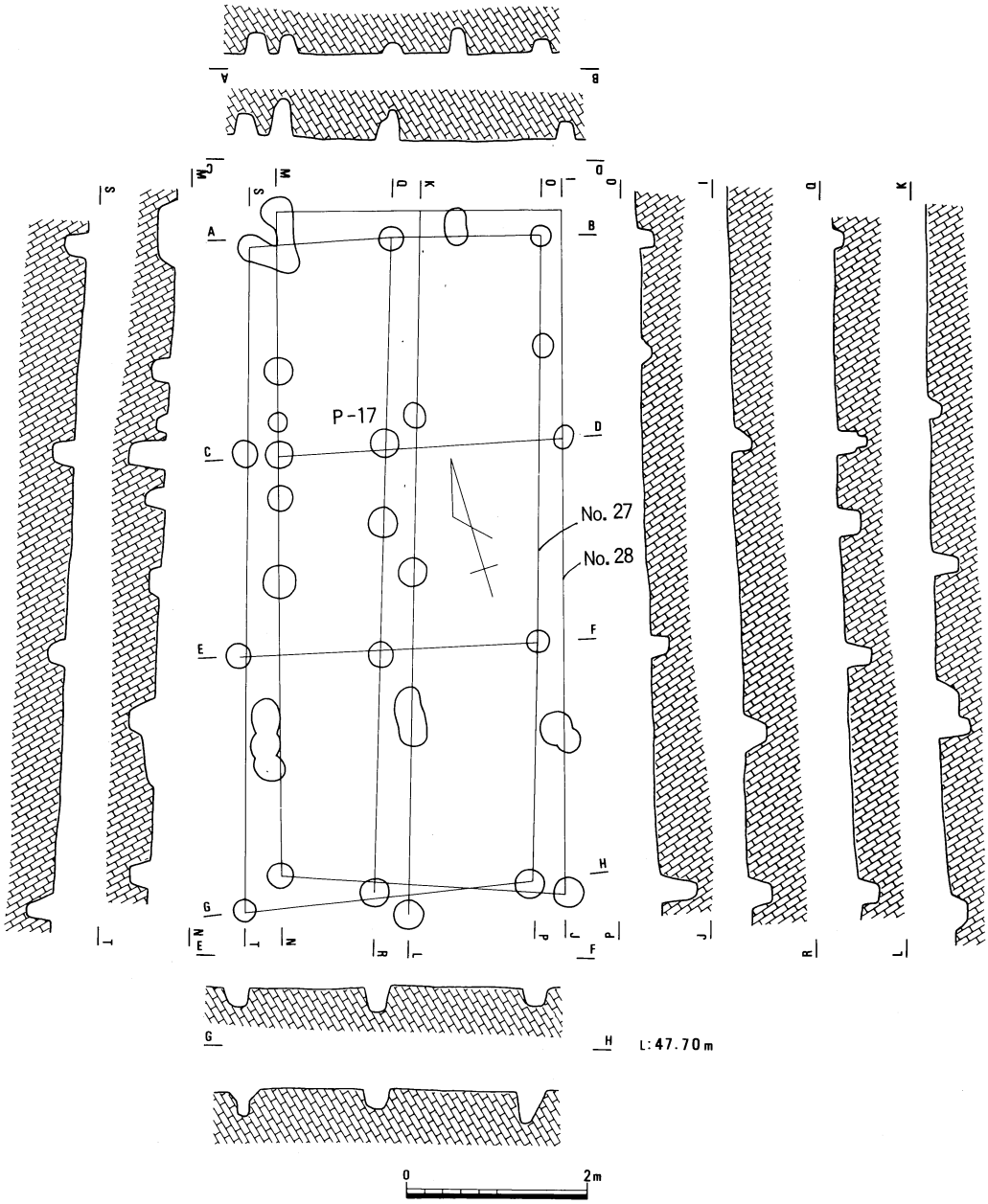
No.30の西に位置し，南側は消失している。残存部分の平面形は半円形を呈し，推定径は約7ｍ強である。東南部分をNo.30によって切られている。No.30同様，壁体溝は検出されていない。埋積土中からは，瓦，土師器（55）等を出土している。（第37，38図）

No.32住居（？）

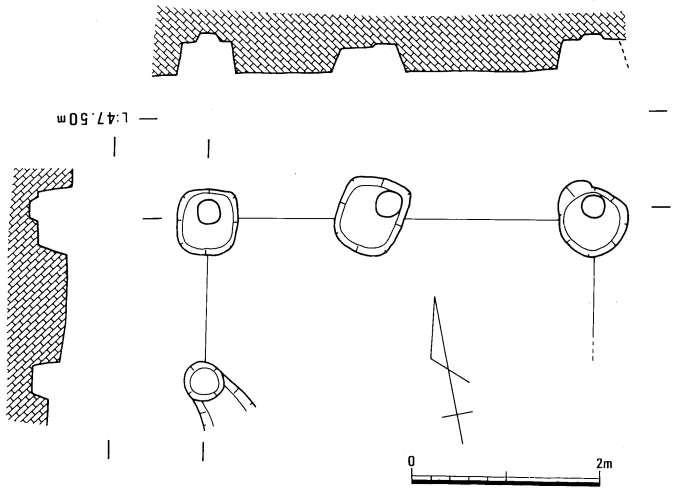
No.31の西に位置し，No.31によって切られている。削平と掘削を受けている。残存部分の平面形は半円形を呈している。壁際のピット内より土師器片（甕？）を出土している。



第33図　F－3、No.26建物（S：1／80）



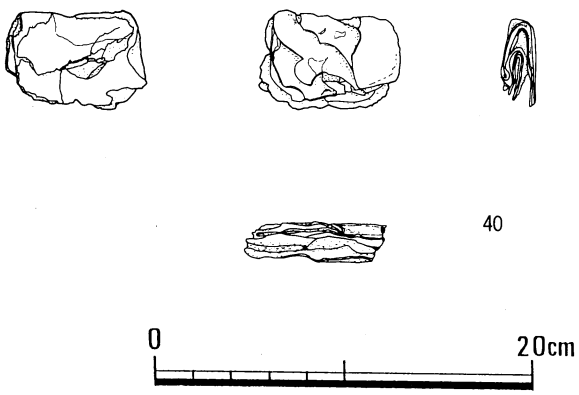
第34図　F－3、No. 27、28建物（S：1／80）



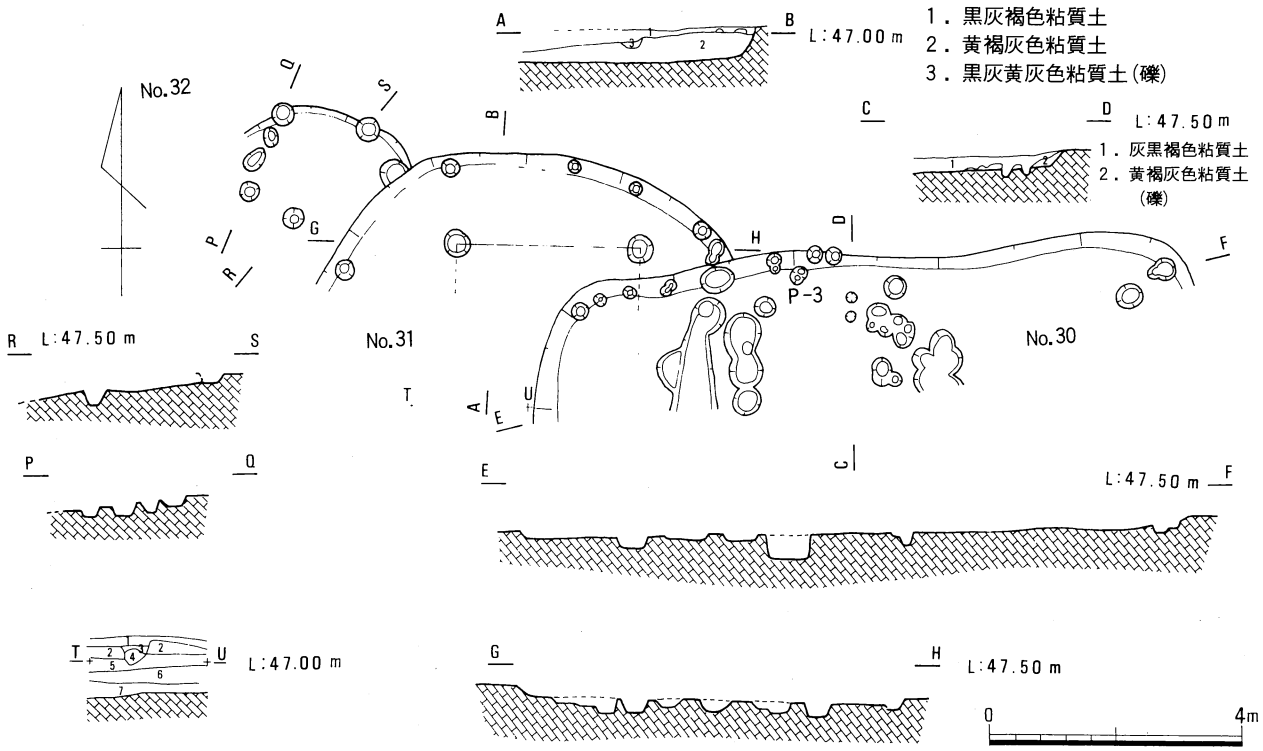
第36図　F－11、No. 29建物（？）（S：1／80）

No.30，31，32は残存部の平面形等から住居と思われるが，いずれも壁体溝は伴っておらず，No.30については共伴する柱穴も定かでない。No.31については床面と思われる面に多数の窪みを検出した。張り床であった可能性もあると考える。No.32の壁際の2つのピットは，半円形のプランを切って掘り込まれていた。

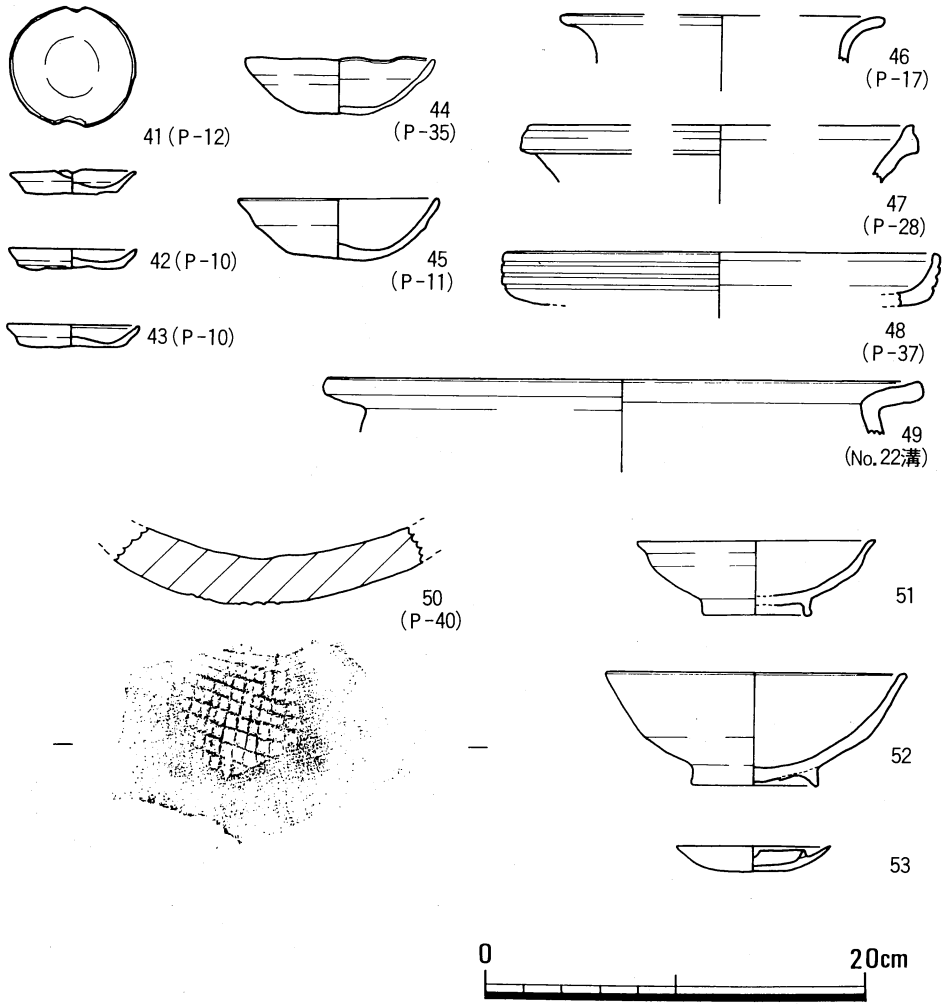
遺構の時期については，遺物から考えるならNo.32，31は奈良時代，No.30は平安末～鎌倉時代を上限にとることが出来るが，検出の状態からそれぞれの遺構の時期にあまり大きな隔たりはないものと思われる。



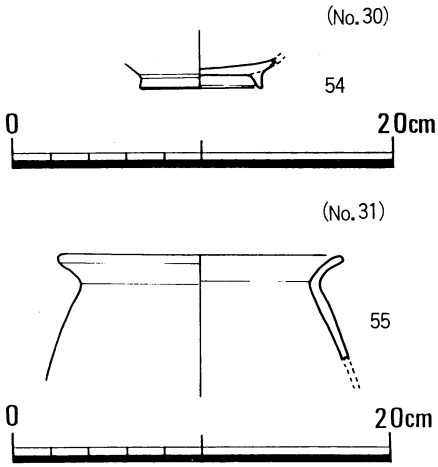
第32図　F－11出土青銅器（S：1／4）



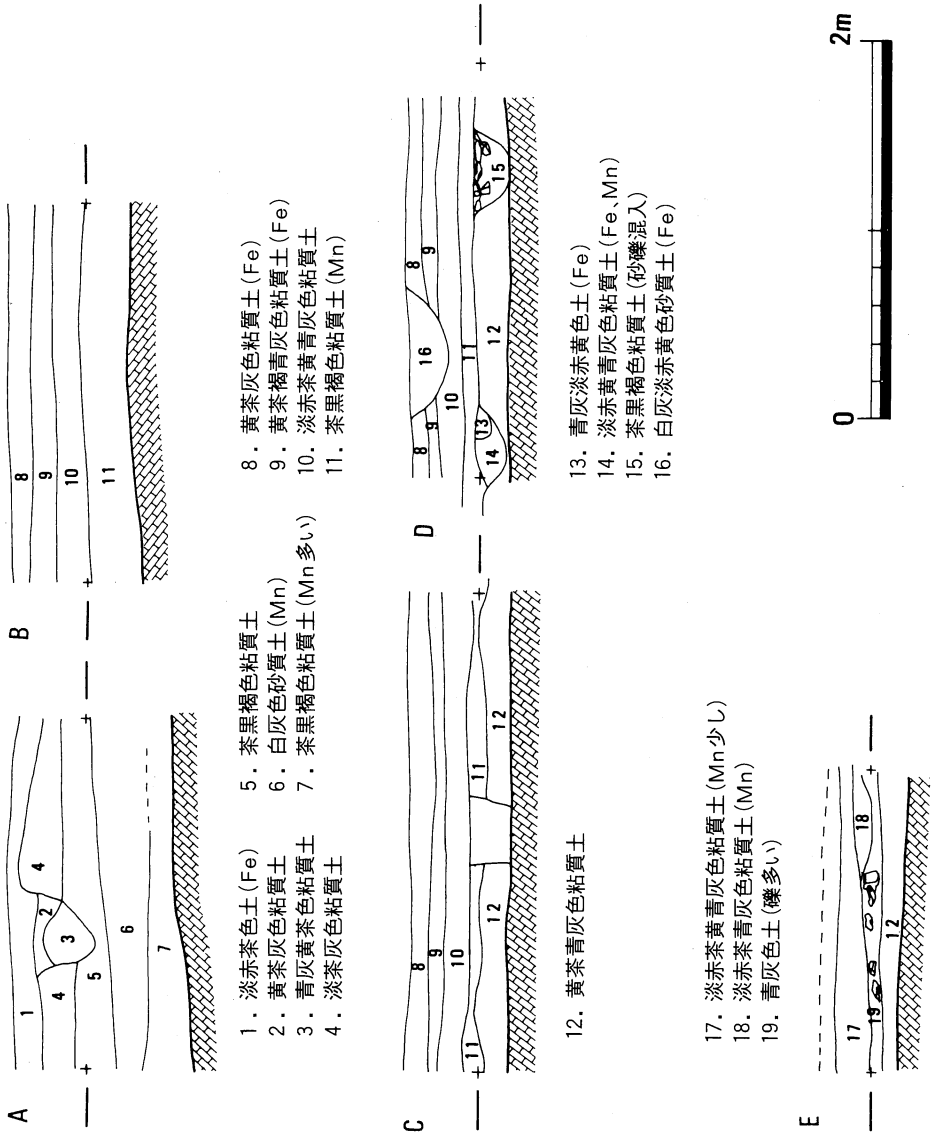
第37図　F－11、No. 30、31、32住居（？）



第39図　F－3、4出土遺物（1／4）



第38図　F－11、
No. 30、31遺構出土遺物（1／4）



第134図　F－11、南側土層断面図（S：1／40）

（近世のものと思われる遺構）（第20図・(1)）

No.33溝

調査区西端に位置し，北東から南西に走る。幅約60～90㎝を測るごく浅いものである。黄茶褐灰青色の造成土（第18図・50）に切り込んでつくられている。遺物は出土していない。

No.34，35溝

調査区西部北側に位置し，ほぼ南北に延びる。No.35をNo.34が切っている。No.34，幅約50～70㎝，深さ約８～14㎝を測る。No.35は，幅約50～120㎝を測るごく浅いものである。両

者とも，黄茶褐灰青色の造成土（第18図・50)を切り込んでつくられている。

No.36，37，38溝

調査区東部北側に位置し，いずれも東西に延び，灰黄褐色の造成土に切り込んで掘られている。No.37からは，須恵器杯口縁，土師器等の遺物が見られた。測定値はNo.36，幅約30～50㎝，深さ約5㎝，No.37，幅約40～50㎝，深さ約2～6㎝，No.38，幅約25～50㎝，深さ約3㎝を測る。

No.39溝

調査区中央東南部に位置し，ほぼ南北に延びる。幅約20～30㎝，深さ約2～3㎝を測る浅いものである。

No.40溝

No.39溝の北に位置し，東西に延びる。幅約30～100㎝，深さ約2～5㎝を測り，埋土から土師器小片を出土している。流方向は東から西である。

c．遺物

（第39図）（51），（52），（53）は造成土からの出土遺物である。（53）は備前焼きの灯明皿である。また造成土中から，軒丸瓦4点，軒平瓦6点（第124，127，128，131図）を含む瓦を整理箱約8箱分出土した。石器としては，石礫9点（P125第133図参照）と磨製蛤刃石斧（第132図・172）を出土している。（図版18，19，20，22，23）

F－5，6，9

a．調査区概要

F－3，4，11の北側にあたり，用水路Ⅰ－6の西側（F－5）と新設道路R－8による削平部分，および既設農道の下とその東部（F－9）を含む地区である。

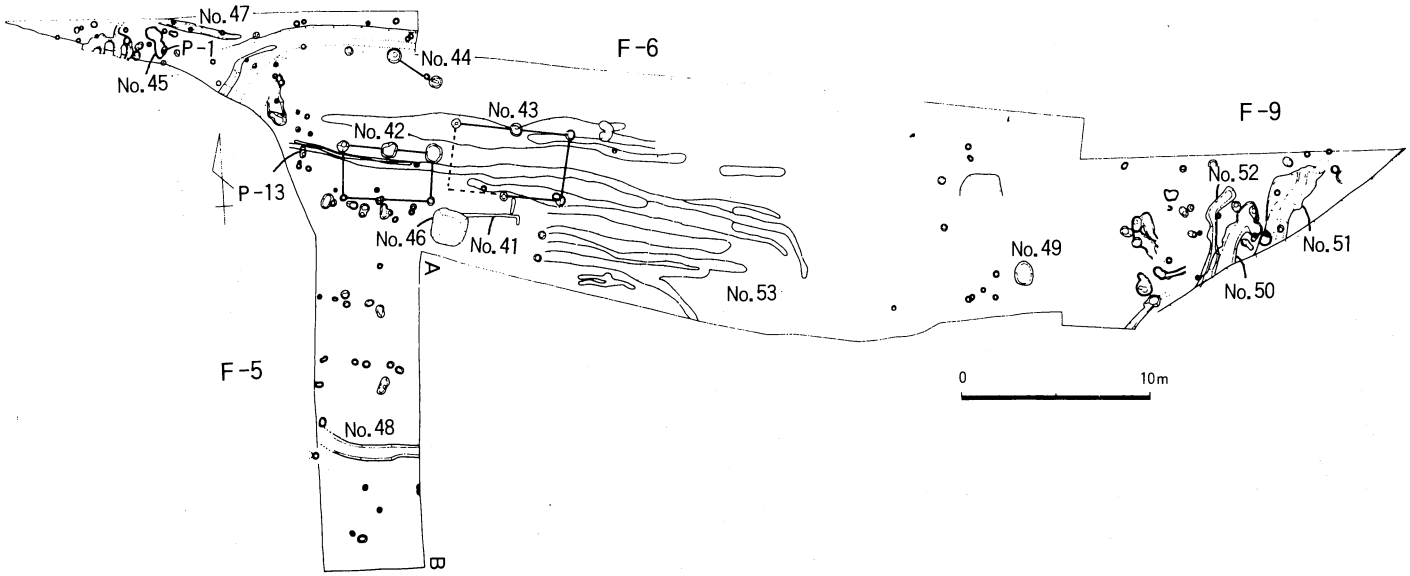
調査区中央部では，1．耕作土，2．黄茶褐暗灰色粘質土，3．暗灰青黄茶褐色粘質土（Mn)，4．黄茶黒褐暗灰青色粘質土（Mn)，5．暗灰青茶黒褐色粘質土（Mn）などの造成土の堆積が見られ，2．～4．は近世の遺物を含んでいる。5．は調査区中ほどから南側に次第に厚く堆積している。調査区北側は地山まで掘削されており，北寄りに検出された遺構はすべて削平を受けているものと考えられる。（第18図）（第40図）

b．遺構

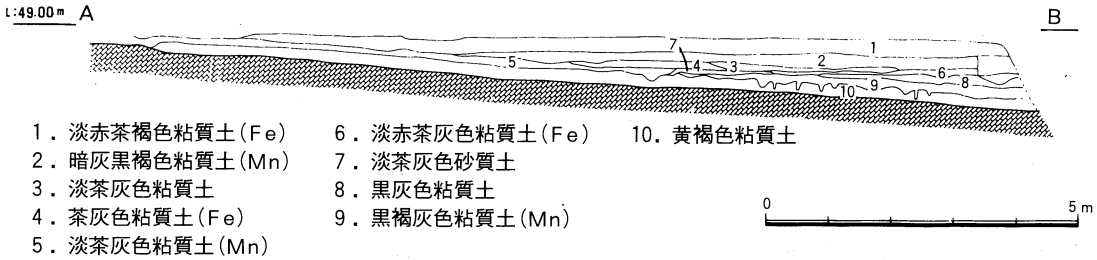
（奈良・平安時代のものと思われる遺構）

No.41溝

調査区西部南寄りに位置し，No.46土壙によって切られている。東西に走り東端でほぼ直角

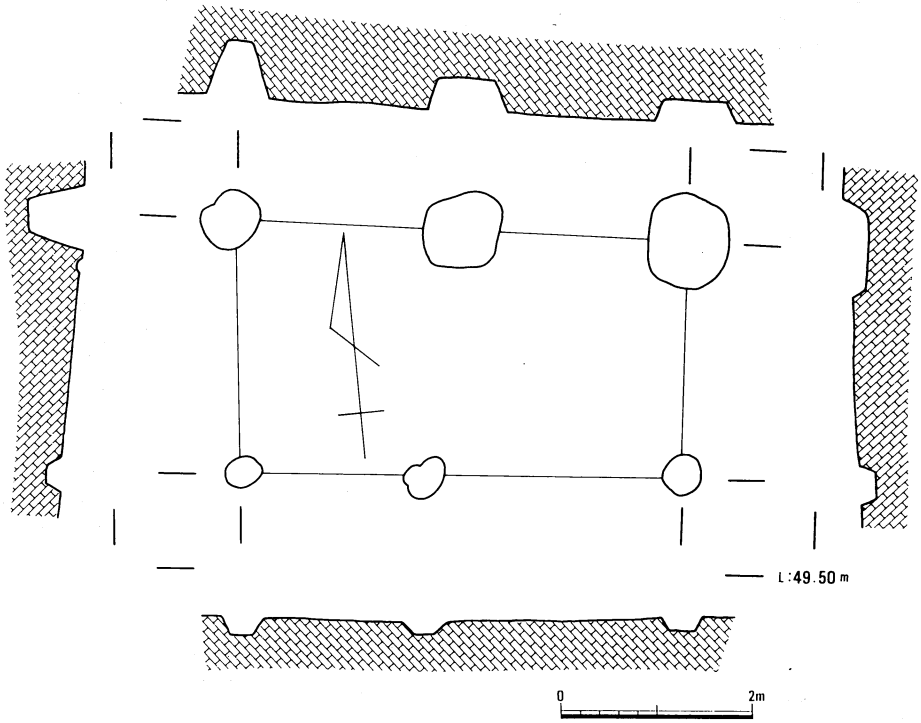


第40図　F－5、6、9遺構配置図（S：1／400）



1．淡赤茶褐色粘質土(Fe)
2．暗灰黒褐色粘質土(Mn)
3．淡茶灰色粘質土
4．茶灰色粘質土(Fe)
5．淡茶灰色粘質土(Mn)
6．淡赤茶灰色粘質土(Fe)
7．淡茶灰色砂質土
8．黒灰色粘質土
9．黒褐灰色粘質土(Mn)
10．黄褐色粘質土

第41図　F－5土層断面図



第42図　F－6、No.42建物（S：1／80）

に南に折れる。幅約10～20cm，深さ約2～3cmを測る。削平を受けているため残存部分のみの検出に終わったものと考える。

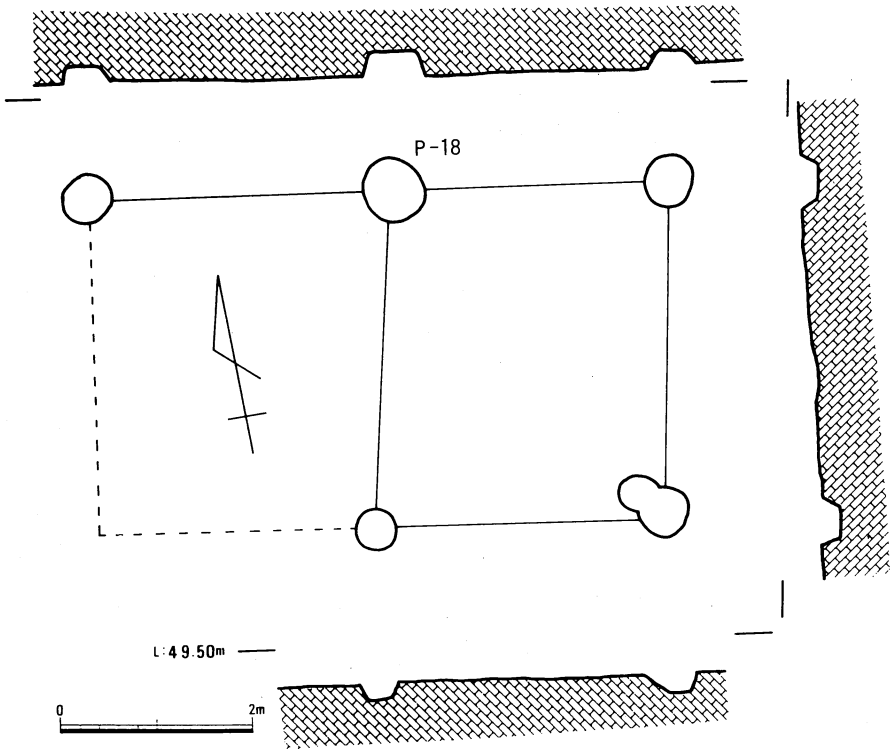
No.42建物

調査区西部に位置する。棟方向N84°W，梁行1間，桁行2間のもので，梁行260～280cm，桁行200～270cmを測る。P－17から，須恵器杯口縁，土師器小片，P－18から（第47図・68），土師器杯高台，須恵器小片等を出土している。（第42図）

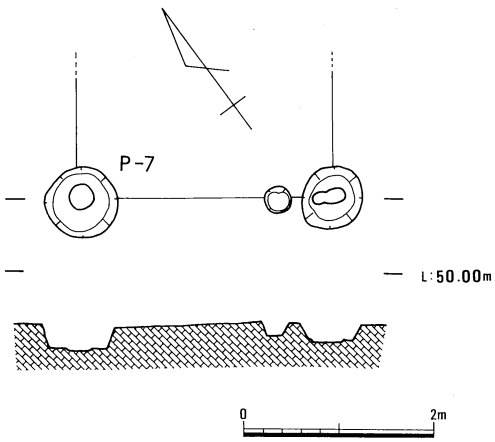
No.43建物

No.42建物の北東に位置し，棟方向はNo.42とほぼ同方向，梁行1間，桁行2間の規模で，梁行340～350cm，桁行は北側東から290cm，320cm，南側310cmで，柱穴径約50～70cmを測る。埋積土中から，須恵器，土師器の小片を出土している。削平を受けている。（第43図）

No.42，No.43建物ともほぼ同時代のものと思われ，奈良時代を上限として平安時代頃までにその時期を求められるものと思う。



第43図　F－6、No.43建物（S：1／80）



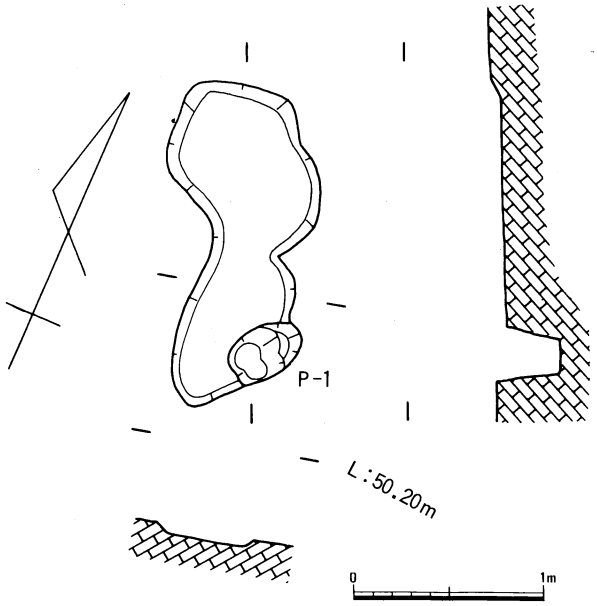
第44図　F－6、No.44柱穴（S：1／80）

No.44柱穴

調査区西部北側，No.42の北に位置する。対になると思われる2つの柱穴で，北東部へ延びる可能性が考えられた。削平を受けており，径30～40㎝，検出面からの深さ約18～26㎝を測る。径約25㎝を測る柱痕が認められた。掘り方内より土師器の小片を出土している。（第44図）

No.45土壙

調査区西端部に位置する不整形の土壙である。削平を受けている。幅約40～70㎝，長さ約170㎝，検出面からの深さ約5～8㎝を測る。埋積土中からは，須恵器杯口縁，高杯脚部，土師器等々を出土している。（第45図）



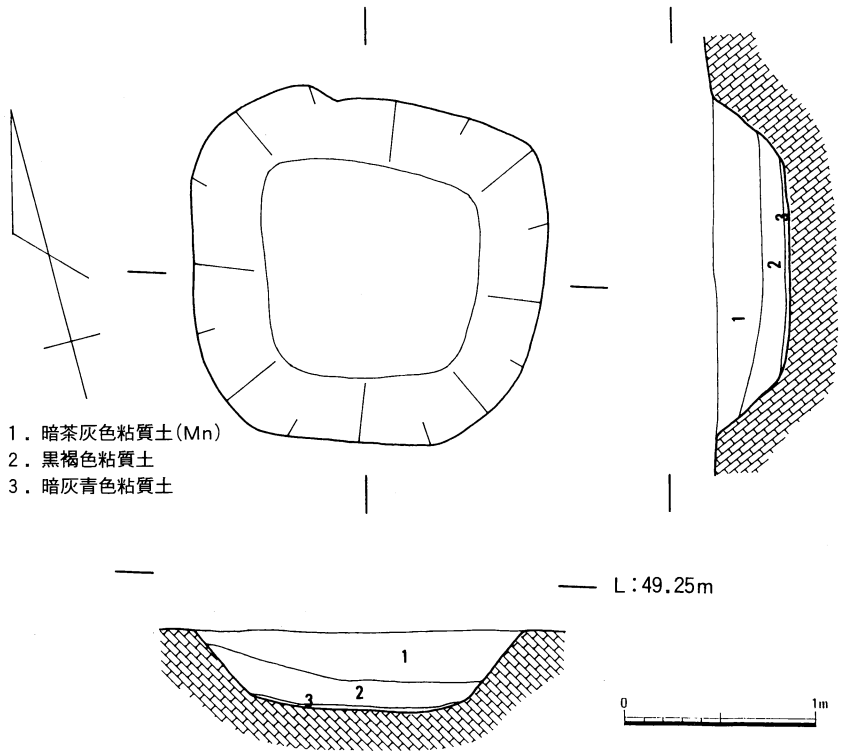
第45図　F－6、No.45土壙（S：1／40）

No.46土壙

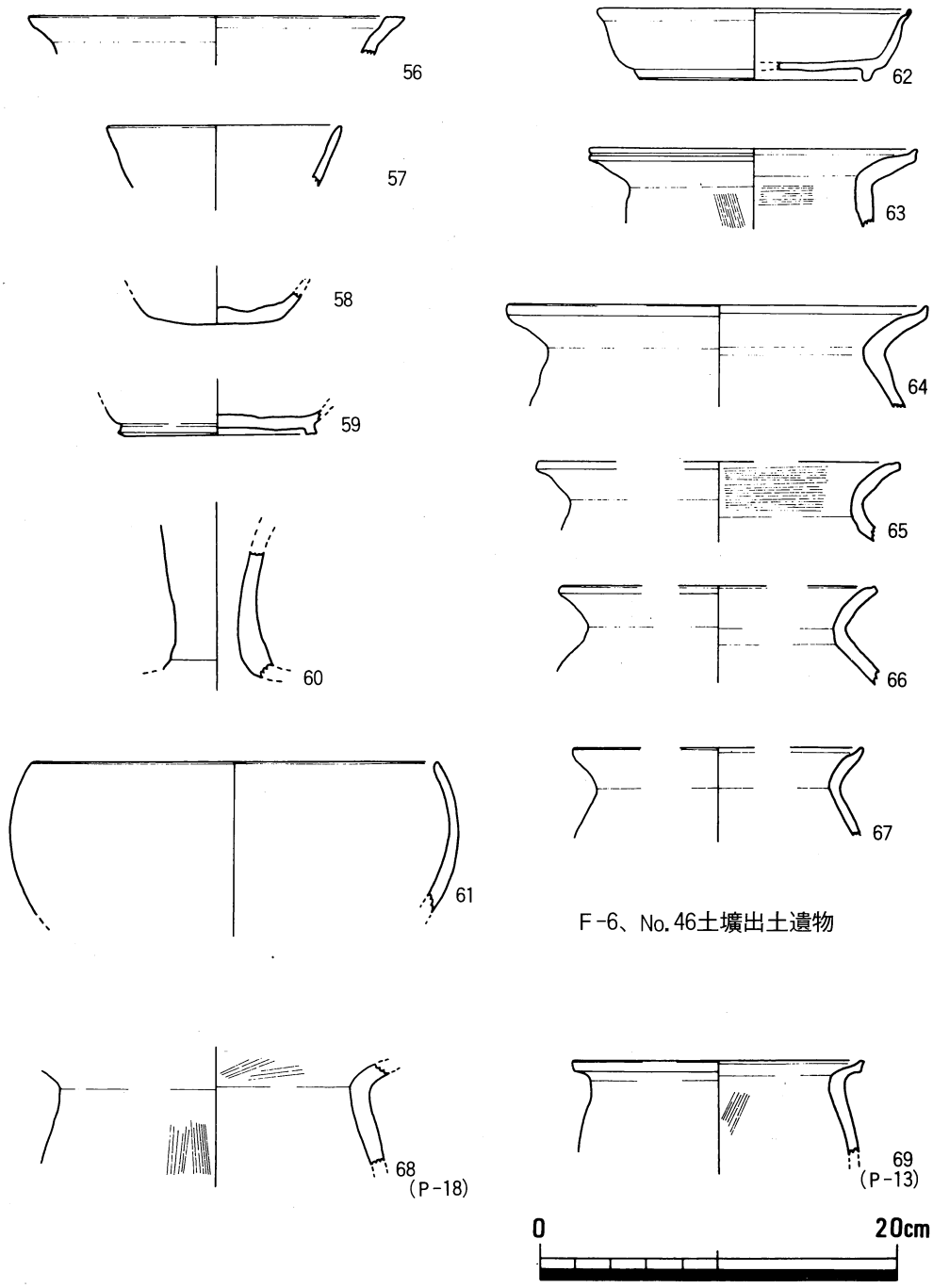
No.42建物の東南にあたり，平面形は隅丸の方形を呈する。縦横約185×185cm，深さ約30～50cmを測り，底部の平面形も隅丸の方形を呈し約110×110cmを測る。埋積土は3層に分かれる。出土した遺物の器種は，須恵器の杯（第47図・57，59），長頸壷（60），鉢（61），土師器の杯（62），甕（63～67）等々である。遺構の時期は奈良時代に求められるものと思う。（第46図）（図版27）

No.47溝

調査区西端に位置し，東西に走る。



第46図　F－6、No.46土壙（1／40）



第47図　F－6、遺構出土遺物（1／4）

削平を受けている。幅約20～50㎝，深さ約5㎝を測る。平瓦（縄目文叩き），土師器小片等を出土している。（第40図）

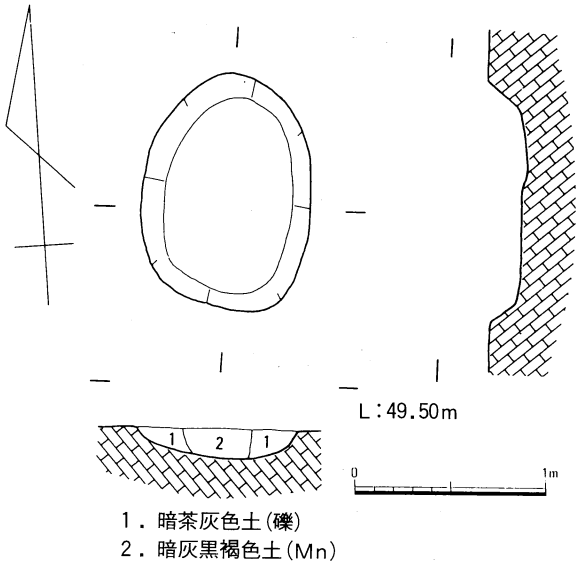
（中世のものと思われる遺構）

No.48溝

F－5の中央南寄りに位置し，東西に延び西流する。幅約90㎝，深さ約8㎝を測る。埋土中から須恵器小片を出土している。

No.49土壙

調査区中央東寄りに位置し，平面形は不整の楕円形を呈し，長径約130㎝，短径約100㎝，深さ約12～17㎝を測る。埋土中から平瓦を出土している。（第48図）



第48図　F－6、No.49土壙（S：1／40）

No.50溝

調査区東部（F－9）に位置し，北東から南東に延び南流する。南側を下段の水田によって掘削されている。幅約100～120㎝，深さ約3～9㎝を測る。出土遺物なし。

No.51溝

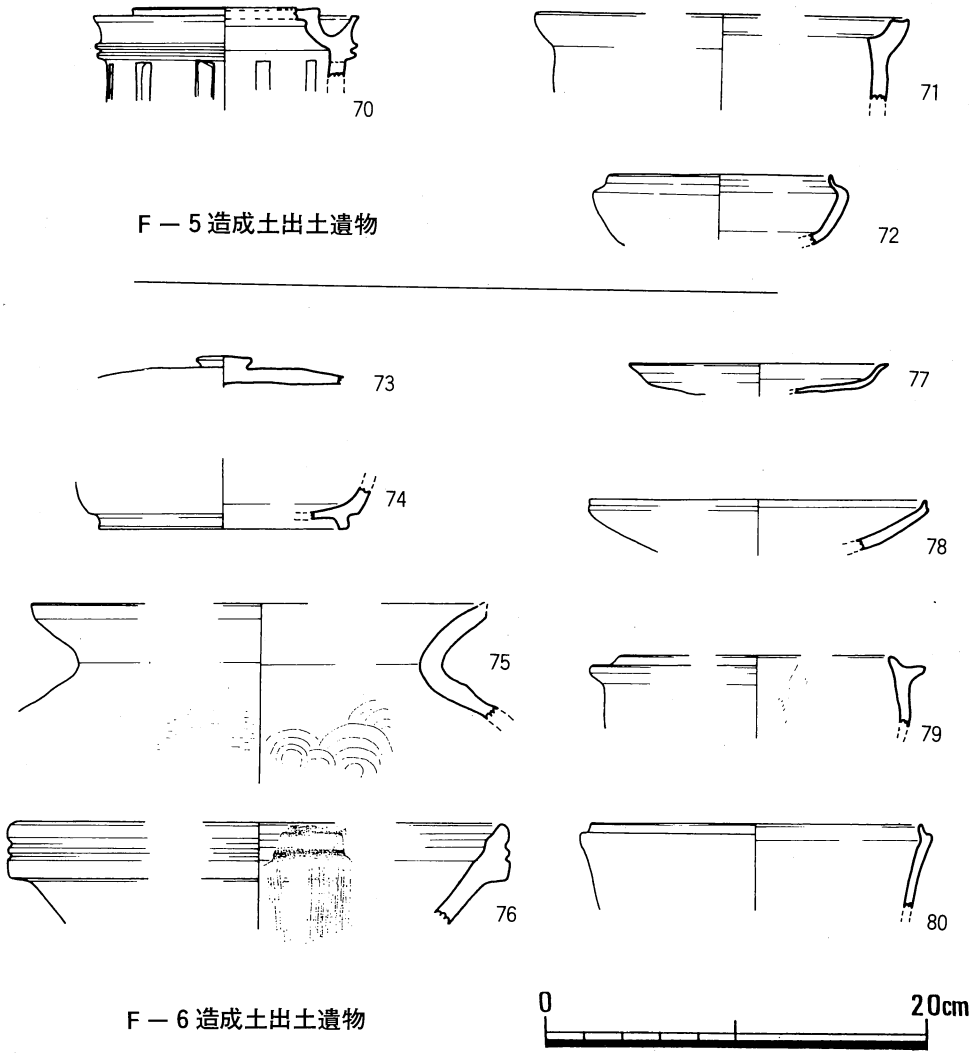
No.50の東に位置し，南側は消失している。最大幅190㎝，深さ約4～9㎝を測る。遺物は出土していない。

No.53溝

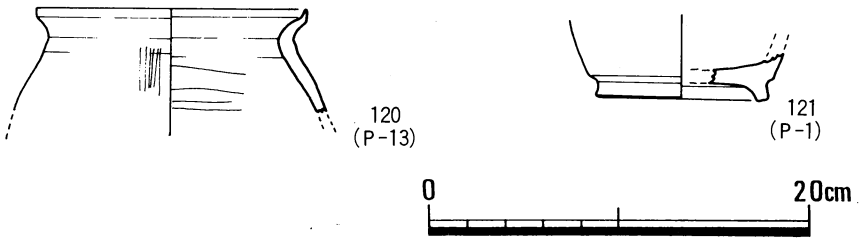
調査区中央から西寄りにかけて検出された何条もの溝で，幅約25～150㎝，深さ約2～5㎝を測るごく浅いものである。須恵器，土師器，青磁，等の小片，平瓦（縄目文を有する）等を出土している。中世の耕作に関する遺構（鋤溝？）と考える。

C．遺物

（第49図）は造成土中からの出土遺物である。（70）は圏足の円硯である（図版28）。白灰色を呈し，上面には使用によるものと思われる摩滅痕を認めた。小片であるため復元的実測図となったが，足部の角度は今少し開きぎみであるかも知れない。（73），（74）は須恵器の杯と蓋である。（77）は土師器，（79）は瓦質，（80）土師質のものである。（76）は備前焼きの擂鉢である。また石器として，石礫3点（第133図・178，181，183），磨製石斧1点（173）を出土した。ほかに，鉄釘，永楽通宝などを出土している。（図版22，23）



第49図　F－5、6造成土出土遺物（1／4）



第50図　F－6、遺構出土遺物（1／4）

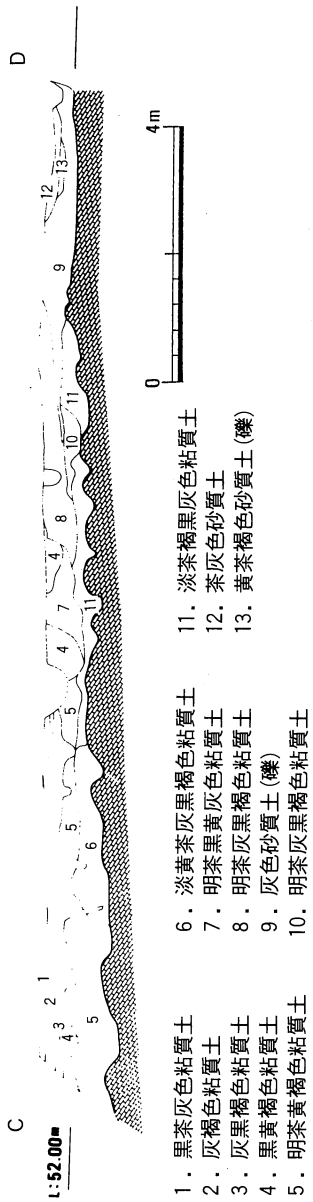
F－7

a．調査区概要

山条調査区の最も北に位置する。北側は1枚の畑を挟んで，谷池の堰堤となっている。旧地形は東南へ向けてかなり傾斜しており，造成土の堆積も東南部で最もぶ厚く堆積状況も複雑である。北西部では，南に張り出した尾根の裾部を段状に削り取って平坦面を造成している。

調査区西部の堆積状況は，（第18図）に見る通り，現行の水田層の下に旧水田層があり，その下にいく層かの平坦面が存在する。層序は，1．現耕作土，2．床土（黄赤茶灰白色土），3．旧耕作土（暗灰色粘質土），4．旧床土（黄茶灰黒褐色粘質土），5．茶灰黒褐色粘質土，6．暗灰黒褐色粘質土，7．灰茶黒褐色粘質土，8．暗灰黒褐色粘質土，9．地山であり，6．7．8．からは中世の遺物を出土している。調査区中央東よりでの層序は，旧水田層下に，1．黒茶灰色粘質土，2．灰褐色粘質土，3．灰黒褐色粘質土，4．黒黄褐色粘質土，5．明茶黄褐色粘質土，6．地山であり，1～4．層が中世の遺物を含んでいる。（第51図）調査区東南部は造成土の堆積が最も厚く，層数も多い。層序は断面図（第53図）に見る通り，現耕作土の下が1．床土（赤茶褐色土（礫を含む）），2．旧耕作土（灰青色粘質土），3．旧床土（赤黄茶色粘質土），4．灰褐色粘質土，5．灰黒褐色粘質土，6．黒褐灰色粘質土，7．黒褐灰色粘質土（6より黒が濃い），8．黒黄褐色粘質土，9．灰茶色砂質土（礫を含む），10．地山である。4～8．に，弥生時代～中世の遺物を含んでいる。8．層からは特に集中して，石礫，サヌカイト片等を含む弥生時代の遺物を出土している。

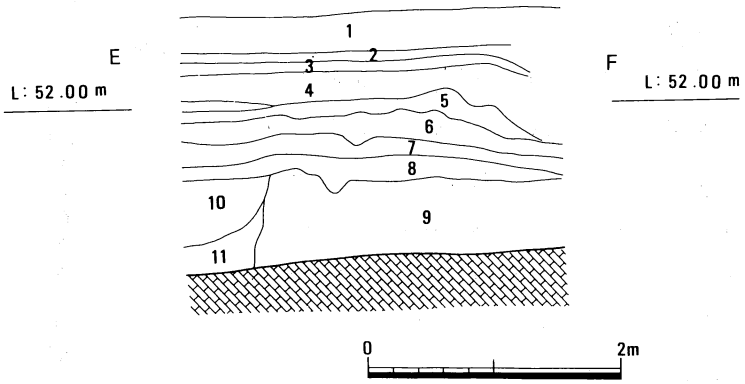
なお，調査区北西隅のピット群の内，特に北よりのものはごく浅い位置で検出されており，近世～近代のものも混同して検出されている可能性もあると思われる。



第51図　F－7、トレンチNo. 2土層断面図（S：1／120）

b．遺構

この地区では（第52図(2)）のピットP3－19より，（第69図・91）（図版26）を出土している。（第54図）弥生時代中期のものと思われる。（第52図(1)）に示した遺構は鎌倉～室町時代の範囲でとらえられるものと考える。



1．赤茶褐色土(礫)
2．旧耕作土(灰青色粘質土)
3．旧床土(赤黄茶色土)
4．灰褐色粘質土
5．灰黒褐色粘質土
6．黒褐色粘質土
7．黒褐灰色粘質土
8．黒黄褐色粘質土
9．灰茶色砂質土(礫)
10．茶灰色粘質土
11．灰茶色粘質土

第53図　F－7、東南部柱状土層断面図（S：1／60）

No.54溝

調査区中央東寄りに位置し，北東から南西に走る。幅約30～60㎝，深さ約4～15㎝を測る。断面形は鈍いU字形を呈する。

No.55溝

調査区中央南に位置し，東西に延び，西側でくの字状に南に方向を変える。幅約20～130㎝，深さ約8～20㎝を測る。底面より土師器の小皿，埋積土中から土師器，須恵器小片を出土している。

No.56溝

調査区ほぼ中央に位置し，南北に延び南流する。幅約60～130㎝，深さ約3～15㎝を測り，断面形U字形を呈する。

No.57，58溝

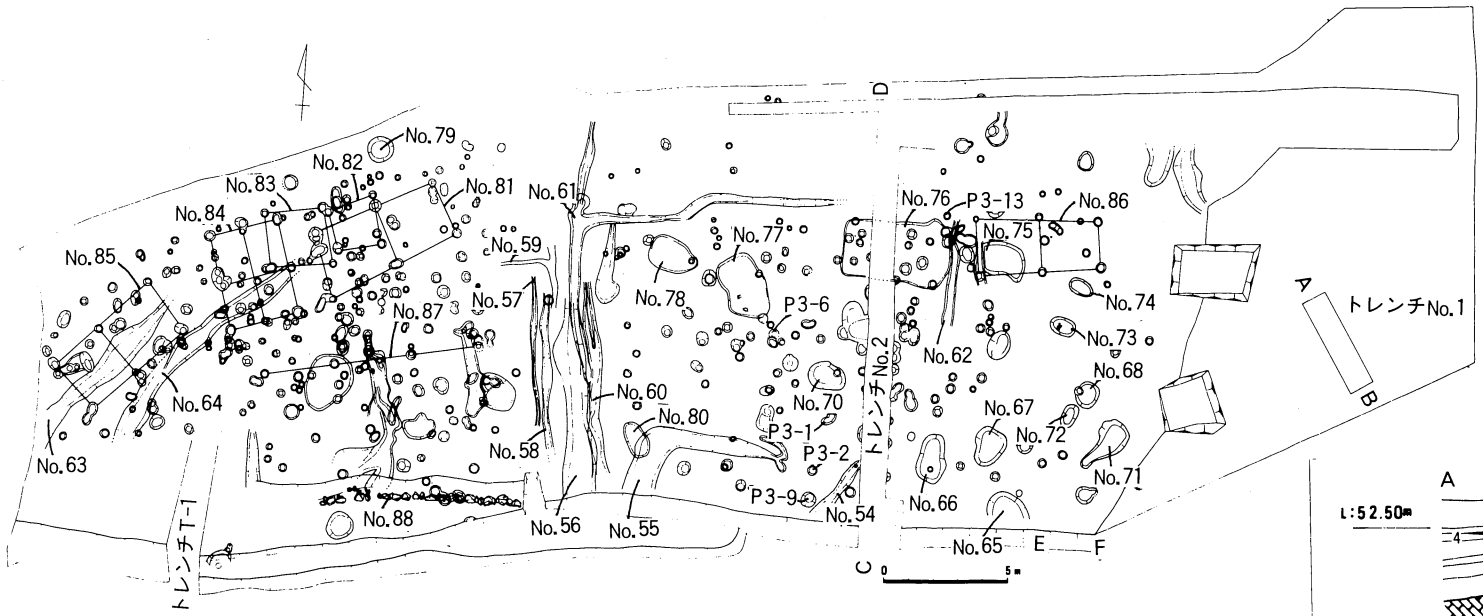
No.56の西側に位置する。No.56よりも上層で検出されたものである。南北に延び南流する。No.57は幅約10～30㎝，深さ約3～5㎝，No.58は幅約20～40㎝，深さ約5～10㎝を測る。

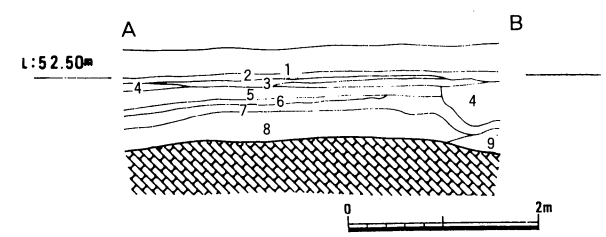
No.59溝

No.57，58の北に位置し，ほぼ直交する2本の溝で，幅約20～40㎝，深さ約3～4㎝のごく浅いものである。

No.60溝

No.58溝の東側に位置し，No.57，58よりも上層で検出された。南北に延び，南流する。幅

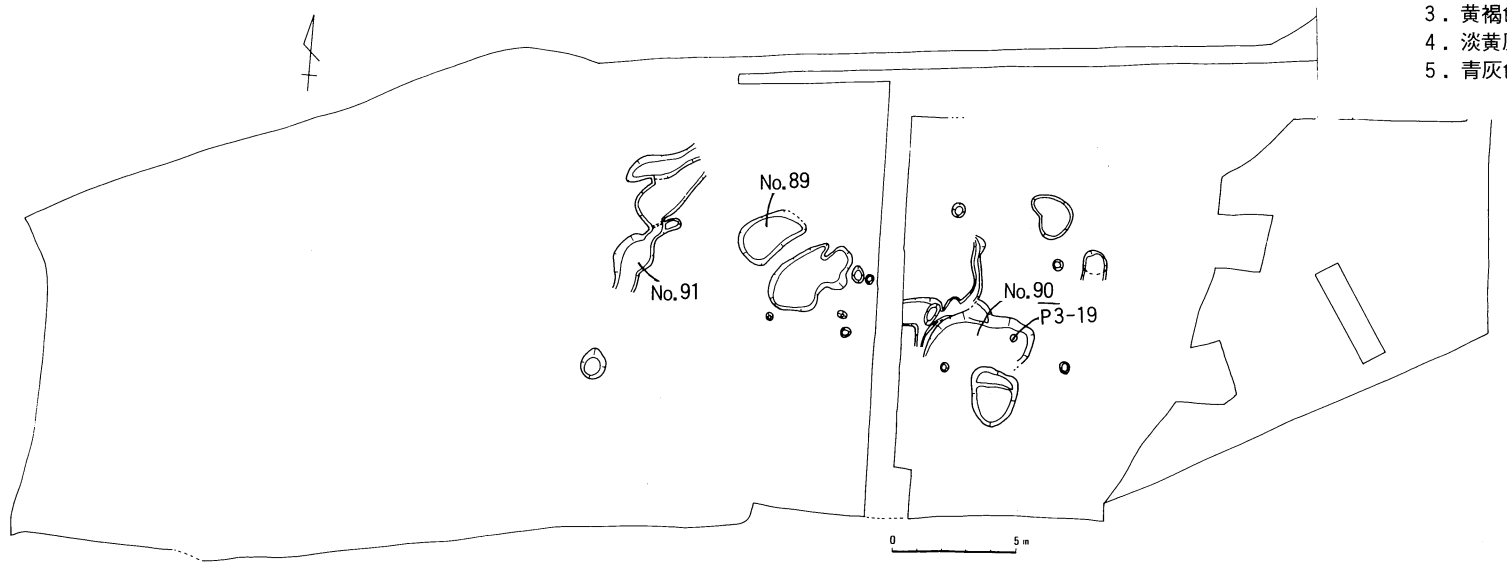




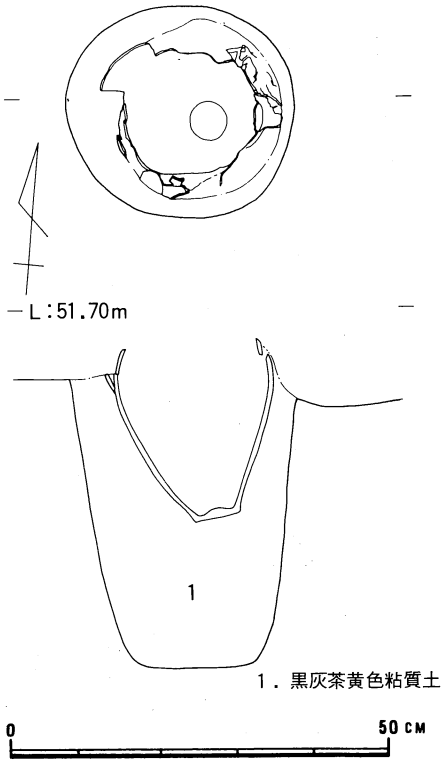
第52図　F－7、遺構配置図(1)　S：1／300

1．耕作土
2．青灰色砂質土
3．黄褐色砂質土
4．淡黄灰色砂質土
5．青灰色微砂
6．茶褐色粘質土
7．灰茶黒褐色土
8．茶灰色粘質土
9．青灰黄色粘質土

トレンチNo.1土層断面図（S：1／80）



(2)



第54図　F－7、P3－19 遺物(91)出土状況

約25～60㎝，深さ約6～14㎝を測り，断面形U字形を呈する。土師器の椀・小皿，コネ鉢，鉄釘（第73図・112）等々を出土している。

No.61溝

調査区中央北に位置し，東から西流しほぼ直角に南に曲がり，No.60溝に中ほどで接続する。幅約20～60㎝，深さ約4～15㎝を測る。須恵質の小片を出土している。

No.62溝

調査区東寄りに位置し，南北に延びる。幅約15～40㎝，深さ約4～10㎝を測る。土師器の小皿（第73図・111）等を出土している。

No.63，64溝状遺構

調査区西端部に位置し，北東から南西へ延びる。地山の面で検出された。幅約30～110㎝，深さ約5～45㎝を測る。No.64の埋土から擂鉢口縁を出土している。埋積状況および旧尾根の裾部に沿って検出されたこと等から道である可能性が高いものと思われる。（第55図）

No.65土壙

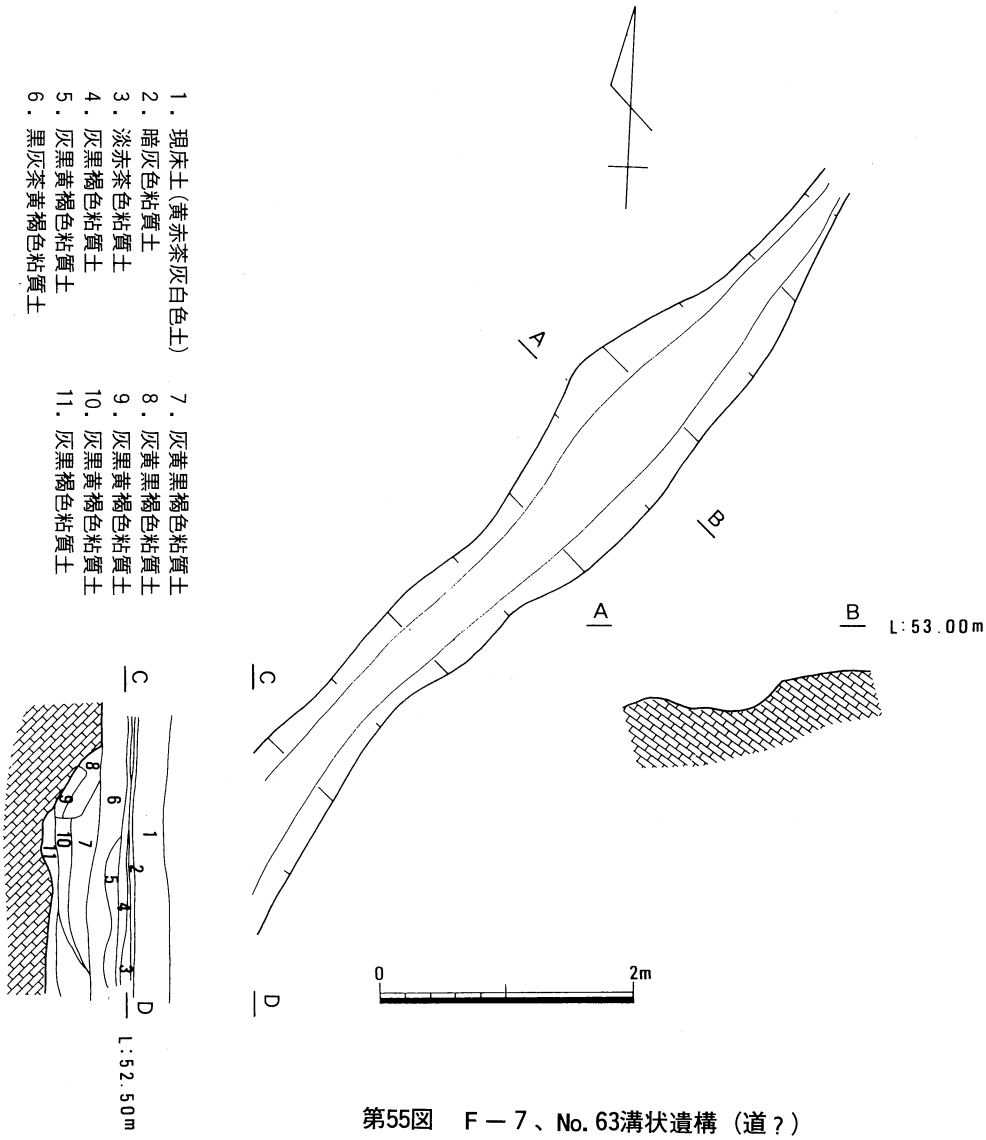
調査区東部南に位置し，南側を掘削により失っている。残存部分の平面形は，不整の半円形を呈し，東西約170㎝，南北約100㎝，検出面からの深さ約20㎝を測る。壙壁の傾斜は急で，丸みをもって底面に続く。埋積土中から（第69図・83）のほか，土師器の小皿，早島式土器と思われる小片を出土している。

No.66土壙

No.65の北西に位置し，平面形は南北に長い不整の長楕円形を呈している。190×100㎝，深さ約14㎝を測る。壙壁は緩やかに丸みをもって皿状の底部に至る。埋積土は2層に分かれ，土師器の甕口縁を出土している。（第56図）

No.67土壙

No.66の東側に位置し，平面形は150×120㎝の不整の楕円形を呈している。深さ約15～40㎝を測り，壙壁は急峻で，底面はほぼ平坦で北側に低まっている。遺物は出土していない。



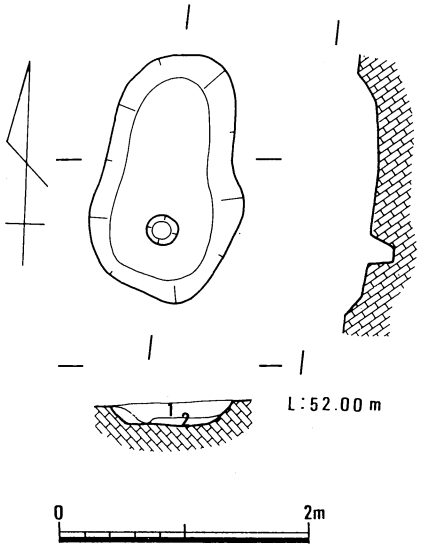
第55図　F－7、No.63溝状遺構（道？）

No.68土壙

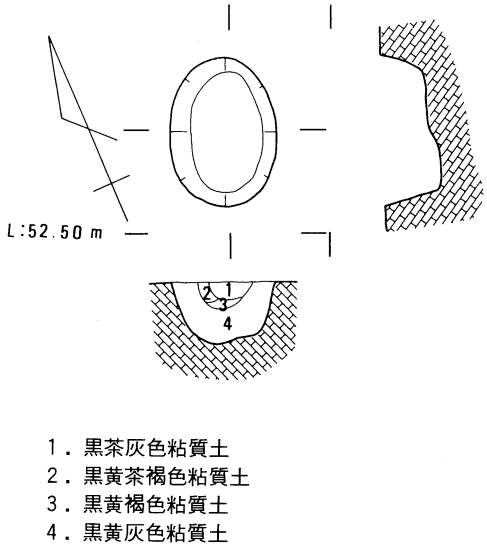
調査区東南部，No.67の北東に位置する。平面形は90×110㎝の不整の円形を呈し，深さ約9～18㎝を測る。西側を径約40㎝を測るピットにより切られている。壙壁は緩やかで丸みをもって底面に続く。埋積土中から土師器の皿，早島式土器と思われる小片を出土している。

No.69土壙

No.68の北西に位置し，平面形は90×120㎝を測る楕円形を呈し，深さ約35～42㎝を測る。壙壁は急で底面は丸みを持っている。底部南側は浅い段になって掘り込まれている。埋積土中



第56図　F－7、No.66土壙



第57図　F－7、No.69土壙

から土師器の小片を出土している。（第57図）

No.70土壙

調査区中央東寄り，No.54，55溝の北に位置し，平面形は110×155㎝を測る不整の楕円形を呈し，深さ約20～30㎝を測る。壙壁は緩やかで，底面は丸みを持って窪んでいる。（第58図）

No.71土壙

調査区東南端部に位置し，平面形は南西に細まる不整形のものである。縦横およそ240×120㎝，検出面からの深さ約5～25㎝を測る。東南に向けて傾斜する斜面上に検出された浅い窪み状の土壙である。埋積土中から土師器小片を出土している。

No.72土壙

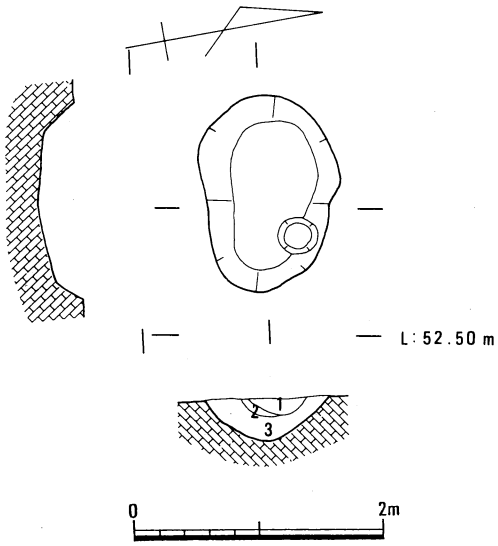
No.71の北西に位置し，平面形60×100㎝を測る楕円形を呈する。深さ約16㎝を測る。壙壁から底面にかけて丸みを持つ椀状のもので，壙内には礫が埋積していた。

No.73土壙

調査区東部No.72土壙の北側に位置する。平面形は110×70㎝を測る楕円形を呈する。深さ約15㎝を測る。壙壁は急峻で底面はほぼ平坦である。

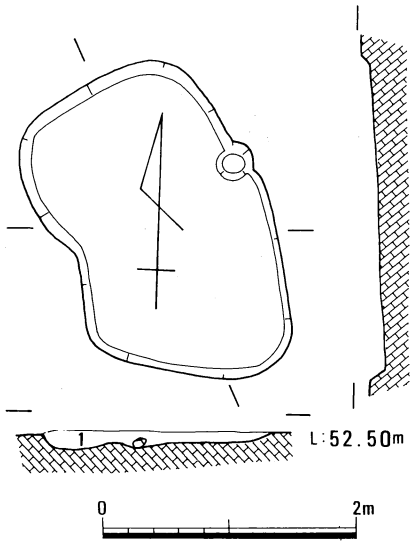
No.74土壙

No.73の北に位置し，平面形は105×65㎝を測る楕円形を呈する。深さ約15㎝を測り，壙壁



1．黒黄褐色粘質土
2．黒黄茶灰色砂質土
3．黒黄灰色粘質土

第58図　F－7、No.70土壙



1．暗灰黒褐黄色粘質土

第59図　F－7、No.77土壙

は緩やかで椀状を呈している。

No.75土壙

調査区東部北寄りに位置し，平面形は不整の方形を呈し，縦横約120×170㎝，検出面からの深さ約10～26㎝を測る。壙壁は緩やかに丸みをもって底面に至る。底面は浅い段をなし丸みを持って窪んでいる。埋積土中から土師質の椀口縁（第69図）(81)，瓦質の鍋（82）等を出土している。（83），（84）は土師質のものである。

No.76土壙

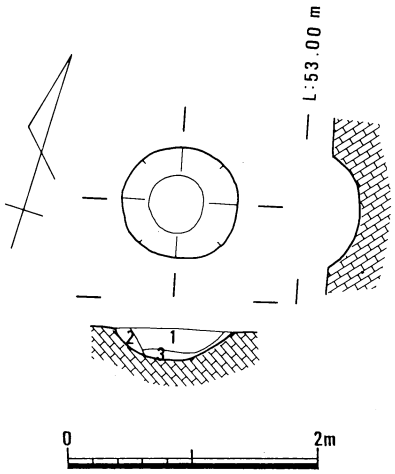
No.75土壙の西に位置し，検出された平面形は東西に長い不整の隅丸長方形を呈している。縦横約230×430㎝，検出面からの深さ約２～６㎝を測るごく浅いもので，底面はほぼ平坦である。

No.77土壙

調査区ほぼ中央に位置し，平面形約160×250㎝の不整の方形を呈し，検出面からの深さ約６～10㎝を測る。埋積土中から須恵器小片を出土している。（第59図）

No.78土壙

No.77土壙の北東に位置し，削平を受けているものと思われる。検出された平面形は，東部に細まった卵形を呈し，約130×200㎝，検出面からの深さ約10㎝を測る。遺物は出土してい



1．灰黄色粘質土(Mn)
2．灰色粘質土(礫)
3．灰赤茶色粘質土

第60図　F－7、No.79土壙

ない。

No.79土壙

調査区西部北端に位置し，平面形はほぼ円形を呈する。径約90㎝，検出面からの深さ約25㎝を測る。壙壁はやや急で椀状を呈する土壙である。埋積土層は3層に分かれ，瓦質，土師質の小片を出土している。（第60図）

No.80土壙

調査区中央南端に位置し，平面形は南北に長い卵形状を呈する。長径約150㎝，短径約80㎝，深さ約8㎝を測る浅い窪み状の土壙である。遺物は出土していない。

No.81建物

調査区西部北寄りに位置し，棟方向をN60°Eにとる1×2間の掘立柱建物と思われる。梁行は，東から約230㎝，240㎝，270㎝，桁行は，北側東から約240㎝，260㎝，南側約260㎝，300㎝を測る。柱穴の径は約30～60㎝を測る。柱穴埋土内から土師器小皿（P4－5），瓦質の小片（P－12），擂鉢の小片（P4－6），ほか土師器，須恵器等の遺物を出土している。（第61図）

No.82建物

No.81建物の北西に重なる形で位置する1×1間の建物と思われる。各柱穴間は時計回りで，195㎝，175㎝，160㎝，190㎝を測る。（P4－7）から土師器の小皿を出土している。（第61図）

No.83建物

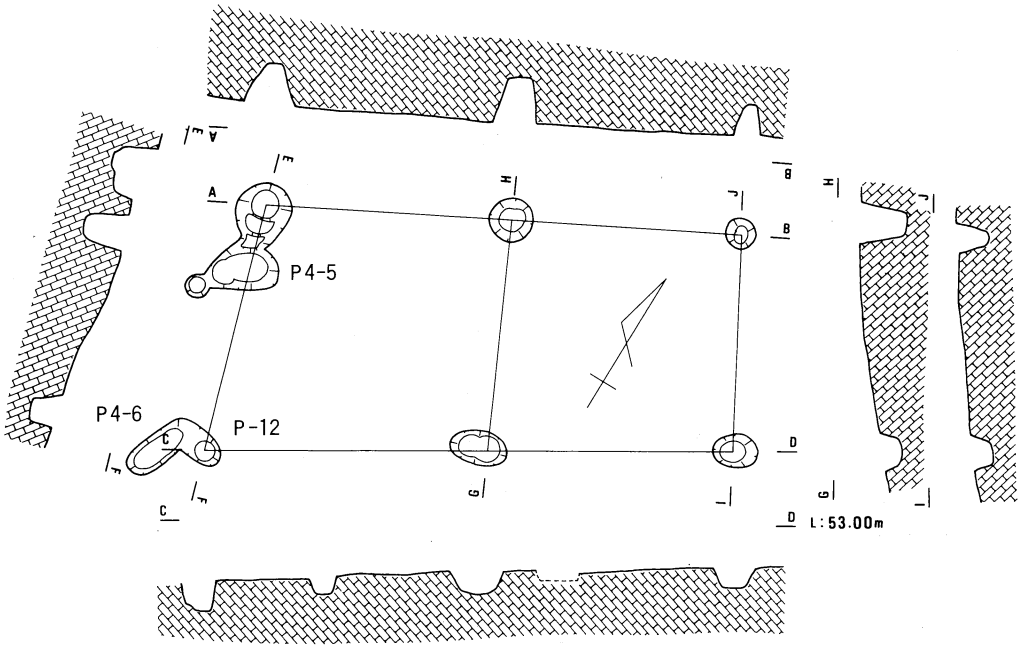
No.82建物の西に位置する1×1間の建物と思われ，各柱穴間は東から時計回りで，230㎝，245㎝，220㎝，235㎝を測る。（P4－8）から須恵器，土師器の小片を出土している。（第62図）

No.84建物

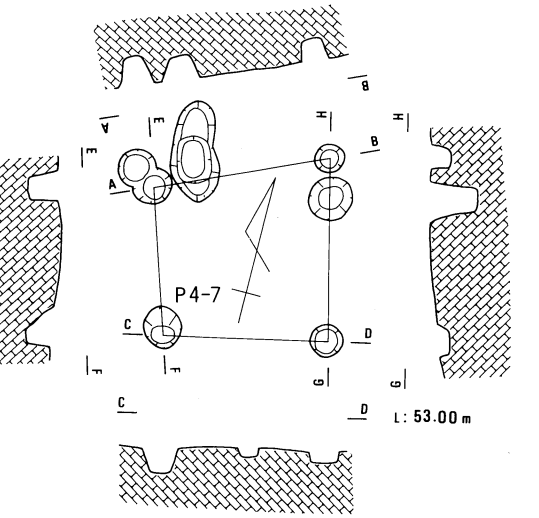
No.83建物の西側に重なって位置する2×2間，300㎝×380㎝の規模の総柱建物と思われる。各柱穴間は東西方向よりも南北方向に長く，東西方向で140～160㎝，南北方向で180～200㎝を測る。建物の長軸方向はN18°Wである。柱穴内の埋積土から瓦質の土鍋口縁（P4－3），釜口縁（P－21）のほか，須恵器，土師器の小片等々を出土している。（第62図）

No.85建物

調査区西端，No.84建物の西に位置する。棟方向をN43°Eにとり，梁行230～250㎝，桁

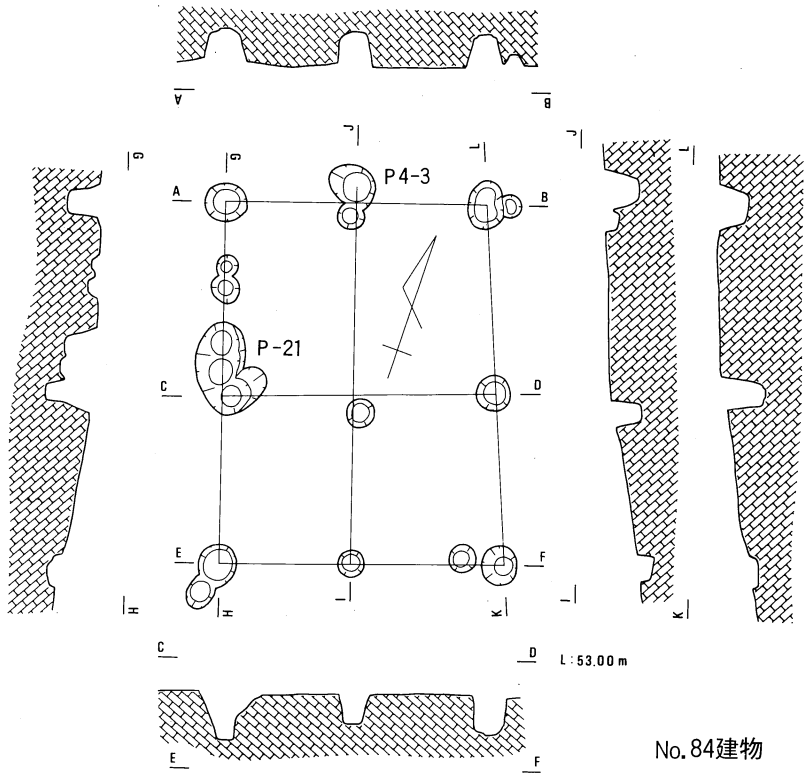


No.81建物

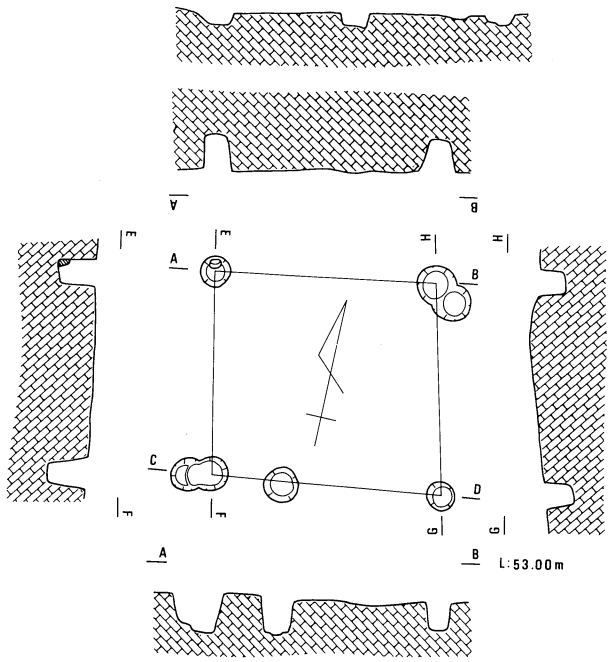


No.82建物

第61図　F－7、No.81、82建物（S：1／80）



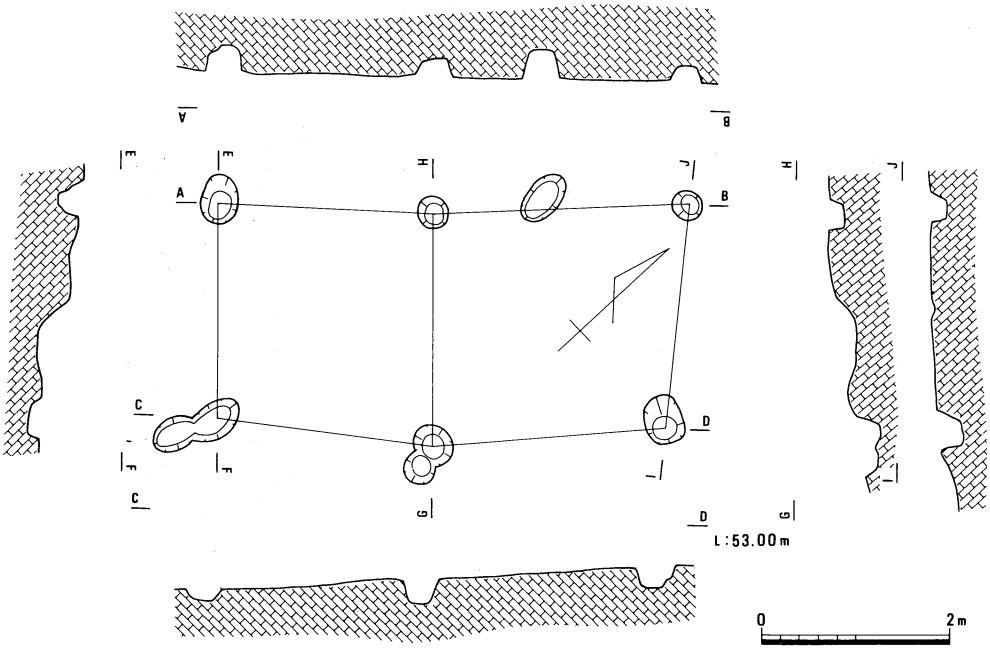
No.84建物



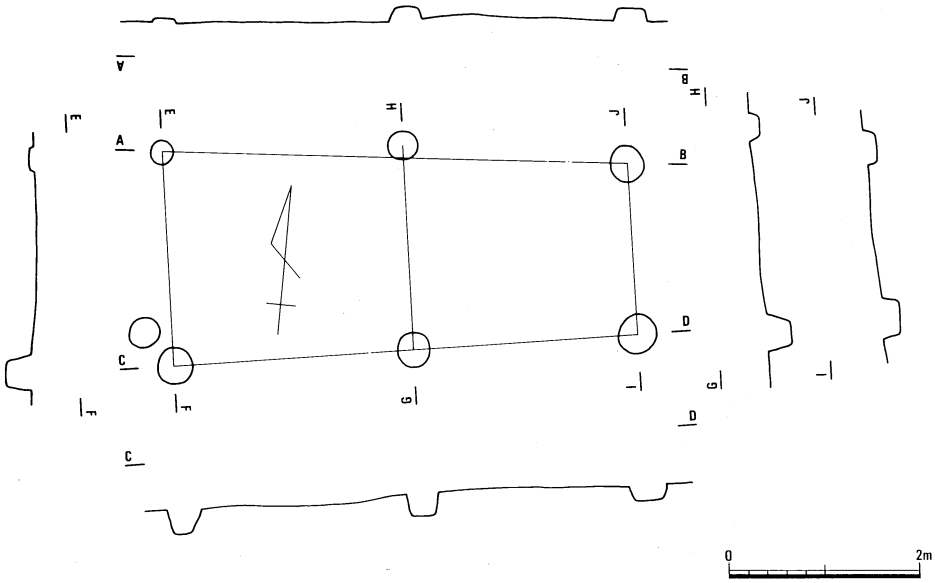
No.83建物

0 2m

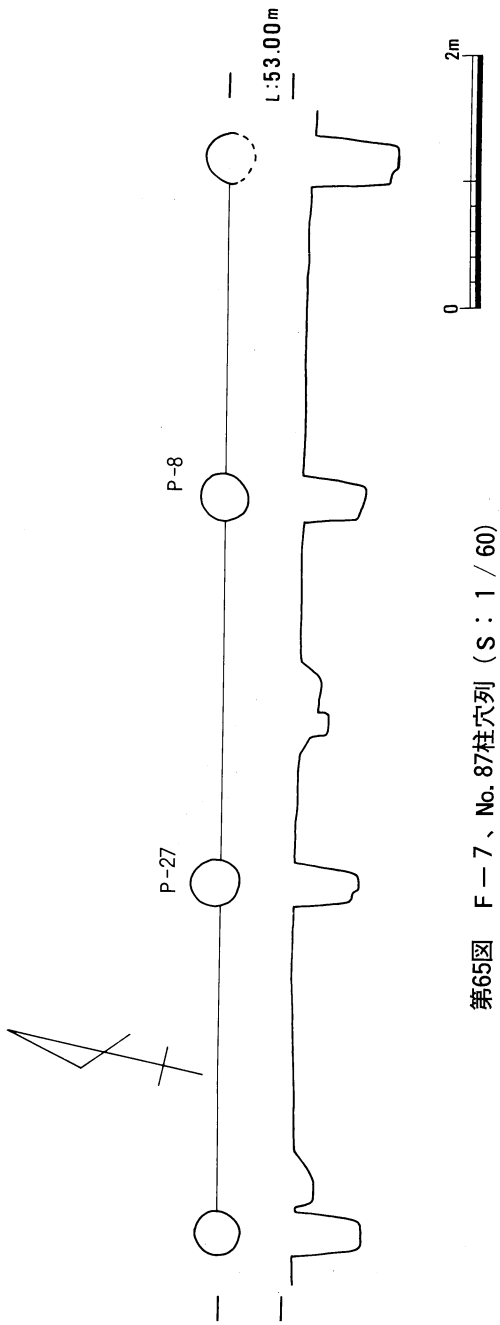
第62図　F－7、No.83、84建物（S：1／80）



第63図　F－7、No. 85建物（S：1／80）



第64図　F－7、No. 86建物



第65図　F－7、No.87柱穴列（S：1／60）

行は，北側で東から270㎝，230㎝，南側で240㎝，230㎝を測る。遺物は出土していない。（第63図）

No.86建物

調査区東部北寄りに位置する。1×2間のもので，棟方向N80°E，梁行は東から180㎝，220㎝，230㎝，桁行は北側東から240㎝，250㎝，南側240㎝，250㎝を測る。柱穴の径25～40㎝を測る。遺物は伴っていない。（第64図）

No.87柱穴列

調査区西部中央に位置し，軸方向N78°Eで，柱穴埋積土中から土師器の小皿（P－27），椀高台(P－8)を出土している。(第65図)

No.88石列

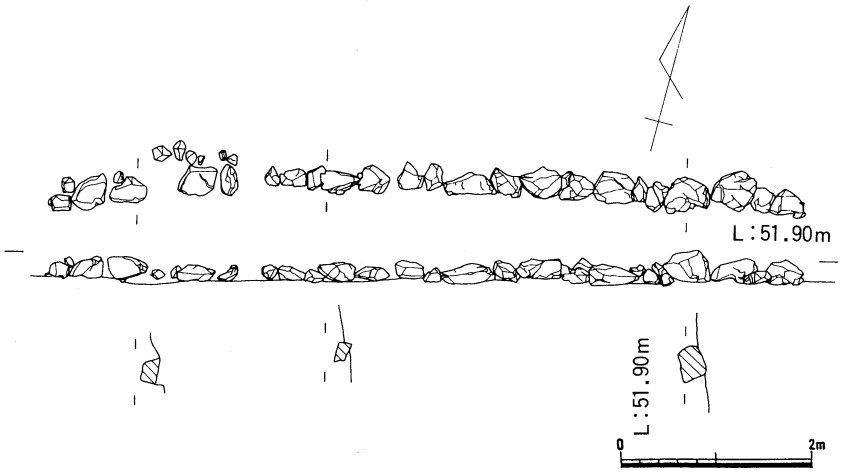
調査区西部，No.87柱穴列の南に位置する。東西に延びる段に伴って約8mに渡って検出されたものである。南側を中心に周辺から土師器の小皿，須恵質の甕等（第70図・96～102）を出土している。（第66図）

No.89土壙

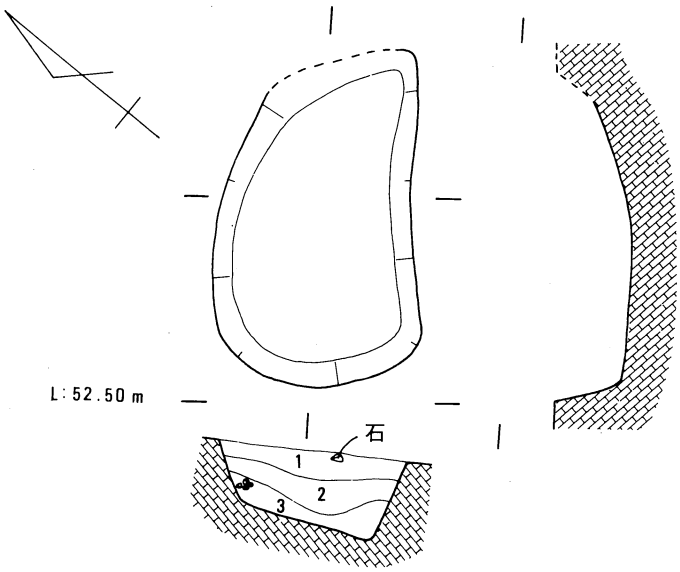
調査区中央に位置し，地山面で検出したものである。およそ140×250㎝を測る不整の長方形を呈するもので，深さ約60㎝を測る。壙壁は急峻で屈曲して底面に至る。埋積土は3層に分けられ，どの層にも礫を含んでいた。遺物は出土していない。時期は明らかでない。（第67図）

No.90（？）

調査区東部に地山面で検出された半円形を呈する遺構である。当初は住居の可能性も考えられたが，掘り上げた状況からは住居とは判定し得なかった。遺構の上部，南側ともに削平を受けているものと思われる。遺物は出土していない。

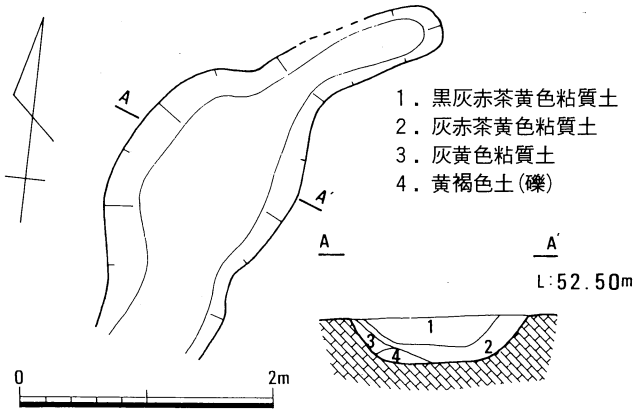


第66図　F－7、No.88石列（S：1／80）



1．赤茶灰黄色粘質土(Mn)
2．灰黄色粘質土(Mn、礫)
3．茶灰色粘質土(礫多い)

第67図　F－7、No.89土壙（S：1／60）



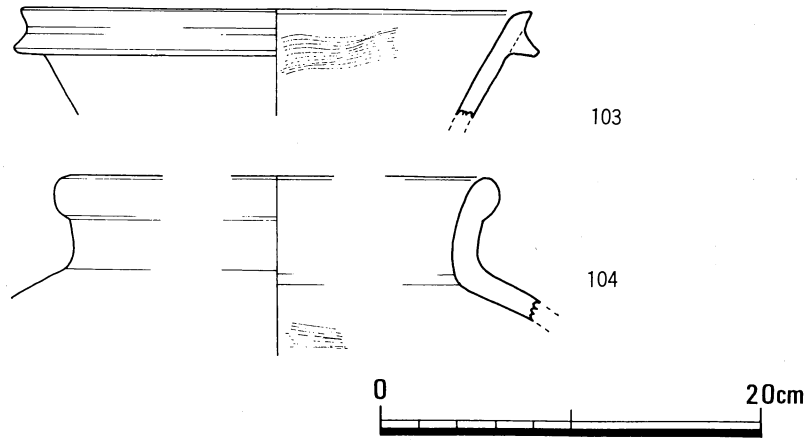
第68図　F－7、No.91土壙（？）

No.91（？）

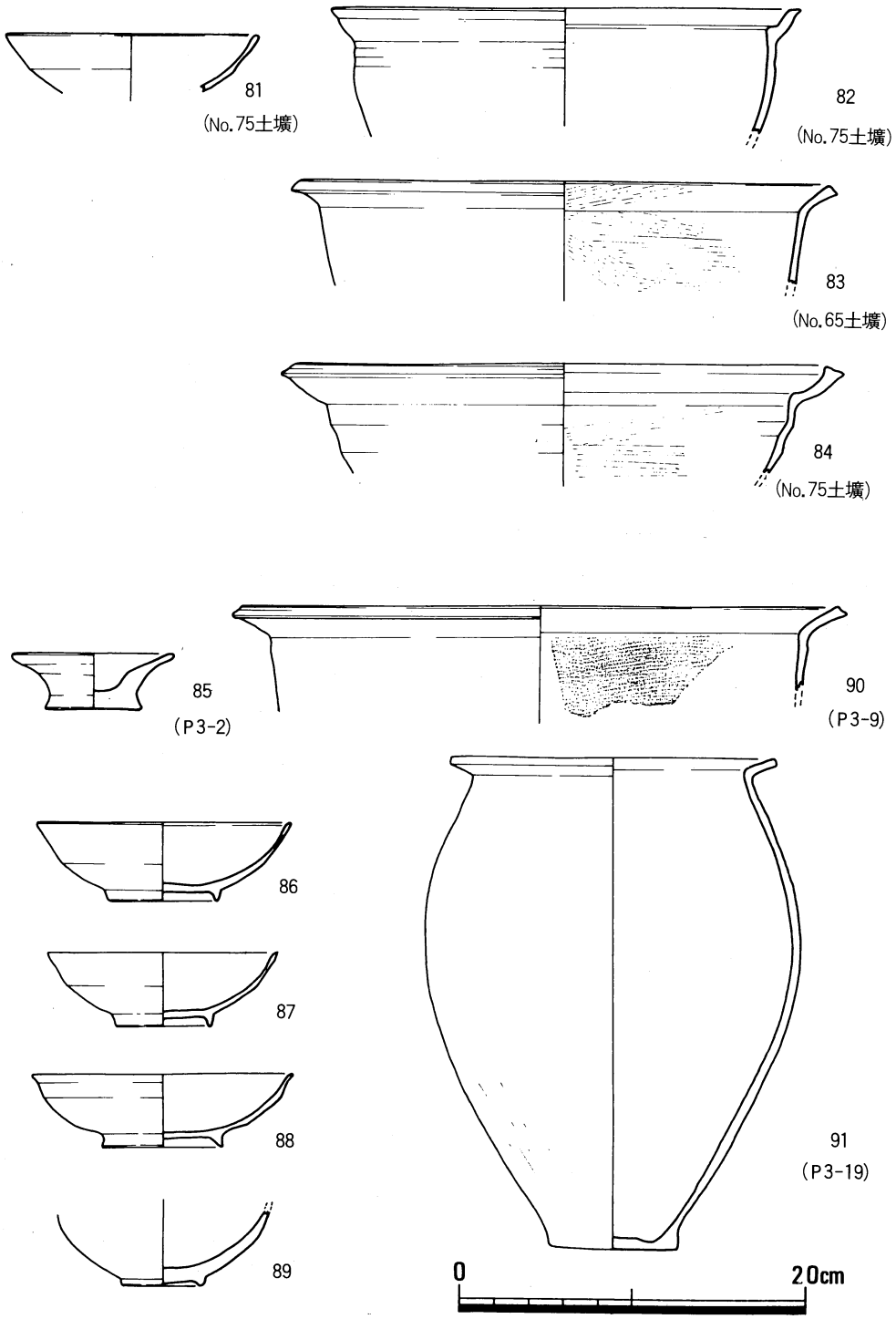
調査区中央部に位置し，地山面で検出された不整形の遺構である。最大幅約140㎝，長さ約350㎝，深さ約35㎝を測る。遺物は出土していない。時期は明らかでない。（第68図）

C．遺物

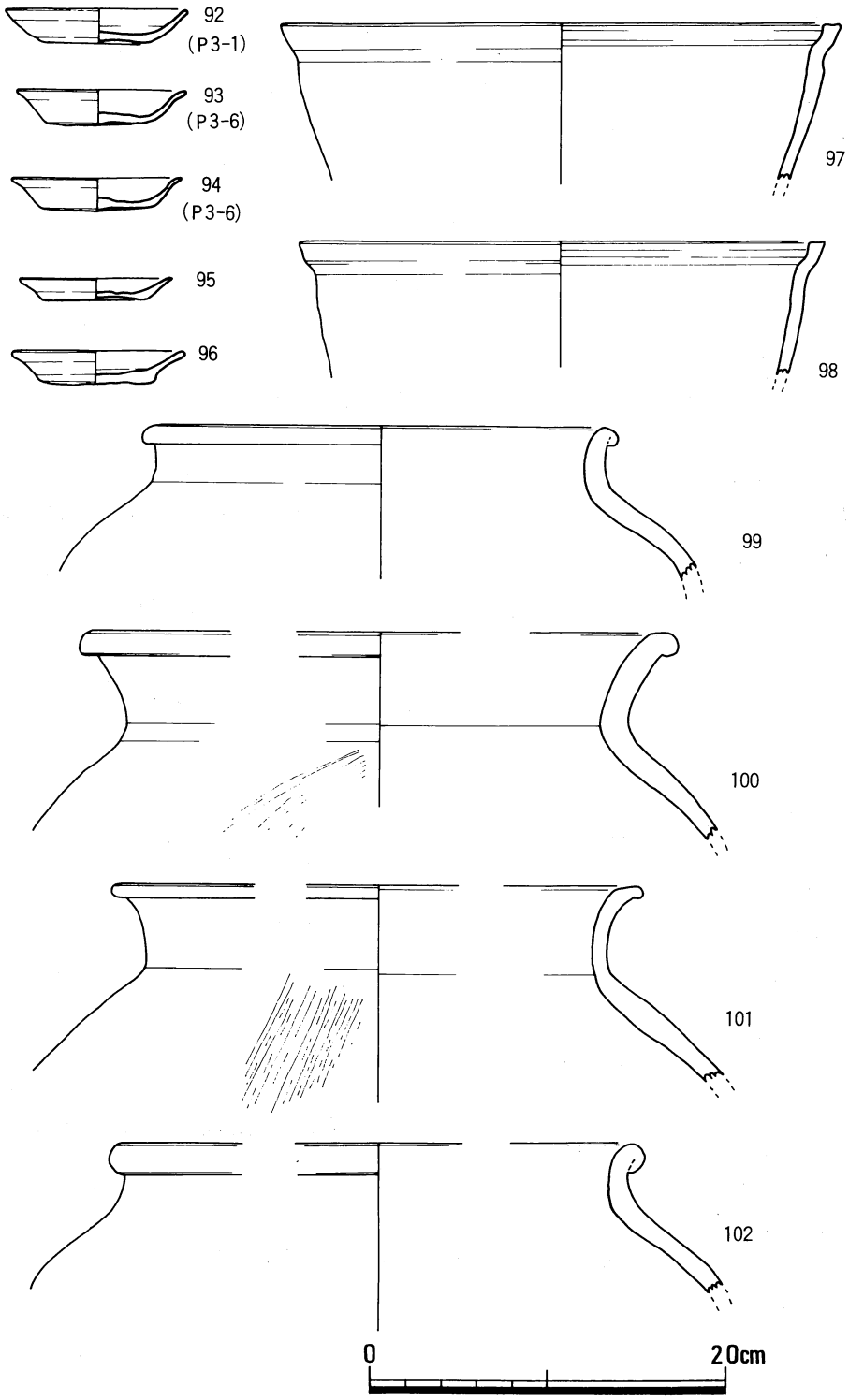
造成土中からの出土遺物は，磨製石斧（第132図・174），石礫（第133図・180，193，201）を含み，弥生時代から中世までのものを出土している。（第69図）（86）～（88）は「早島式土器」であり，破片も含めて，F－7では数多く出土した。（第72図）（105），（106）は土鍋の足であると思われる。（107）～（109）は土錐で，この調査区で多く出土した。（110）は竈の一部と思われる。（113）は調査区西部の造成土から出土した青磁の椀であるが，外面に蓮弁文が見られ龍泉窯のもの（？）と思われる。(115）は調査区東南の造成土から出土したもので弥生時代中期のものと思われる。（114）は赤褐色を呈する土鍋である。(図版22，23)



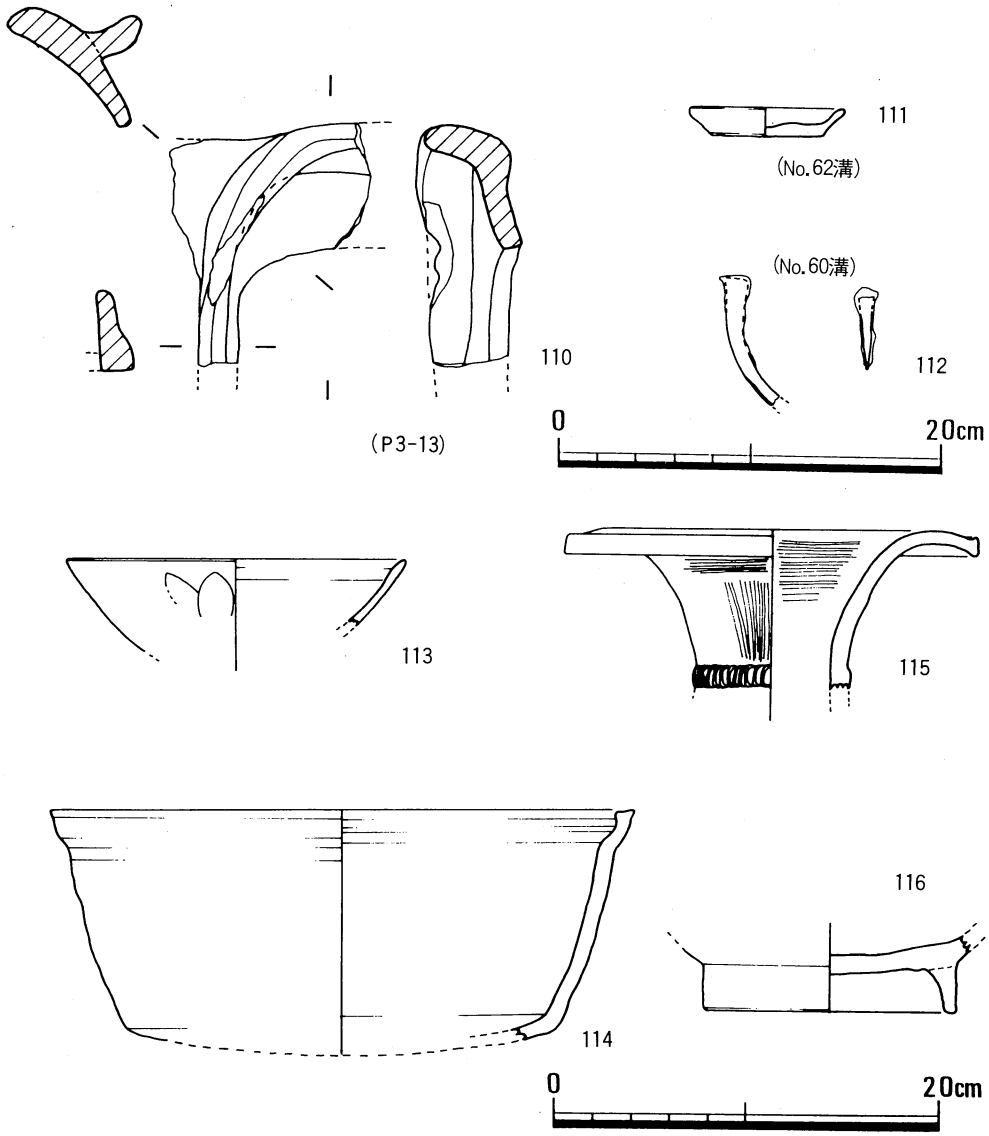
第71図　F－7、造成土出土遺物（1／4）



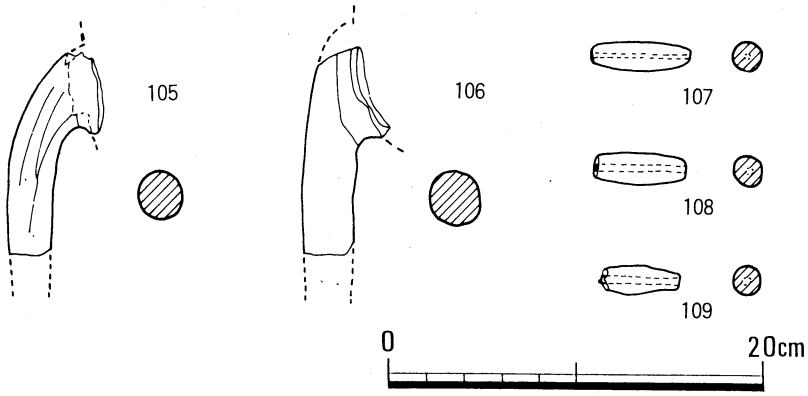
第69図　F－7、遺構・造成土出土遺物（1／4）



第70図　F－7、出土遺物（1／4）



第73図　F－7、遺構・造成土出土遺物（1／4）



第72図　F－7、造成土出土遺物（1／4）

F－8

a．調査区概要

山条調査区の北東部，F－7調査区の東南に当たり，谷池の真南に位置する。調査区東側の地形の落ち込みは急で，東端部は谷池から流出する谷川に接している。南側下段の水田との落差は，現行でおよそ2mを測り，東部，南部とも石垣を築いて水田が営まれていた。旧地形は北西に高く東南へ下る急な斜面をなしていて，調査区北西を中心に地山を掘削して平坦な面が造成されている。東部から南部にかけては急激な落ち込みをみせ，東南部は若干突出する形をとっていて，全体としては台状の形状をなしている。

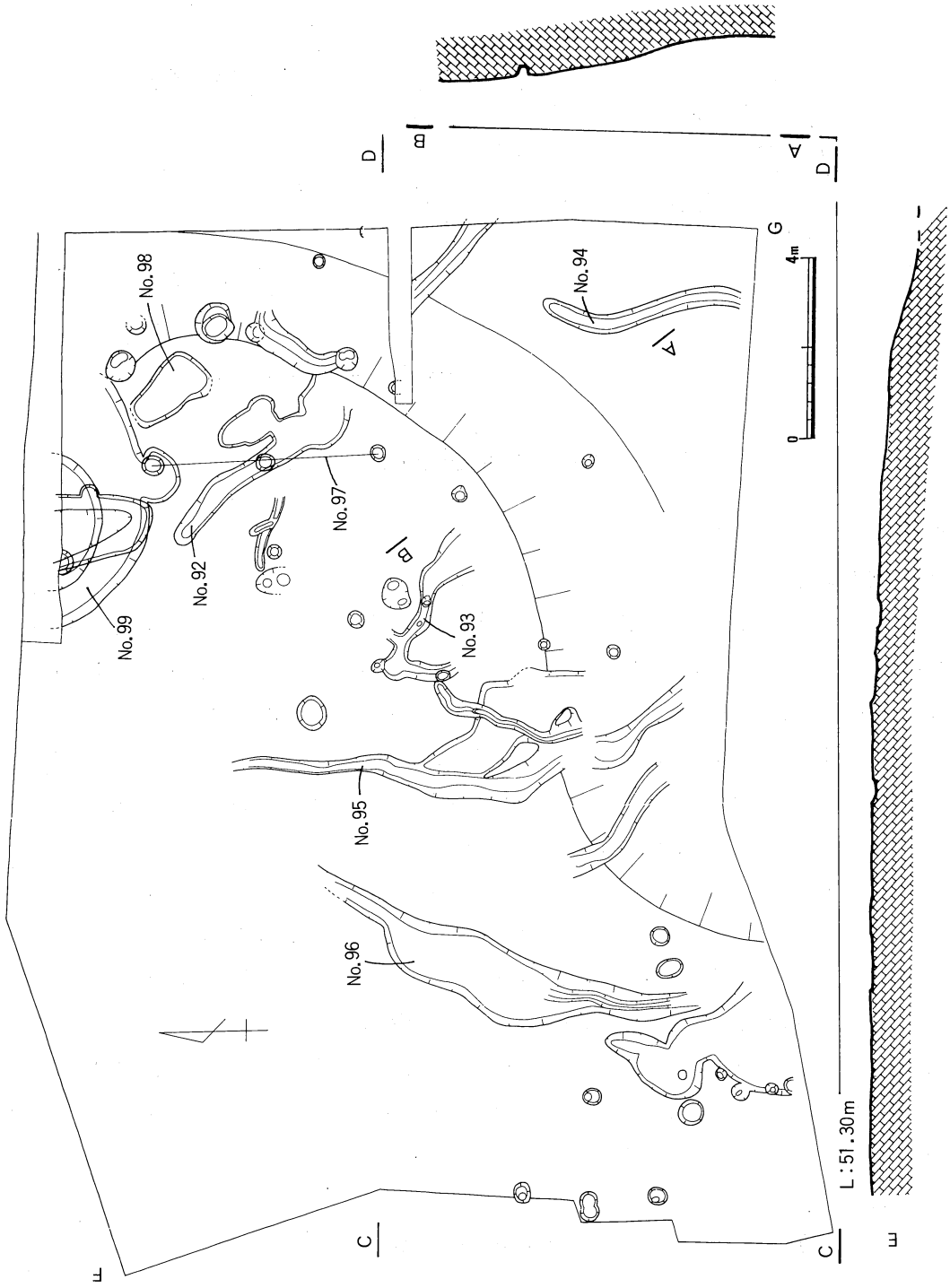
東南部での層序は，現耕作土の下，1．現床土，2．青灰茶色土，3．茶赤褐色土，4．灰黒褐色粘質土，5．黒褐灰色粘質土，6．濃茶褐色粘質土，7．濃茶色粘質土，8．茶灰色土（礫を多く含む）9．黄茶褐色（青灰混）粘質土，10．青灰黒褐色粘質土，11．地山の順である。調査区西部での層序は，現耕作土の下に，1．白灰色土，2．茶赤褐色粘質土，3．白灰茶黒褐色土，4．黒黄褐色粘質土（礫を含む），5．灰茶黄褐色粘質土，6．地山であり，2．3．層は中世の遺物を含んでいる。4．からは土師器の小片を出土している。（第74図）（第75図）

b．遺構

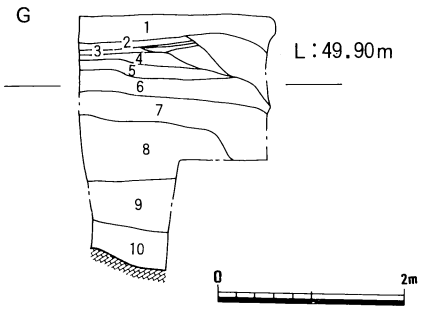
どの遺構も遺物を伴っておらず，この地区からの遺物の出土は造成土中からに限られた。それぞれの遺構の時代は明らかではない。

No.92溝

調査区東部の斜面上に位置し，北西から南東へ延びる。幅約45～120㎝，深さ約3～20㎝を



第74図　F－8、遺構配置図（S：1／150）



1．床土
2．青灰茶色砂質土
3．茶赤褐色砂質土
4．灰黒褐色粘質土
5．黒褐灰色粘質土
6．濃茶褐色粘質土
7．濃茶色粘質土
8．茶灰色砂質土(礫を多く含む)
9．黄茶褐色(青灰混)粘質土
10．青灰黒褐色粘質土

第75図　F－8、東南部土層断面図（S：1／80）

測り，断面形はU字形を呈する。遺物は出土していない。

No.93溝

調査区中央やや東南寄りに位置し，削平によって失われた北側から，南と東南へ分かれて迷走する状態を呈している。幅約30～100㎝，深さ約6～14㎝を測り，底面は一様ではなく，凹凸が激しい。遺物は出土していない。

No.94溝

調査区東南部に位置し，柱状断面図8．層に切り込んで掘られた溝である。南北に緩くS字状に腕曲する。幅約40㎝，深さ約10㎝を測り，断面形U字形を呈する。遺物は出土していない。

No.95溝

調査区中央南寄りに位置する。ほぼ南北に延び，中ほどで分岐しながら緩く東南部へ曲がる。幅約30㎝から最大幅160㎝，深さ約5～25㎝を測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土していない。

No.96溝

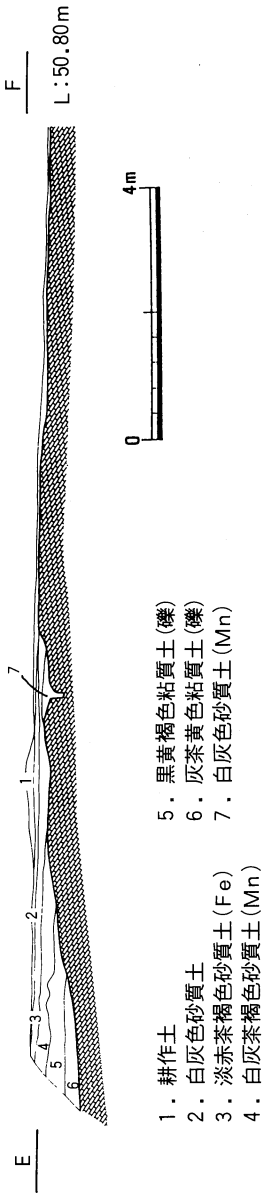
調査区西部南寄りに位置し，北東から緩く腕曲しながら南流する。幅約40～150㎝，深さ約10～15㎝を測る。遺物は出土していない。

No.97柱穴列

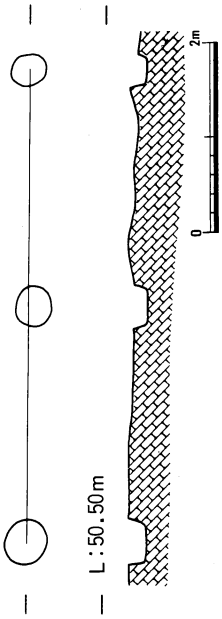
調査区東部に位置し，ほぼ南北に並ぶ。柱穴間250㎝を測り，柱穴の径約35～45㎝を測る。遺物は伴っていない。（第77図）

No.98土壙

調査区北東部，No.97柱穴列の東に位置する。平面形は不整の方形を呈し，縦横約100×190㎝，深さ約10～30㎝を測る。埋積土は，1．青灰砂質土，2．青灰砂礫，3．黒褐色砂質土の3層に分けられる。遺物は出土していない。



第76図　F－8、西壁土層断面図（S：1／120）

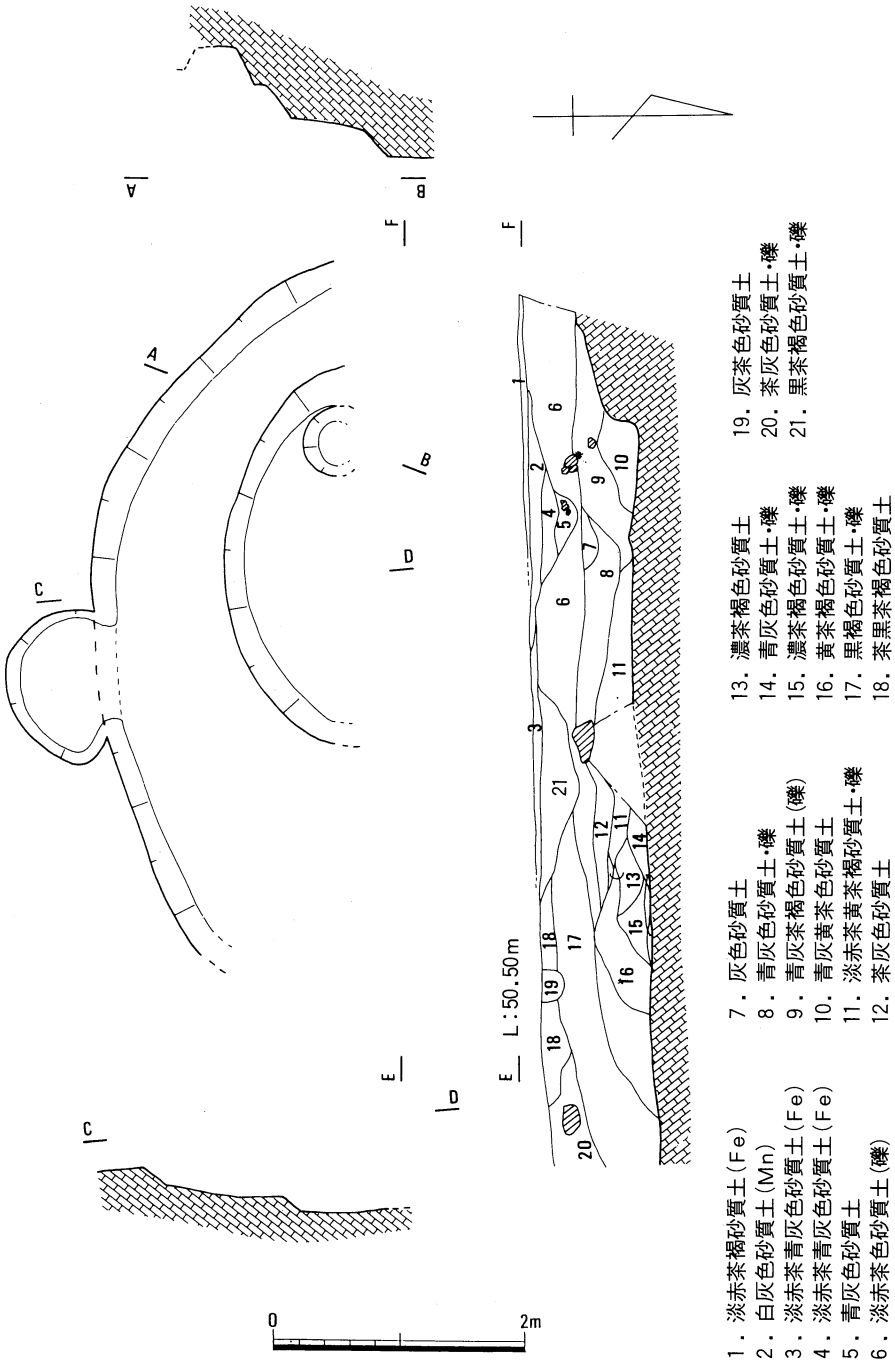


第77図　F－8、No. 97柱穴列

No.99（？）

調査区北部東寄りに部分的に検出された遺構で，全体形は明らかではない。検出された平面形は半円形を呈し，中ほどに段を持って堀り込まれている。東西約600㎝，南北約200㎝，深さ約50㎝を測る。遺構の内部にはグライ化した砂礫土の埋積が認められ，頻繁な湧水が見られ

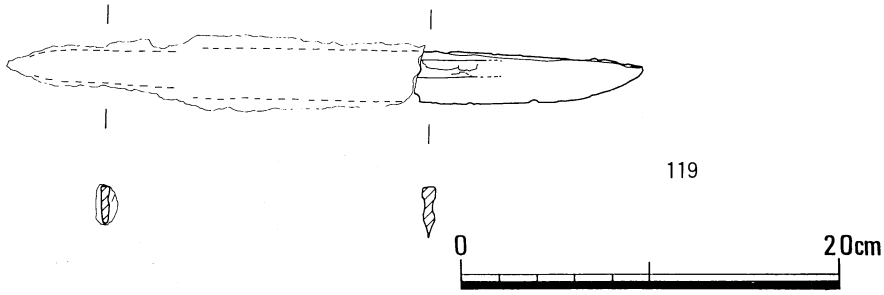
た。遺物は出土していない。（第78図）



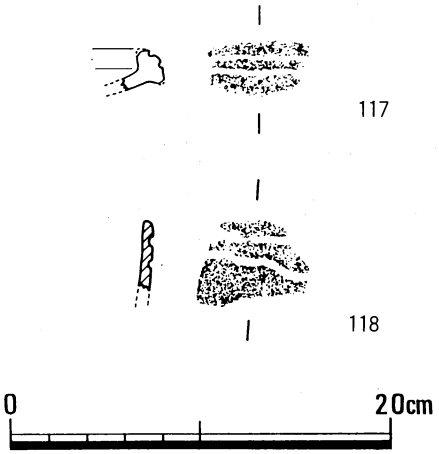
第78図　F－8、No.99遺構（S：1／60）

c．遺物

（第79図・117，118）は調査区南東部の造成中から出土した。黒褐茶色を呈する脆い土器片で，胎土は砂粒を多く含む。（第80図・117）（図版26）は口縁端部に２条の凹線文をめぐらし，（118）にも，くっきりとした凹線文を認める。表面の摩滅は激しい。縄文土器（後期？）の可能性が高いものと思われる。（119）は調査区中央南寄りの造成土中から出土した鉄製の刀子である。全長約33㎝，推定の刃渡り約25㎝を測る。このほか造成中から，須恵器，土師器，瓦器，青磁，備前焼き，等々いずれも小片化した遺物を出土している。



第80図　Ｆ－８、造成土出土遺物（１／４）



第79図　Ｆ－８、出土遺物

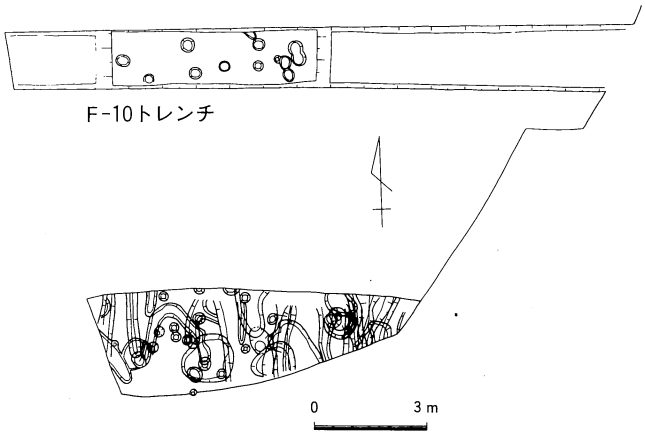
F－10

a．調査区概要

Ｆ－８の南，Ｆ－９の東に位置する。新設の道路（Ｒ－８）部分については，削平を受ける箇所が東部上層の造成土部分に限られるため，遺構を確認の上で保存措置をとった。なお，新設道路南側の圃場となる部分については調査を行った。（第81図）

この調査区は丘陵の東端に当たり，東側に一段の耕地を置いて谷川に接する段状の耕作地である。調査を実行した地区は南側の半円形に張り出した部分である。基本的な層序は，現耕作土の下に，１．淡茶褐灰色土（Feを含む），２．黄褐灰色粘質土，３．白灰色砂質土（礫を含む），４．暗茶褐灰色粘質土（Fe，Mnを含む），５．灰黒褐黄色土（砂を含む），６．地山（黄茶灰色粘質土）である。１．２．３．層から近世の磁器片を含む弥生土器，土師器，

須恵器等の小片，及び瓦片，瓦器片等の遺物を出土している。



第81図　F－10、遺構配置図（1／200）

b．遺構　（第82図・(3)）

No.100土壙

調査区のほぼ中央に位置し，平面形は不整の円形を呈し，径約140㎝，最大深さ約36㎝を測る。壙壁の傾斜は緩やかであり，底面は平坦ではなく，起伏している。埋土中から土師器の小片を出土している。

No.101土壙（？）

南側を削平により消失している。残存部分は約120×150㎝，深さ約８～15㎝を測る。埋土中に土器の細片を含む。

No.102溝

調査区西端に位置し，検出された部分は北西から南へわずかに弧を描いている。幅約45㎝，深さ約５㎝を測る。遺物は伴っていない。

また，上層では，造成土に含まれる遺物から，近世以降のものと思われる複数の溝等を検出している。（第82図・(1)，(2)）

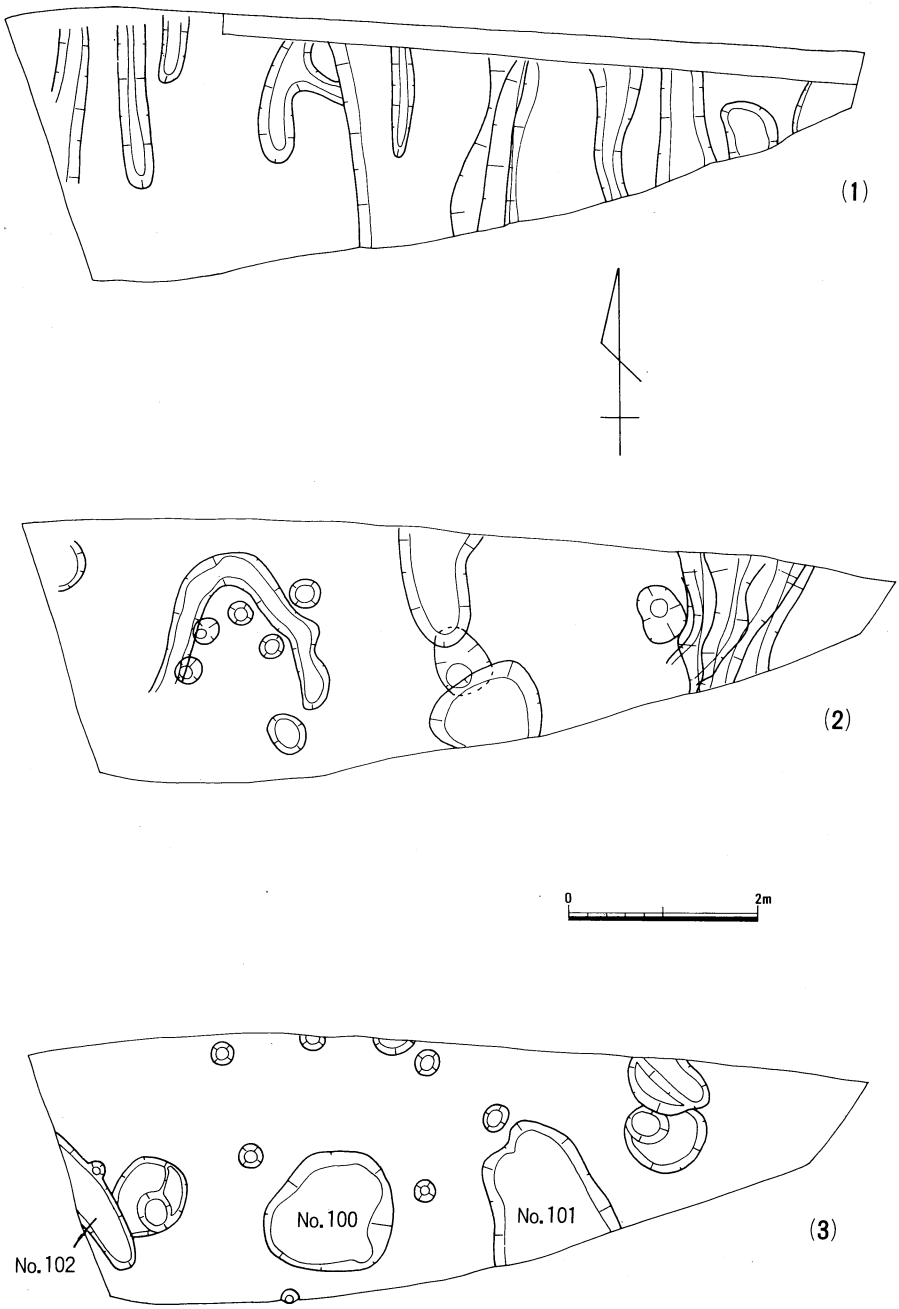
F－10　トレンチ

新設道路（R－８）予定箇所に沿って，幅約1.5ｍ，長さ約16ｍに渡って試掘し，北壁断面図と遺構の平面図を記録した。

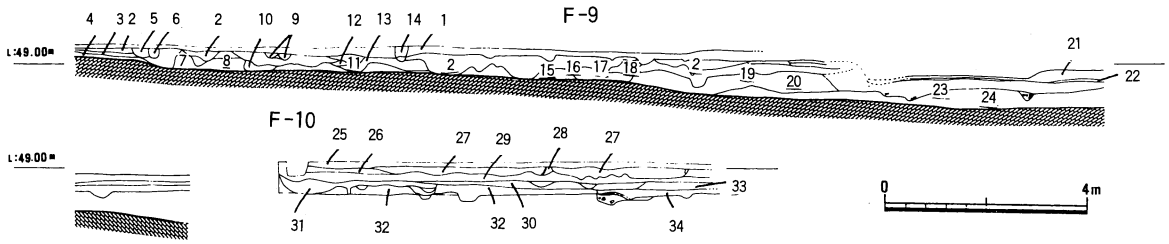
遺構は，現耕作土の下，１．灰青色粘質土，２．灰青黄褐色土粘質土，３．暗灰色砂質土（礫を多く含む），を取り除いた後，複数のピットを検出した。

c．遺物

造成土からの出土遺物は，弥生土器，須恵器の杯高台，土師器，古代の瓦，中世の土鍋，擂鉢（備前焼き）等々である。いずれも小片である。

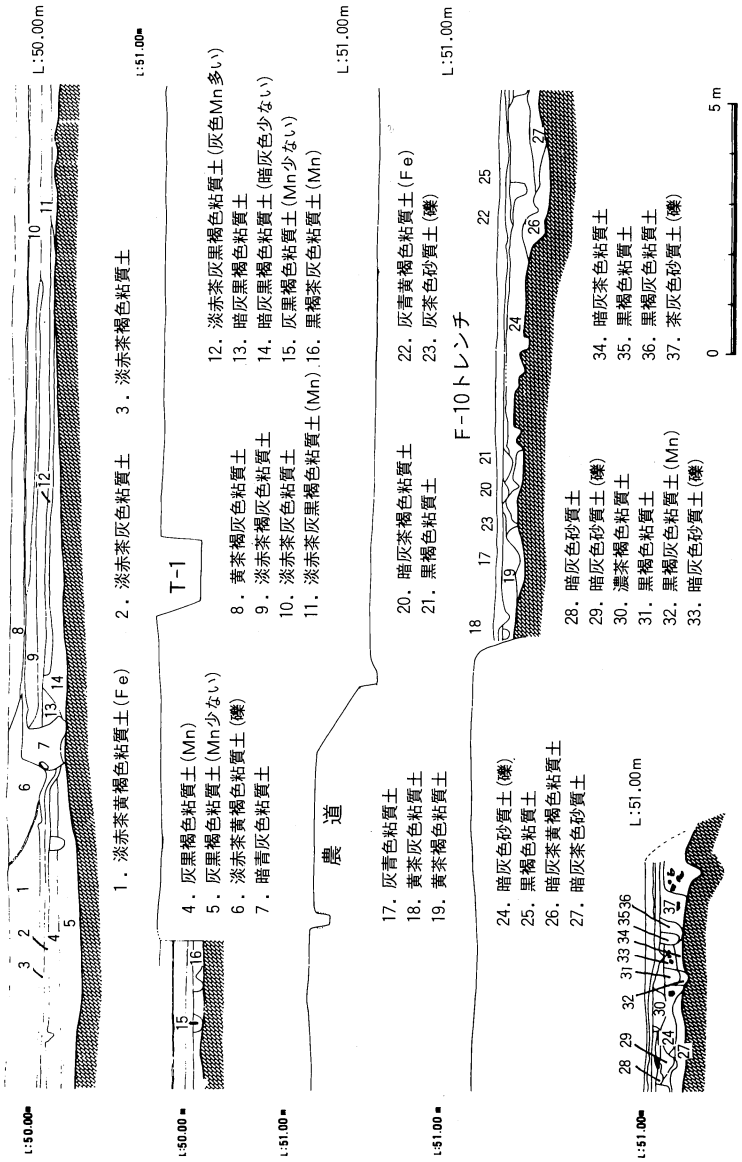


第82図　F－10、遺構配置図（S：1／80）



1．赤茶褐色粘質土(Fe)
2．暗灰色砂質土(礫)
3．暗灰色砂質土
4．黄茶暗灰色粘質土
5．黄淡茶灰褐色粘質土
6．黄淡茶灰褐色粘質土(礫)
7．暗灰色砂質土(礫多い)
8．明茶暗灰色粘質土
9．淡赤茶暗灰色砂質土(礫)
10．(礫)
11．暗灰色砂質土(礫多い)
12．(礫)
13．暗灰黄褐色砂質土
14．暗灰色砂質土(礫)
15．淡茶色粘質土
16．茶灰黄褐色粘質土(礫)
17．茶灰色粘質土(礫)
18．暗灰黒褐色粘質土
19．茶褐暗灰色粘質土
20．暗灰茶色砂質土(礫多い)
21．表土
22．淡茶色土(Fe)
23．暗灰茶色砂質土(礫多い)
24．淡黄茶褐色土(礫多い)
25．淡茶褐灰色粘質土(Fe)
26．灰淡茶色粘質土
27．黄褐灰色粘質土
28．白灰色砂質土
29．白灰色砂質土(礫)
30．暗茶褐灰色粘質土(Fe、Mn)
31．灰黒褐色粘質土
32．灰黒褐黄色砂質土
33．灰黒褐色粘質土
34．黒褐灰黄色粘質土

第83図　F－9～F－10、東西方向土層断面図（S：1／150）

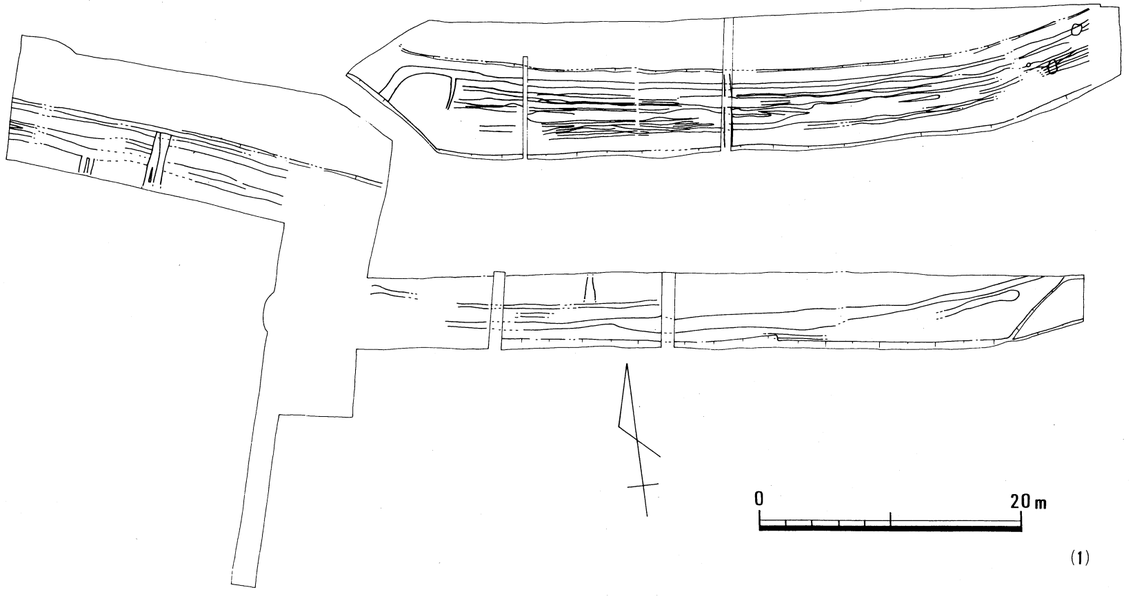


第84図　F－6～F－10（R－8北側）東西方向土層断面図（S：1／150）

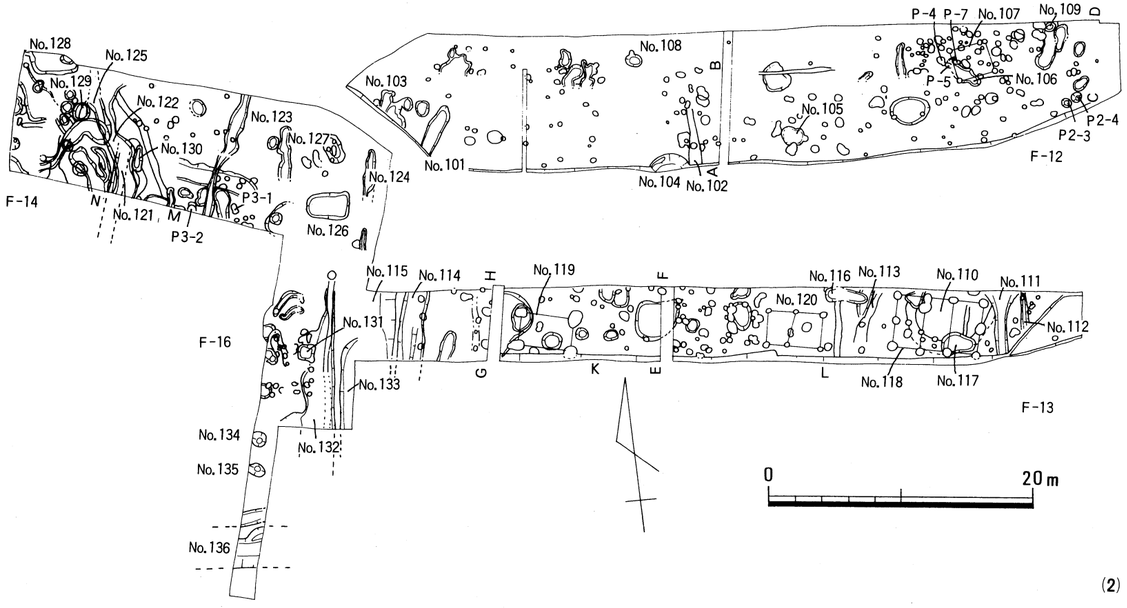
F－12

a．調査区概要

山条調査区の南側東寄りに位置し，東西に延びる町道の南に約1ｍの段差を持ち，1段下がって接する。最大幅約12ｍ，長さ約65ｍの東西に細長い調査区である。旧地形は緩やかに南に傾斜し，調査区の中央北寄りで，旧水田に伴うものと思われる段状を呈する削平の痕跡が認められた。段は現行水田の南側畦畔にほぼ並行し，約15*cm*の段差を持って東西に延びている。この



(1)

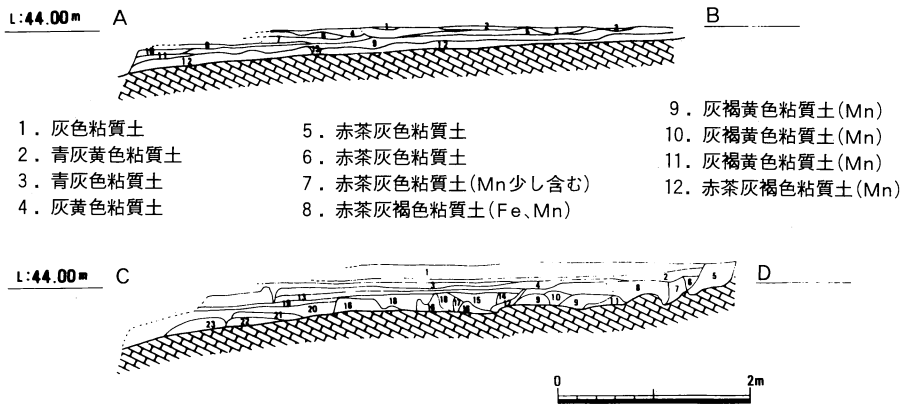


(2)

第85図　F－12、13、14、16　遺構配置図（S：1／400）

ため調査区の北側及び段の南側で検出された遺構は，削平（近世・近代）を受けているものと考える。

調査区中央部での基本的な層序は，現耕作土，現床土の下に，1．灰色粘質土，2．灰赤茶色粘質土（Feを含む），3．灰赤茶色粘質土（黄，Fe・Mnを含む），4．灰黒褐色赤茶黄色粘質土（Mn・Feを含む），5．灰黄黒褐色粘質土（Mnを含む），5．灰黒褐黄色粘質土（Mnを含む），7．赤茶灰黒褐色粘質土（Mnを含む），8．灰黄褐色粘質土，9．地山，である。2～7．の造成土中から，弥生時代・古代・中世の遺物を出土している。



1．淡赤茶灰色粘質土
2．灰色粘質土
3．灰淡赤茶色粘質土
4．淡赤茶灰褐色粘質土(Mn)
5．暗灰黄褐色粘質土(Mn)
6．暗灰色粘質土
7．黄灰褐色粘質土(Mn)
8．暗灰黒褐黄色粘質土
9．赤茶暗灰黄褐色粘質土(Mn)
10．暗灰赤茶黄褐色粘質土(Mn)
11．暗灰赤茶黄褐色粘質土(Mn)
12．暗灰赤茶黄褐色粘質土(Mn)
13．灰淡赤茶褐色粘質土(Mn)
14．灰赤茶褐黄色砂質土
15．赤茶灰褐黄色粘質土
16．灰赤茶褐黄色粘質土(Mn)
17．灰赤茶褐色粘質土(Mn)
18．灰褐赤茶色粘質土(Mn)
19．灰黒褐色粘質土(Mn多い)
20．灰褐赤茶黄色粘質土(Mn)
21．暗灰赤茶色粘質土
22．灰黄赤茶色粘質土
23．黄赤茶灰色粘質土

第86図　F－12、土層断面図（S：1／80）

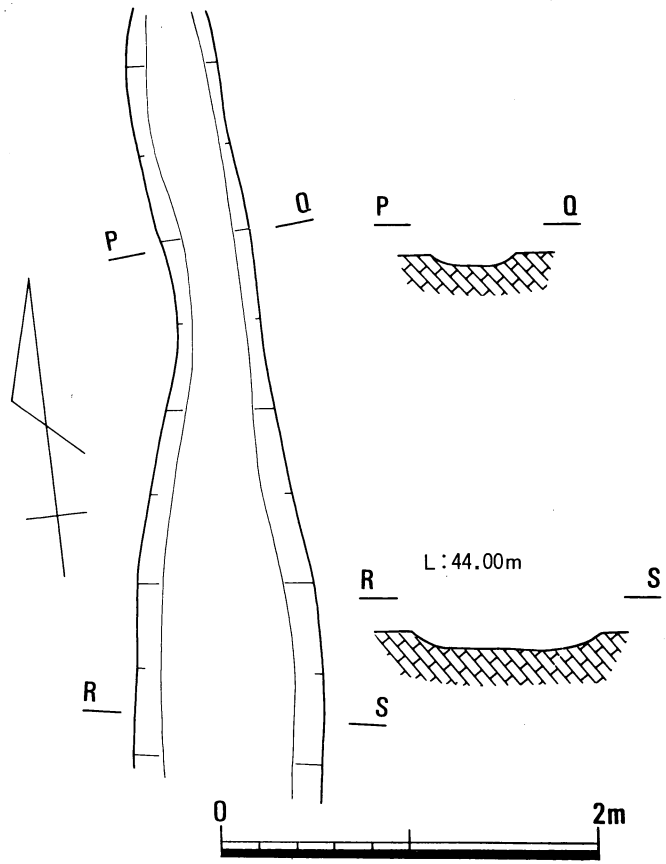
b．遺構

（第85図）（1）は，旧水田および旧耕作に関わると思われる溝である。（2）の上層で検出されたものである。

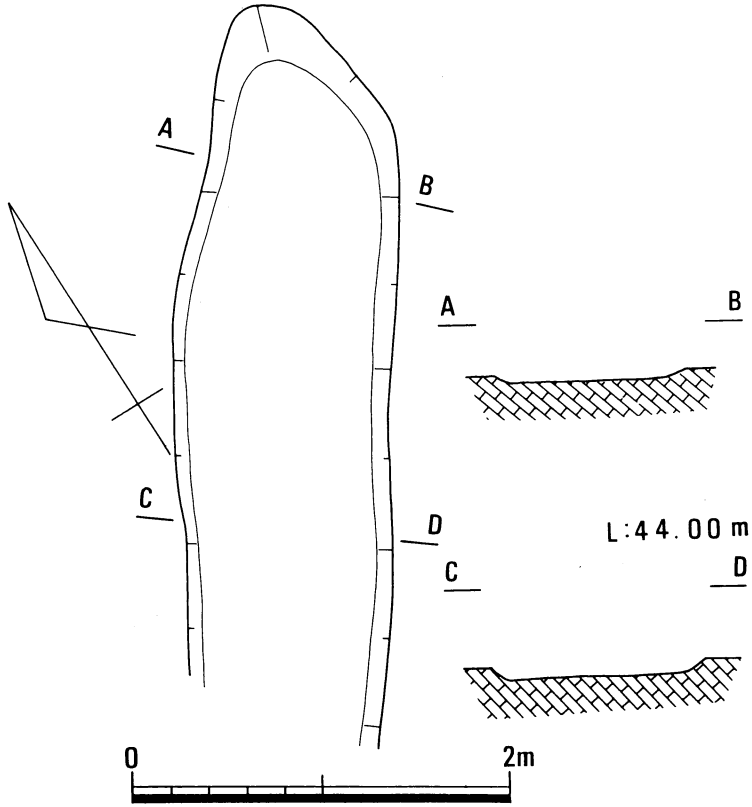
No.101溝

調査区西端に位置し，北東から南西方向へ向かって延びる。幅約110㎝，深さ約5～12㎝を測る浅い溝である。南側は掘削され消失している。埋土中から遺物は出土していない。（第87図）

No.102溝



第88図　F－12、No.102溝（S：1／40）

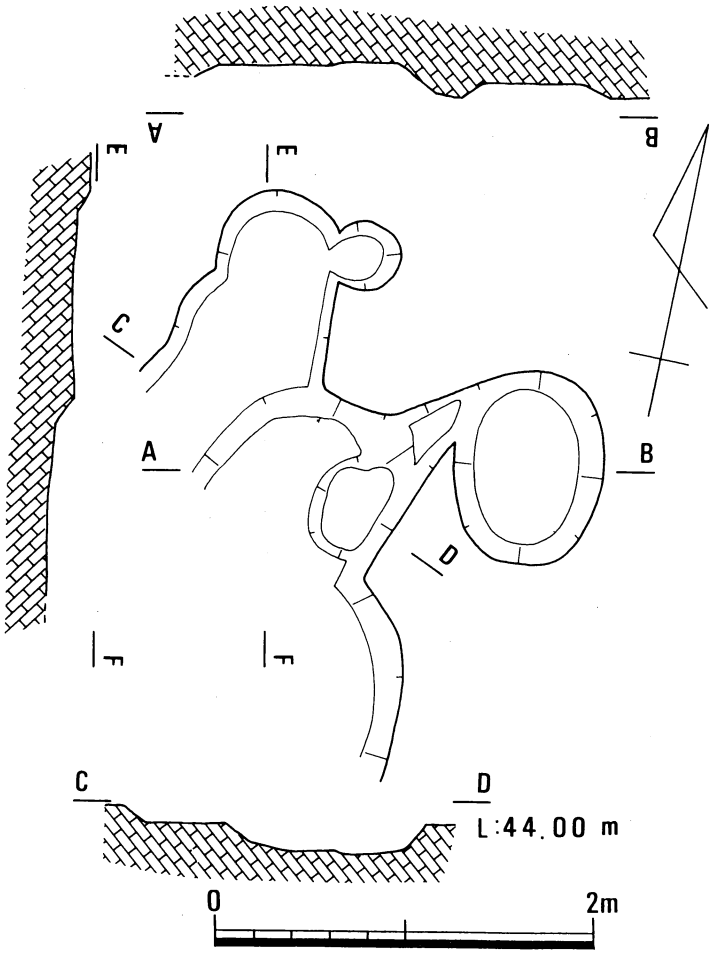


第87図　F－12、No.101溝（S：1／40）

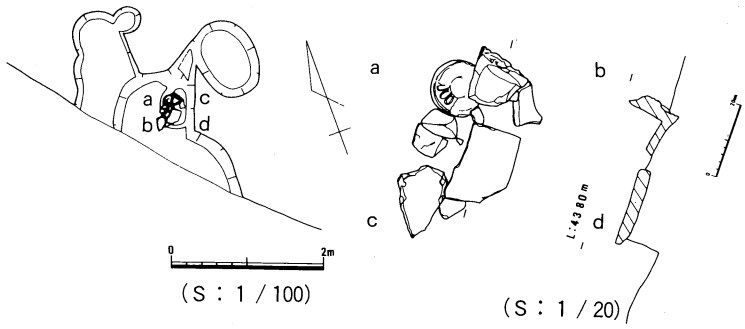
調査区ほぼ中央南寄りに検出された，南北に延び南流する，幅約50～100㎝，深さ約５～14㎝を測る溝である。断面形は浅いU字形を呈し，内部には灰色砂の埋積が認められた。遺物は出土していない。（第88図）

No.103土壙

調査区西端No.101溝の西に位置する。南側は掘削により消失している。残存部分の平面形は図に見る通り不整の形をしている。中ほど１段下がった箇所から，底面から浮いた状態で，軒丸瓦（素弁八弁蓮華文，複弁蓮華文），平瓦（縄目文・格子文叩き）等の瓦を出土した。（第126図）（149）～（154）（第89図）（第90図）（図版18，19）

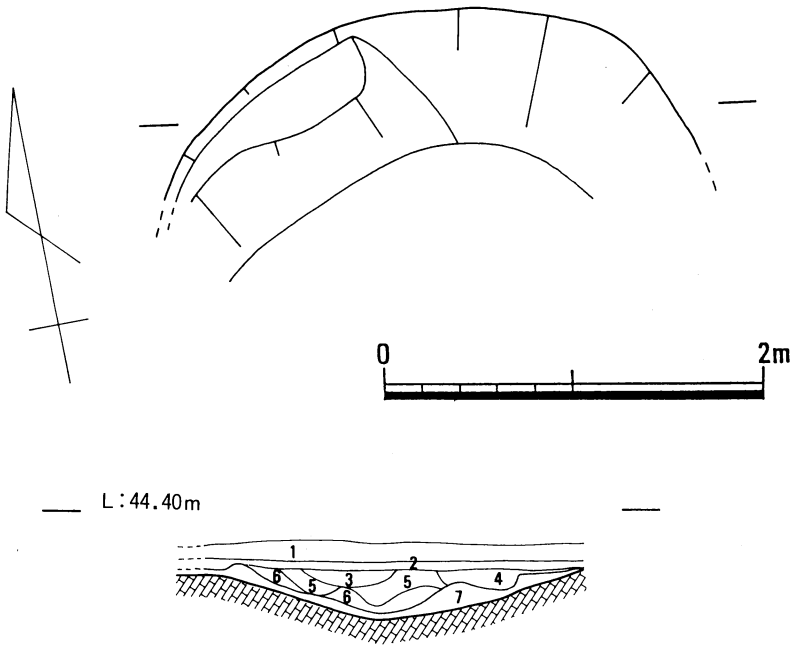


第89図　F－12、No.103土壙



第90図　F－12、No.103土壙遺物出土状況

No.104土壙



1．灰淡赤茶黄褐色粘質土(Mn)
2．灰黒褐色粘質土(Mn多い)
3．灰茶黒褐黄色粘質土(Mn)
4．灰茶黒褐黄色粘質土(Mn多い)
5．暗灰黒褐黄色粘質土
6．灰黄淡赤茶褐色粘質土(Mn少ない)
7．灰黄褐色粘質土

第91図　F－12、No.104土壙

調査区ほぼ中央南端，No.102溝の西に位置する。南側の大半を消失しているものと思われる。残存部分は半円形を呈し，全体形が円形であるとすれば，推定径約3ｍ強を測る。壙壁は

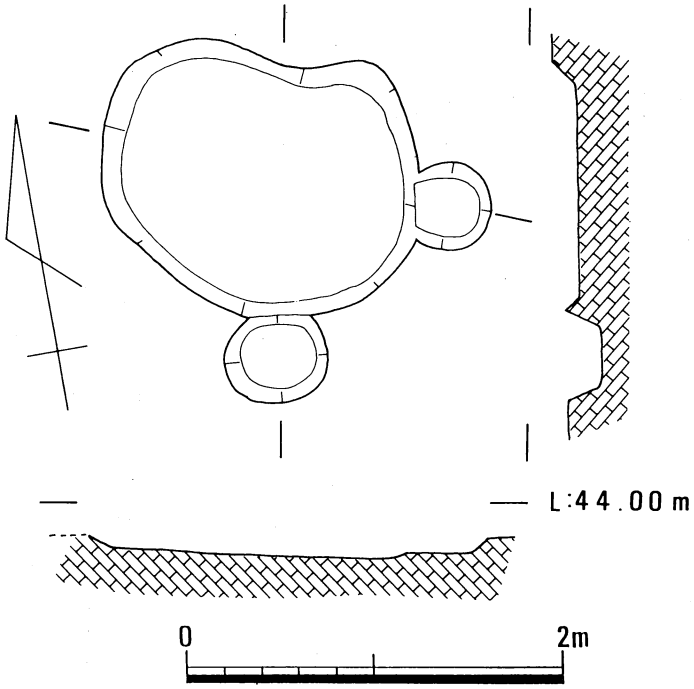
緩やかで凹凸があり，底面の断面形は凸レンズ状を呈している。底面に接して丸瓦を出土した他，埋土中から須恵器（高杯脚部片），丸瓦片等を出土している。（第91図）

No.105土壙

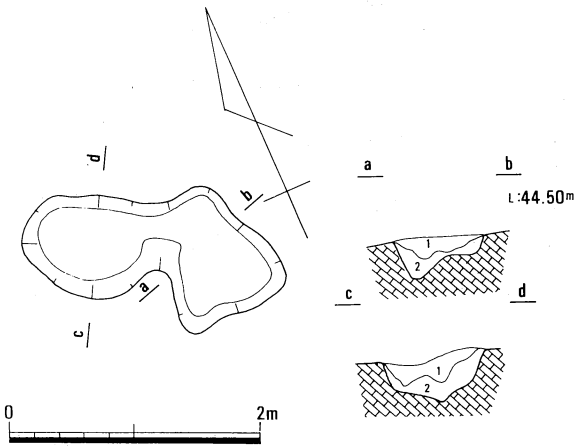
調査区中央部東寄りに位置し，平面形不整の卵形状を呈し，長径約180㎝×短径約130㎝，深さ約6～15㎝を測る浅いものである。遺物は出土していない。（第92図）

No.106土壙

調査区東部やや北寄りに位置し，平面形は東南部の突出した不整の形状を呈している。縦横約130×260㎝，上部は削平を受けており，検出面からの深さ約15～40㎝を測る。壙



第92図　F－12、No.105土壙（S：1／40）

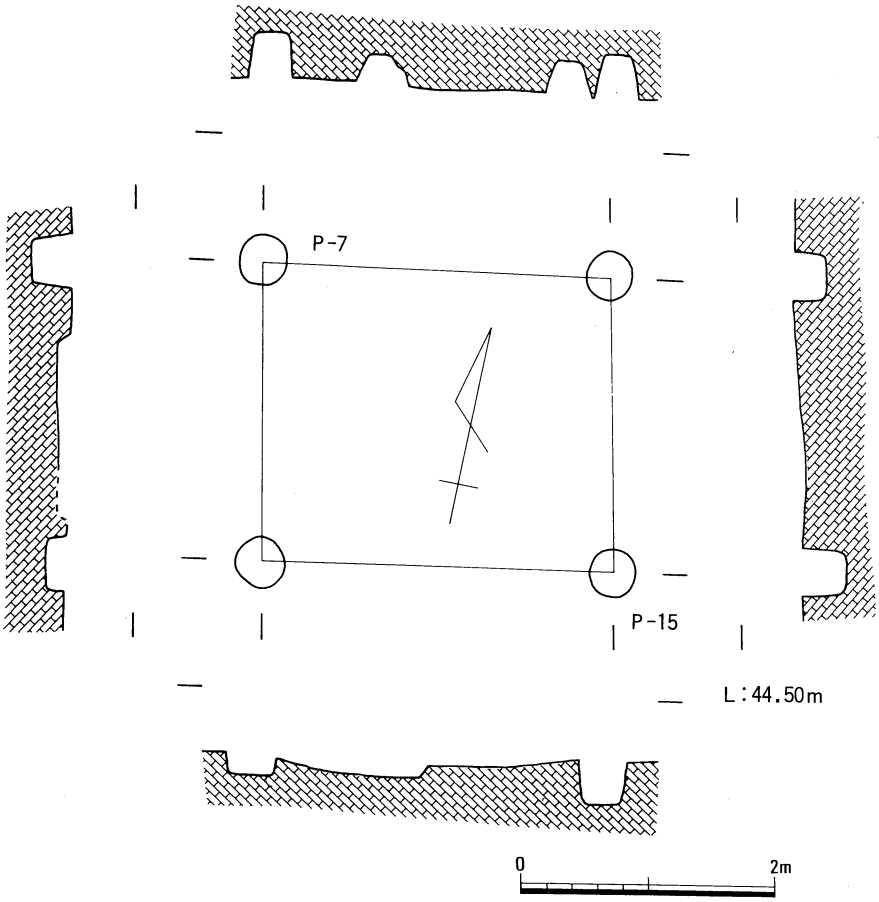


1．茶褐灰黄色粘質土
（炭を多く含む）
2．灰茶褐色粘質土

第93図　F－12、No.106土壙（S：1／60）

壁は急峻で，底面は平坦ではなく，起伏が激しい。埋積土は，１．暗灰茶褐色粘質土，２．灰茶黄褐色粘質土，の２層に分割出来，１．層は炭を多く含み，丸瓦，土師器片等の遺物を出土している。（第93図）

No.107建物



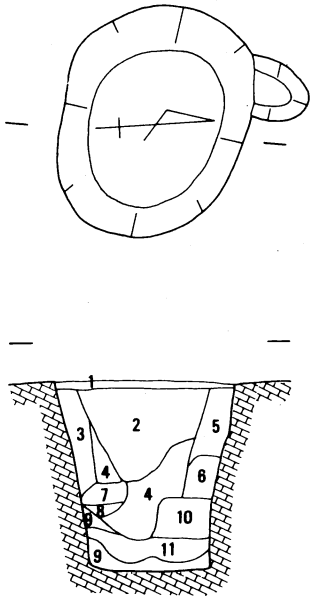
第94図Ｆ―12、No.107建物（Ｓ：１／60）

調査区東部北寄りに位置する。１×１間の掘立て柱建物と思われ，方位は東西軸が，N80°Eである。柱穴間は，東西方向で約280㎝，南北方向で約235㎝を測り，東西間が若干長い。柱穴の径約35～40㎝を測る。Ｐ－７の埋土中より，サヌカイト片，Ｐ－15より，細片化した土器片を出土している。（第94図）

No.108ピット

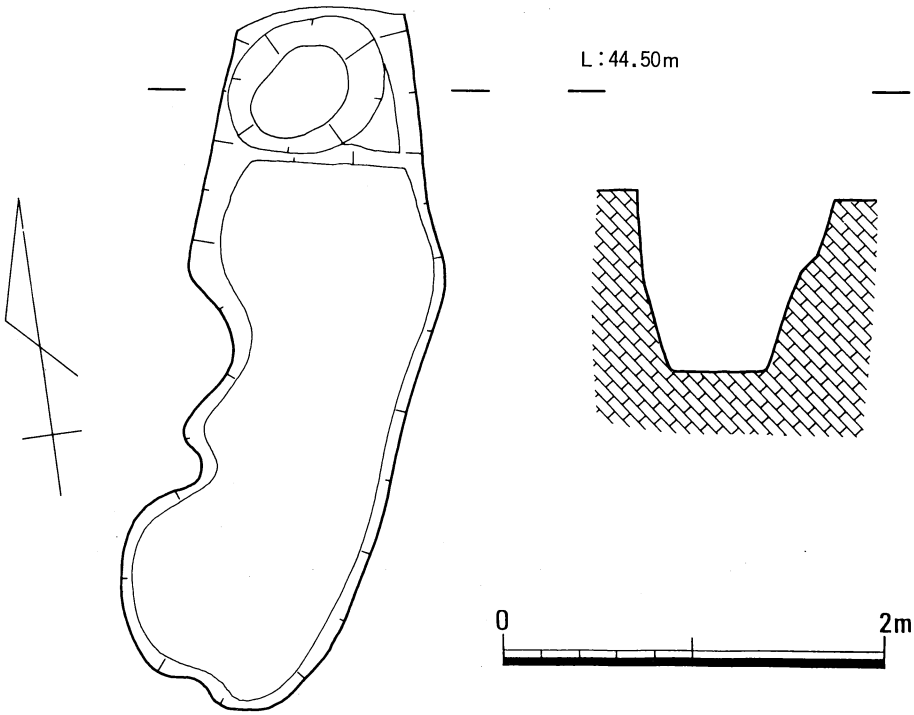
調査区中央西北寄りに位置し，平面形は卵形状を呈し，長径約120㎝，短径約100㎝，検出面からの深さ約100㎝，卵形状の底面約70×90㎝を測る。遺物は伴っていない。（第95図）

No.109ピット



1．赤茶褐色粘質土
2．灰黒褐色粘質土(Mn)
3．灰茶褐淡茶黄色粘質土(Fe)
4．白灰淡茶色粘質土
5．灰黄褐色粘質土(Mn)
6．灰黄色粘質土
7．白灰黄色粘質土
8．白灰黄色粘質土(白色多い)
9．白灰黄色粘質土(黄色多い)
10．白灰黄褐色粘質土(Mn)
11．白灰黄色粘質土(黄色多い)

第95図　F－12、No.108ピット（S：1／40）



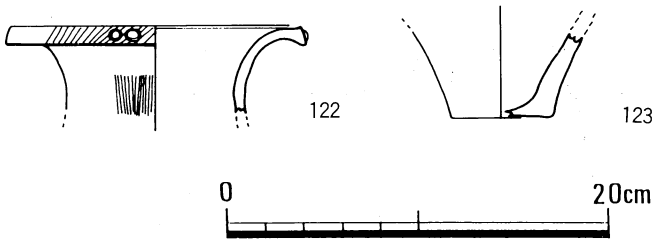
第96図　F－12、No.109ピット（S：1／40）

調査区東部北端に位置し，浅い溝状の掘り込みの底部に検出された。長径約90㎝，短径約70㎝，検出面からの深さ約100㎝，卵形状の底面約40×60㎝を測り，No.108ピットとほぼ同規模である。（第96図）

No.103，104，105，106の土壙については，遺物をもって見るなら，奈良時代を上限としてそれをさかのぼることはないと思われる。調査区北東部に検出されたピット群は削平を受けており，違う時代のものが同時に検出されている可能性もあるものと思われる。サヌカイト片，須恵器，土師器の小片等を埋積土中から出土している。No.107建物，No.108，109ピットについても旧水田層下に検出されたもので削平を受けているものと思われる。時代については，中世という枠でとらえて置きたい。

c．遺物

P－4から石鏃（第133図・186），P－5から（第97図・122），P－17（123）を出土しているほか，造成土中から小型の磨製石斧（第132図・175），サヌカイト片，須恵器，土師器，須恵質の甕，擂鉢，瓦（格子状文，縄目文）等々を出土している。（図版22，23）



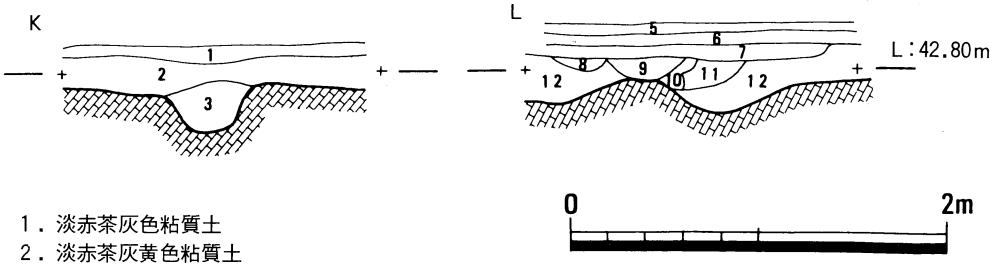
第97図　F－12、出土遺物（1／4）

F－13

a．調査区概要

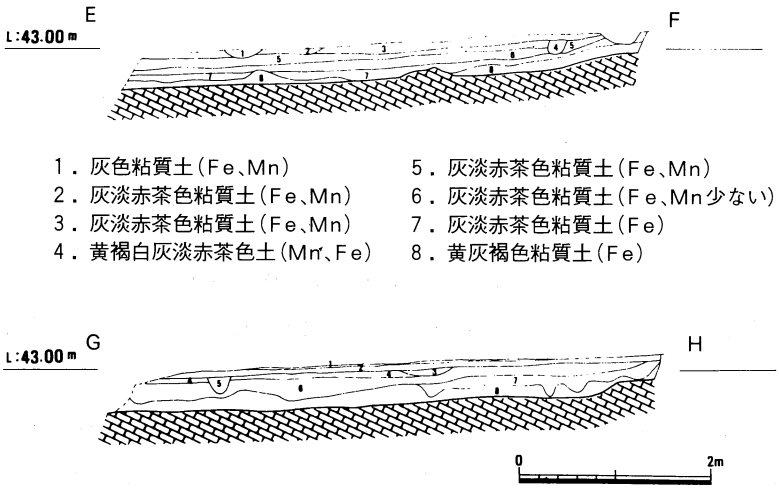
F－12調査区の南下段に位置し，南北約7m，東西約55mの調査区である。旧地形の南への傾斜は緩やかであるが，耕地造成は調査区南側を掘削して行われており，現行で約1mの落差を持つ段状を呈していた。

調査区中央部での基本的な層序は，現行の耕作土・床土の下に，1．灰赤茶褐色粘質土（Fe，Mnを含む），2．灰赤茶色粘質土（Feを含む，Mn少ない），3．灰赤茶色粘質土



1．淡赤茶灰色粘質土
2．淡赤茶灰黄色粘質土
3．暗灰褐色粘質土(Mn)
5．淡赤茶灰色粘質土
6．淡赤茶灰色粘質土(Mn)
7．灰褐淡茶色粘質土(Mn)
8．淡茶褐灰色粘質土(Mn)
9．淡茶褐灰色粘質土(Fe、Mn)
10．灰色(赤茶色混)粘質土
11．灰赤茶色粘質土
12．赤茶灰黄色粘質土

第98図　F－13、南側柱状土層断面図（S：1／40）



1．灰色粘質土(Fe、Mn)
2．灰淡赤茶色粘質土(Fe、Mn)
3．灰淡赤茶色粘質土(Fe、Mn)
4．黄褐白灰淡赤茶色土(Mn、Fe)
5．灰淡赤茶色粘質土(Fe、Mn)
6．灰淡赤茶色粘質土(Fe、Mn少ない)
7．灰淡赤茶色粘質土(Fe)
8．黄灰褐色粘質土(Fe)

1．淡赤茶灰色砂質土
2．灰褐淡赤茶色粘質土(Mn、Fe)
3．暗灰褐色粘質土(Mn、炭)
4．灰褐淡赤茶色粘質土(Mn)
5．暗灰褐色粘質土(Mn)
6．灰淡赤茶褐色粘質土(Mn)
7．灰淡赤茶色粘質土(Mn少ない)
8．黄赤茶灰色粘質土(礫)

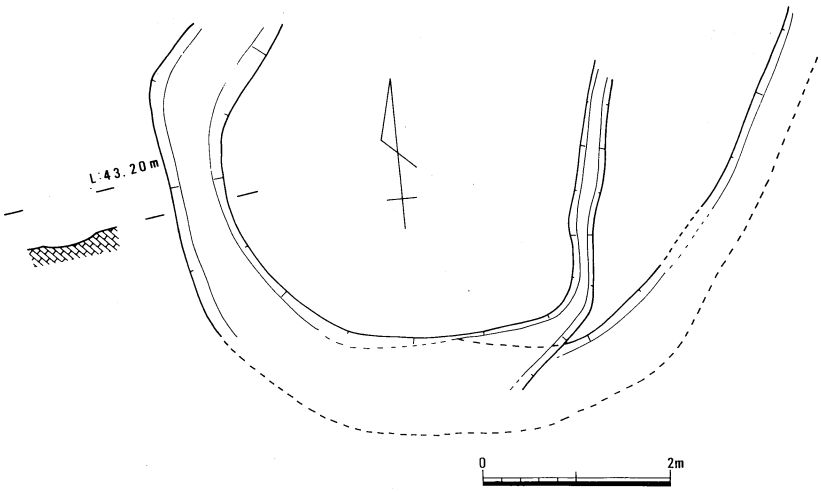
第99図　F－13、土層断面図（S：1／80）

（Feを含む，Mnごく少ない），4．灰赤茶色粘質土，5．黄赤茶灰褐色（Feを含む），6．地山（黄灰褐色粘質土），調査区西部では，現耕作土・床土の下，1．赤茶灰色砂質土（Feを含む），2．灰赤茶褐色粘質土（Feを含む），3．灰淡赤茶色粘質土，4．灰淡赤茶褐色粘質土（Mnを含む）5．黄赤茶灰色粘質土（礫を含む）6．地山となっている。（第

85図）（第98図）（第99図）

b．遺構

No.110溝



第100図　F－13、No.110溝（S：1／80）

調査区東部に位置し，検出した部分は半円形を描く溝状の遺構である。中ほどに，北から南流して接続する溝を伴う。幅約50～100cmを測る。遺物は伴っていない。（第100図）

No.111溝

No.110溝の東に位置し，No.110より上層で検出された溝である。ほぼ南北に延び，南側は下段の水田造成によって掘削され消失している。幅は中央から南で約90cm，北側で約250cm，深さ約5～12cmを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は出土していない。

No.112溝

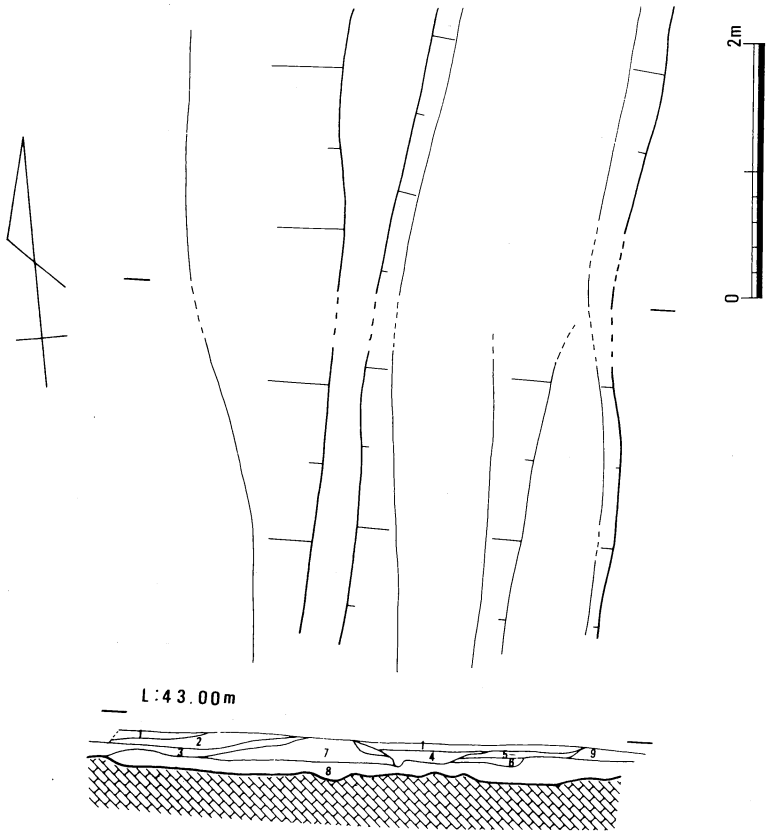
No.111溝の東に位置し，南北に延びる。幅約25～55cm，深さ約7～12cmを測る。断面形はU字形を呈する。遺物は伴っていない。

No.113溝

調査区東部中央寄り，No.110溝の西に位置する。北東から南へ向かって延び，幅約30～90cm，深さ約2～7cmを測る。遺物は伴っていない。

No.114溝

調査区西部に位置し，ほぼ南北に延びる。幅約200cm，深さ約10～20cmを測る。埋積土中か



1．灰褐黄色粘質土(Mn)
2．灰褐黄色粘質土(Mn少ない)
3．暗灰赤茶色粘質土(Fe)
4．灰褐色粘質土(Mn)
5．灰褐赤茶色粘質土(Mn)
6．灰赤茶褐色粘質土(Mn)
7．黄灰色粘質土
8．黄灰赤茶褐色粘質土(Fe、Mn)
9．灰茶褐黄色粘質土(Mn)

第101図　F－13、No.114、115溝（S：1／60）

ら，平瓦（縄目文・格子文叩き），丸瓦（内面に布目痕あり），土師器の小片等を出土している。（第101図）

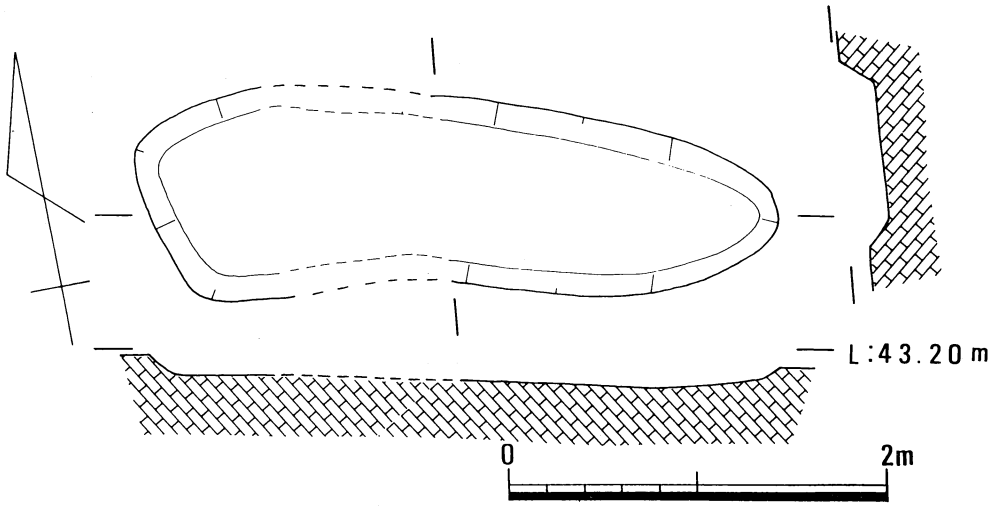
No.115溝

No.114溝の西，調査区西端に位置する。西側を現行の用水溝によって切られているため溝の西側部分は消失している。埋積土中からは，平瓦（縄目文・格子文叩き），丸瓦（内面に布目痕あり），須恵器（第107図・127），土師器等を出土している。（第101図）

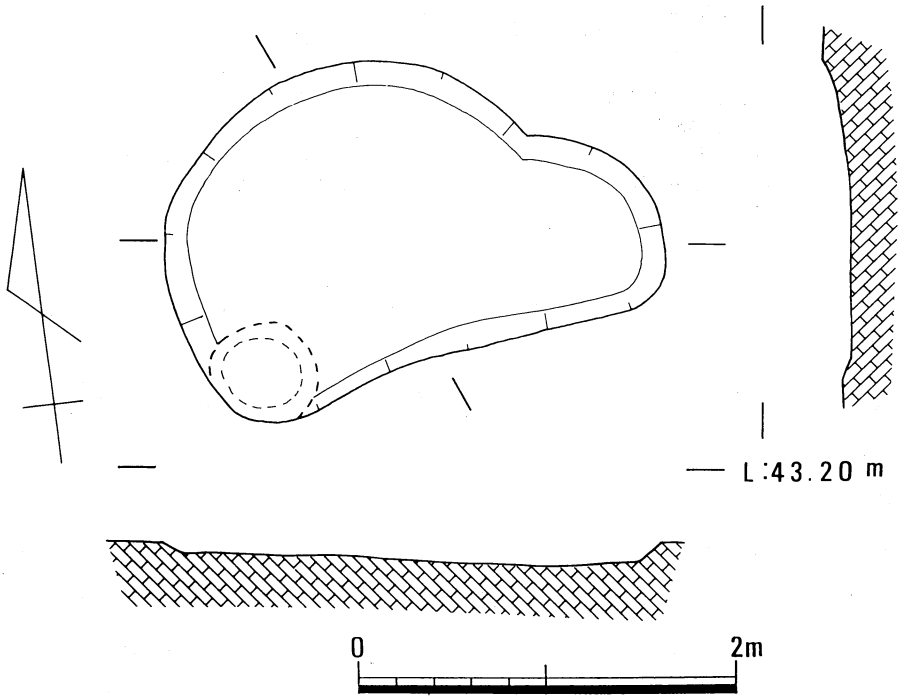
No.116土壙

調査区中央東寄り北端に位置し，東西に細長い卵形状を呈している。長さ約340㎝，幅約

100cm，深さ約10～20cmを測る。壙壁の傾斜は急で，底面はほぼ平坦である。埋積土は，1．灰褐色粘質土（Mnを含む），2．炭，3．黄灰褐色粘質土，の3層に分けられる。軒丸瓦（第124図・130），平瓦（縄目文叩き），丸瓦，等を出土している。（第102図）（図版18）



第102図　F－13、No.116土壙（S：1／40）



第103図　F－13、No.117土壙（S：1／40）

No.117土壙

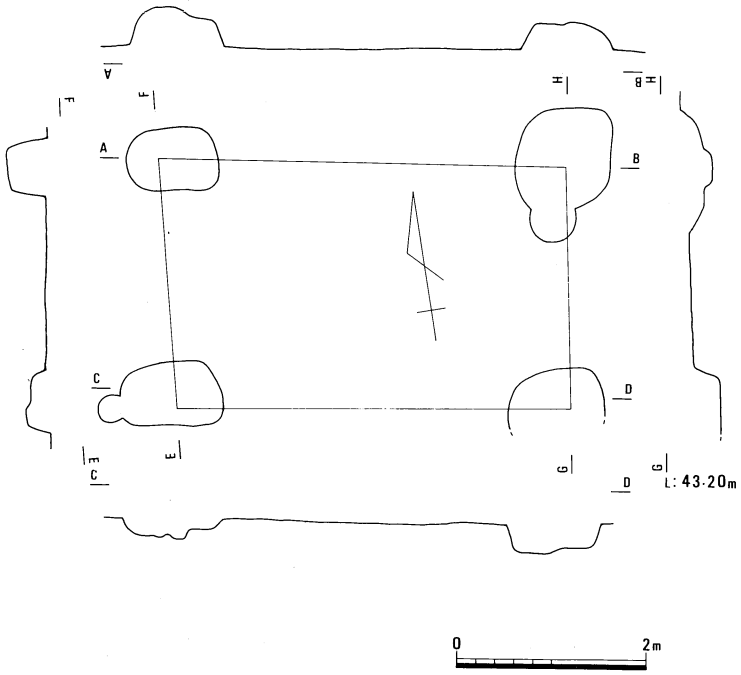
調査区東部南寄りに位置し，No.118建物の柱穴によって切られている。縦横およそ80×130㎝，検出面からの最大深さ約15㎝を測る，図に示す通り不整の平面形を呈する土壙である。埋積土中から須恵器杯（第107図・124）等を出土している。（第103図）

No.118建物

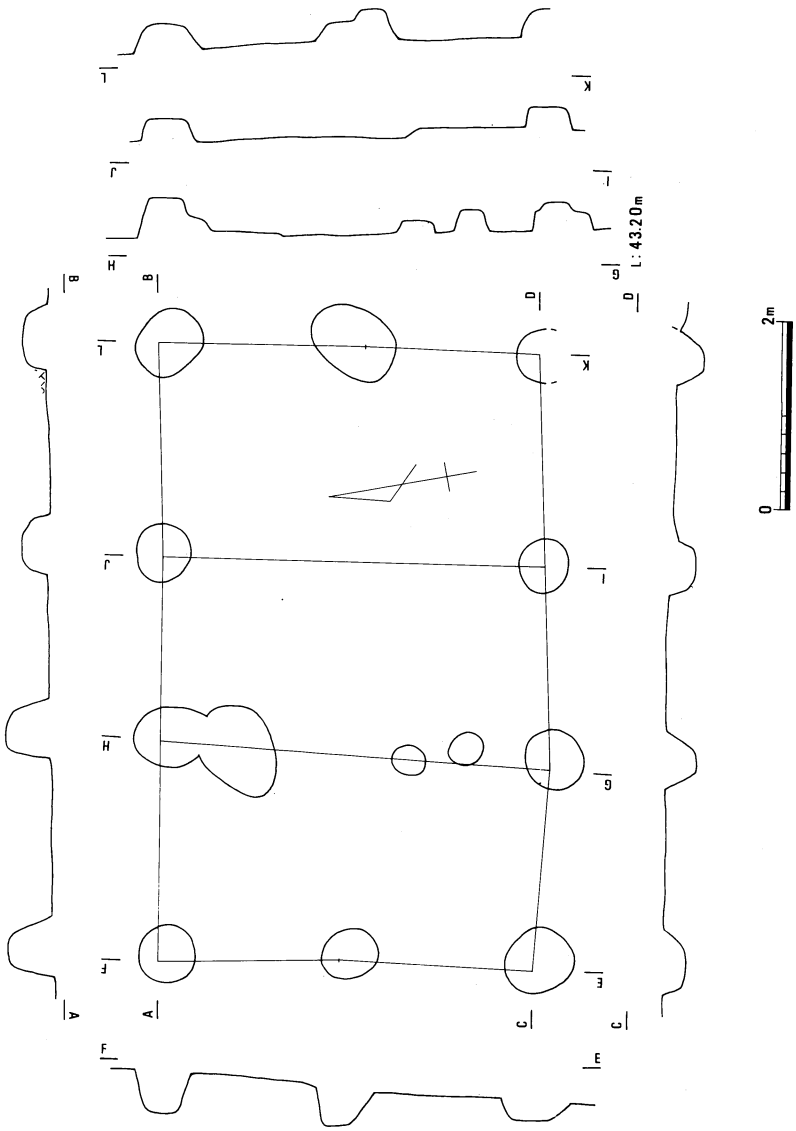
調査区東部に位置し，棟方向N80° W，梁行２間，桁行３間の掘立て柱建物である。梁行約400～410㎝，桁行は北側で約680㎝，南側で約670㎝を測る。桁行の柱穴間は東から，北側で，230㎝，195㎝，255㎝，南側で，225㎝，220㎝，225㎝を測る。柱穴の径は，およそ50～70㎝を測り，柱痕は径25㎝を測るものが認められた。柱穴の埋土から土器の小片を出土している。（第104図）

No.119建物

調査区西部に位置し，棟方向N80° W，梁行約260～270㎝，桁行約420～430㎝を測る，１×１間の掘立て柱建物である。柱穴掘方は，長径100～140㎝，短径70～100㎝，深さ約25～45㎝を測る。Ｐ２－15から須恵器（長頸壷胴部？），土師器，Ｐ２－13から須恵器，土師器の小片を出土している。（第105図）



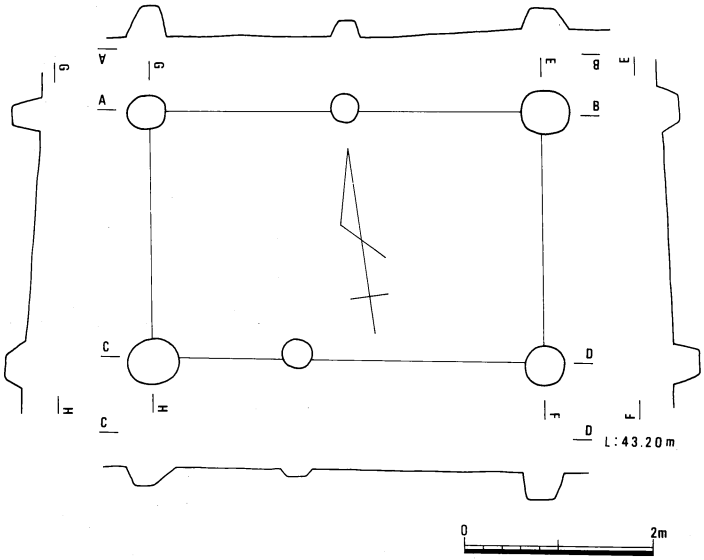
第105図　Ｆ－13．No.119建物（Ｓ：１／80）



第104図　F－13、No.118建物（S：1／80）

No.120建物

調査区中央部に位置し，棟方向N80° W，梁行1間，桁行2間の掘立て柱建物と思われ，梁行約260㎝，桁行約430㎝を測る。桁行柱穴間は北側で東から，210㎝，210㎝，南側，260㎝，150㎝を測る。（第106図）



第106図　F－13、No.120建物（S：1／80）

No.118，119，120の建物の規模はいずれも限られた調査区内で検出された規模であり，南側はすでに削平により消失しているが，南北に延びる可能性もあるものと思われる。時期的には幅をもって，奈良～平安時代を上限と考えたい。

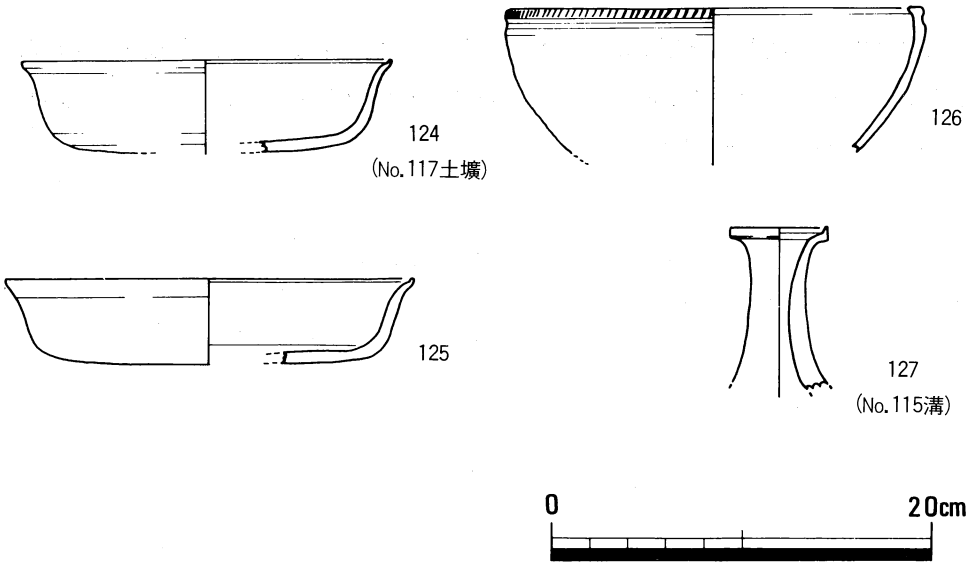
c．遺物

造成土からの出土遺物は，軒丸瓦（第125図・148），軒平瓦（第128図・165）のほか，サヌカイトの小片，須恵器，土師器，平瓦，丸瓦等々である。（図版20）

F－14

a．調査区概要

山条調査区の西南，F－12調査区の西に位置する，南北約10m，東西約30mを測るおよそ長方形を呈する調査区である。旧地形は南に下る緩斜面をなし，現行の水田は，その斜面上に造成された段状を呈する2枚の旧水田を1枚に造成したものである。



第107図　F－13出土遺物

この調査区中央南側における層序は，1．現耕作土，2．現床土（赤茶灰色・Feを含む），3．灰赤茶色粘質土（Feを含む），4．暗灰色粘質土，5．赤茶灰色粘質土（Feを含む），6．灰色土（礫を多く含む），7．灰黄茶黒褐色粘質土，8．地山である。4．層を旧水田面と考える。これより上層の造成土中から，近世・中世の遺物（白磁，擂鉢片等），須恵器，土師器等小片及び，小片化したものを含んで，平瓦（縄目文・格子目文），丸瓦（行基式他）等を出土している。

b．遺構

旧水田層の下に，旧耕作に伴うものと思われる複数の溝を検出している。溝は東西方向に延びるものと南北方向のものとが認められた。（第85図）

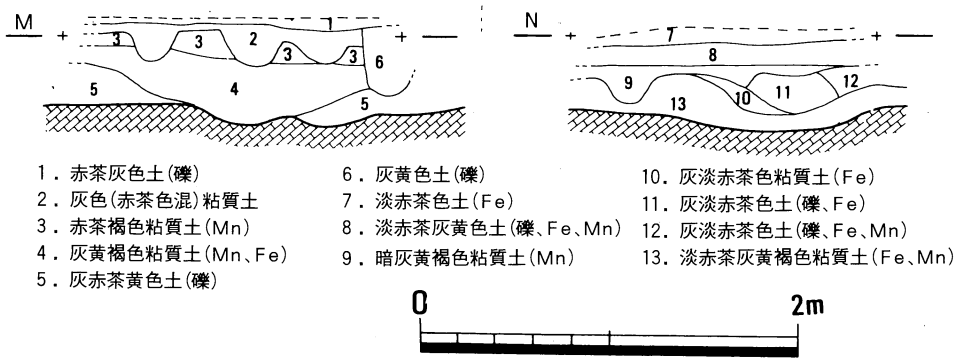
No.121溝

昭和61年にこの調査区南に隣接する地区で確認されたほぼ南北に延びる石組みの暗渠に伴って検出された溝で，2次的に掘り上げたものである。底面は南に低く緩く傾斜しており，北側は削平され消失している。

No.122溝

調査区西に位置し，北西から南へわずかに方向を変えて南流する。溝の北側，南側ともに削平され消失している。幅約130～200㎝，最大深さ約10㎝を測る。遺物は伴っていない。

No.123溝



第108図　F－14、南側柱状土層断面図（S：1／40）

調査区中央東寄りに位置し，北東から南西へ流れる。幅約50～100㎝，深さ約2～5㎝を測る。遺物は出土していない。

No.124溝

調査区東端部に位置し，ほぼ南北に延びる。南側は旧水田の削平を受け，消失している。幅約60～80㎝，深さ約6～10㎝を測る。

この溝の南側に約250㎝離れて検出された幅約30㎝，長さ約150㎝を測る溝は，No.124と同方向同一軸上にあり，No.124の削平された底部である可能性が高いと思われる。

No.125溝

調査区西部に地山面で検出された不整形のもので，最大幅約100㎝，最大深さおよそ20㎝を測る。逆くの字状を呈し，屈曲部に段を持つ。流方向は北から南西である。遺物は出土していない。（第109図）

No.126土壙

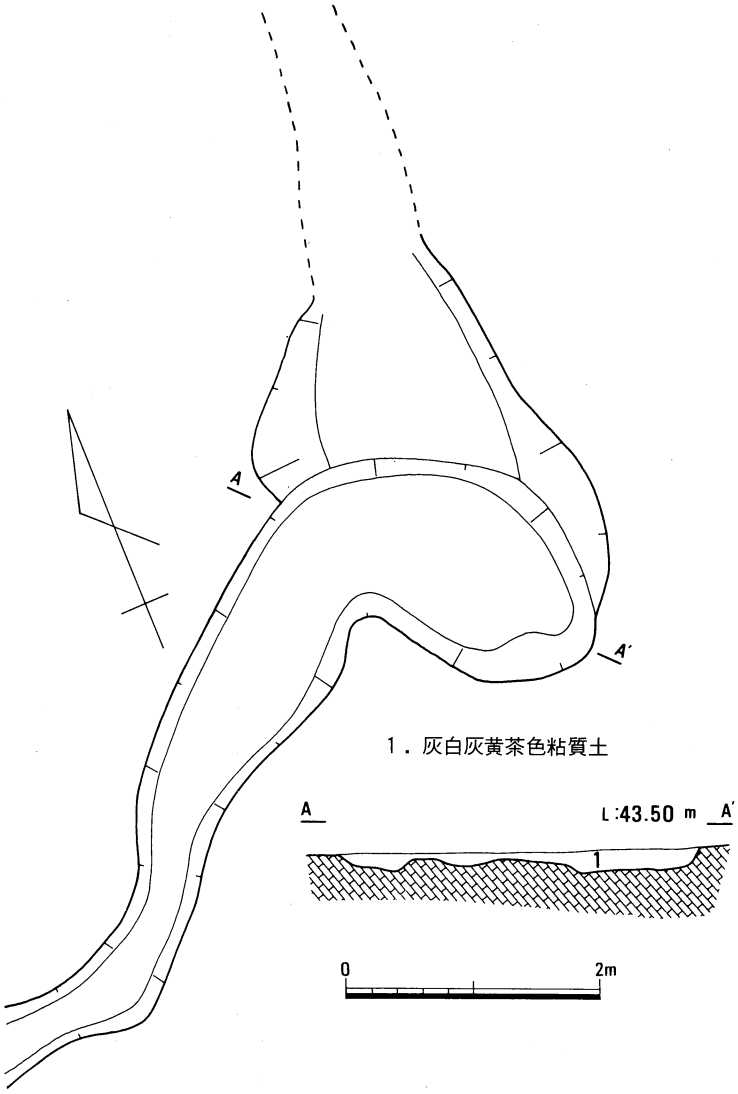
調査区東部南寄りに地山面で検出され，平面形はほぼ隅丸の長方形を呈する。縦横約200×330㎝，深さ約5～20㎝を測る。壙壁の傾きは緩やかで，底面はなだらかに起伏している。埋積土は3層に分けられる。遺物は出土していない。（第110図）

No.127土壙（？）

調査区東部に位置する，ふたつ以上の重複する土壙である。壙壁は急で，底面には凹凸が見られる。遺物は出土していない。（111図）

No.128土壙

調査区北西端部に部分的に検出された遺構で削平を受けている。検出部は隅丸の方形を呈し，長さ約340㎝，検出面からの深さ約6～13㎝を測る。埋積土は2層に分かれ，遺物は出土していない。（第112図）



第109図　F－14、No.125溝（S：1／60）

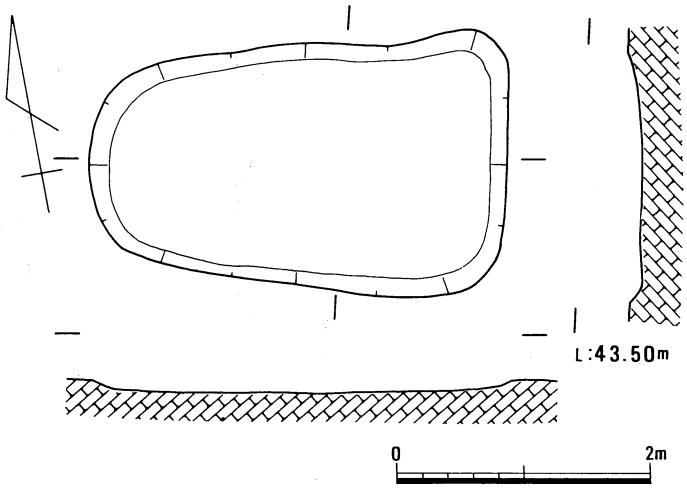
No.129土壙

調査区西部北寄りに位置し，削平を受けているものと思われる。平面形は卵形状を呈し，長径約140㎝，短径約125㎝，検出面からの深さ約10㎝を測る。遺物は出土していない。（第113図）

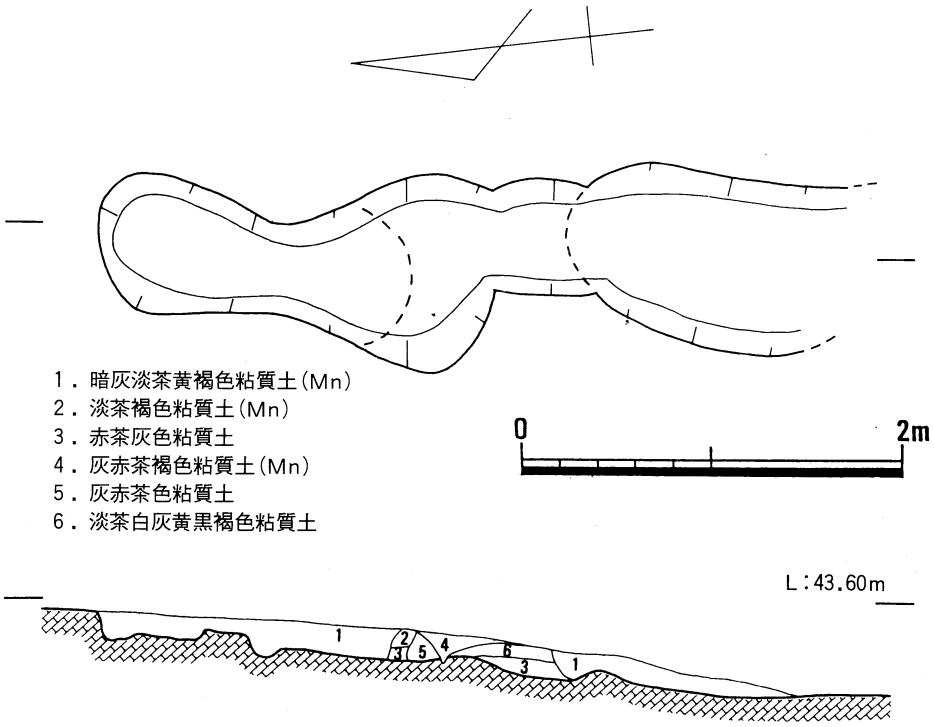
No.130土壙

調査区中央西寄りに検出された縦長の卵形状を呈する土壙である。長径約205㎝，短径約70

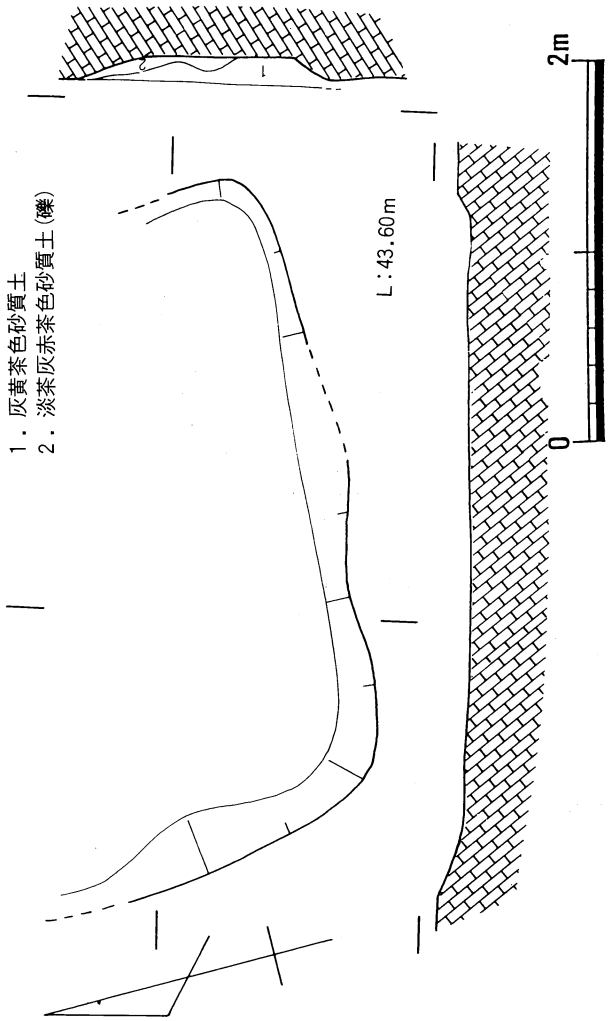
cm，土壙南側で最大深さ約15cmを測る。遺物は出土していない。（第114図）



第110図　F－14、No.126土壙



第111図　F－14、No.127土壙(?)（S：1／40）



第112図　F－14、No.128土壙

また，調査区中央南端部に検出されたピットP3－1，P3－2の埋積土中からは，土師器，瓦等の小片を出土している。

c．遺物

造成土からの出土遺物は，石礫（第133図・185・189），軒丸瓦（第125図・142），（第127図・157），のほか須恵器，土師器，平瓦，丸瓦等々，いずれも小片化したものを出土している。（図版22，19，20）

F－16

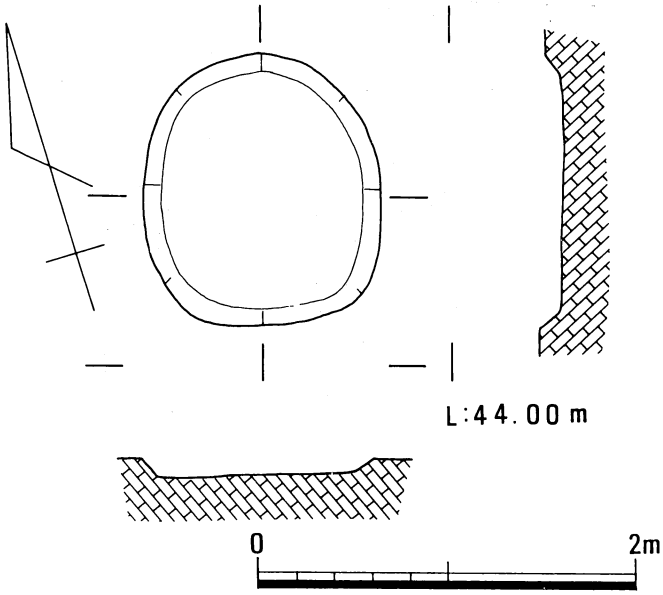
a．調査区概要

F－14調査区東部の南，F－13の西部に接して続く調査区である。用排水路ID－7設置部分を含み，現行で2段の水田に渡る南北に細長い調査区である。旧地形は南に下る緩い勾配の斜面をなしている。調査区南端部は約150㎝の落差の段を持ってF－15に接する。調査区東部は，現行の用水路及び下段の水田によって切られている。

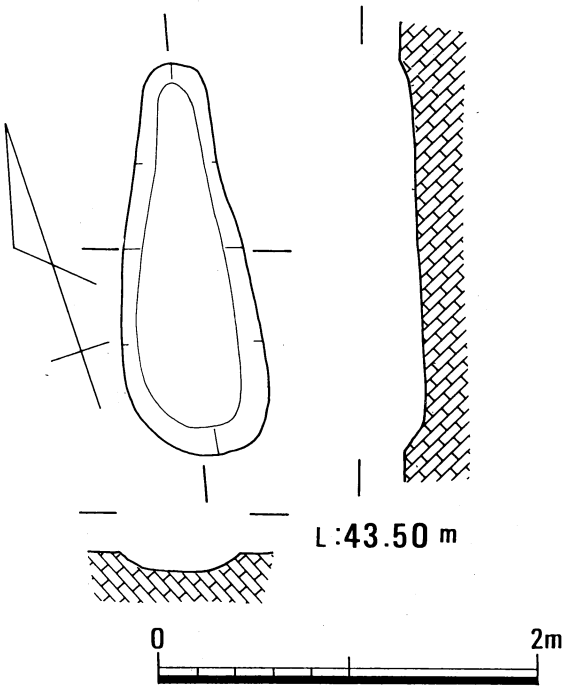
b．遺構

No.131土壙

調査区中央で検出された平面形隅丸の正方形を呈する土壙である。平面形およそ100×100



第113図　F－14、No.129土壙



第114図　F－14、No.130土壙

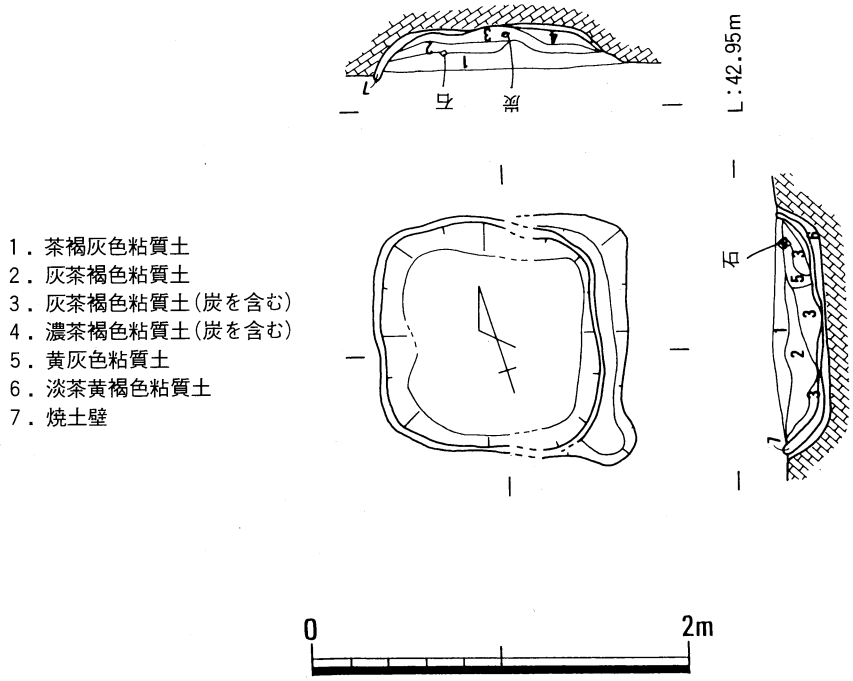
cm，中央部での深さ約25cmを測る。壙壁の傾斜はやや急で，丸みを持って屈曲し底部に移行する。壙壁，底面共に約3～5cmの厚さの焼土壁で形成されている。埋積土は大まかに3層に分けられ，底面直上に炭の埋積が認められた。埋積土中からの出土遺物は，瓦器の小片，平瓦（縄目文叩き），丸瓦（行基葺式？）等が認められた。地炉であると考える。（第115図）

No.132溝

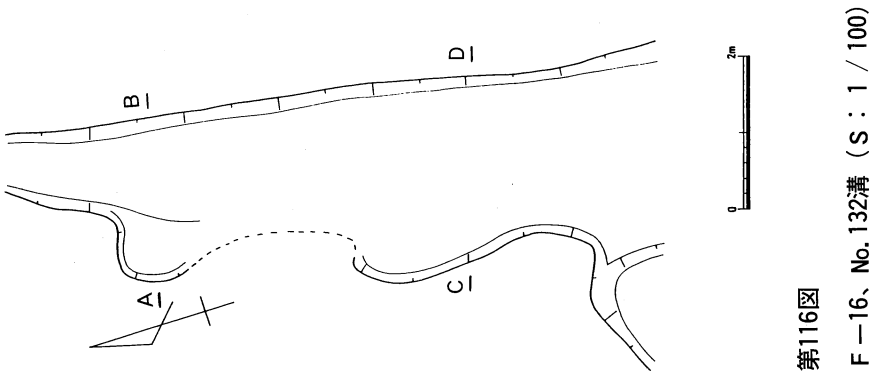
調査区中央に位置し，ほぼ南北に延び南流する。No.131土壙により切られている。幅約70～250cm，最大深さ約20cmを測る。断面形はU字形を呈する。埋積土中からの出土遺物は，軒平瓦（唐草文），平瓦（縄目文・格子文叩き），丸瓦，小片化した瓦片等々である。（第116，117図）

No.133溝（？）

No.132溝の東側に位置する。遺構東部は現行の用水及び東南下段の水田により掘削され，消失している。あるいは，F－13のNo.115溝の延長である可能性もあると思われる。平瓦（縄目文・格子文叩き），丸瓦等の小片を出土している。



第115図　　F－16、No.131土壙

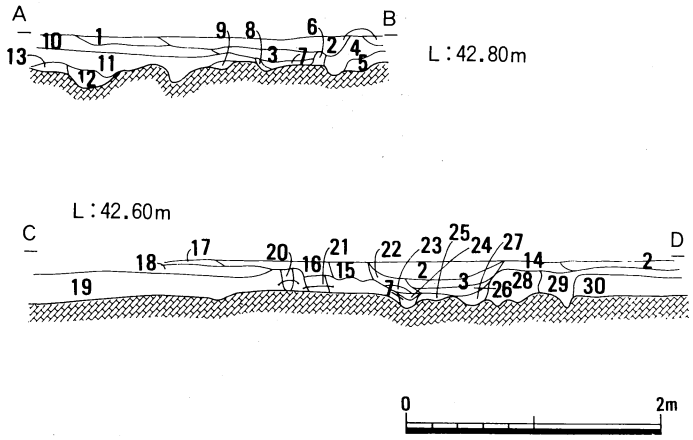


第116図　F－16、No.132溝（S：1／100）

No.134・135ピット

調査区南部に位置する。南北に並んで検出されたほぼ同規模のもので，No.134が約100×100㎝，深さ約70㎝，No.135が約120×90㎝，深さ約80㎝を測る。両ピットの埋積土中から摩滅し，小片化した瓦片（格子目文叩きの残るもの有）を出土している他，No.135からは，土師器の小片を出土している。（第118図）

No.136溝



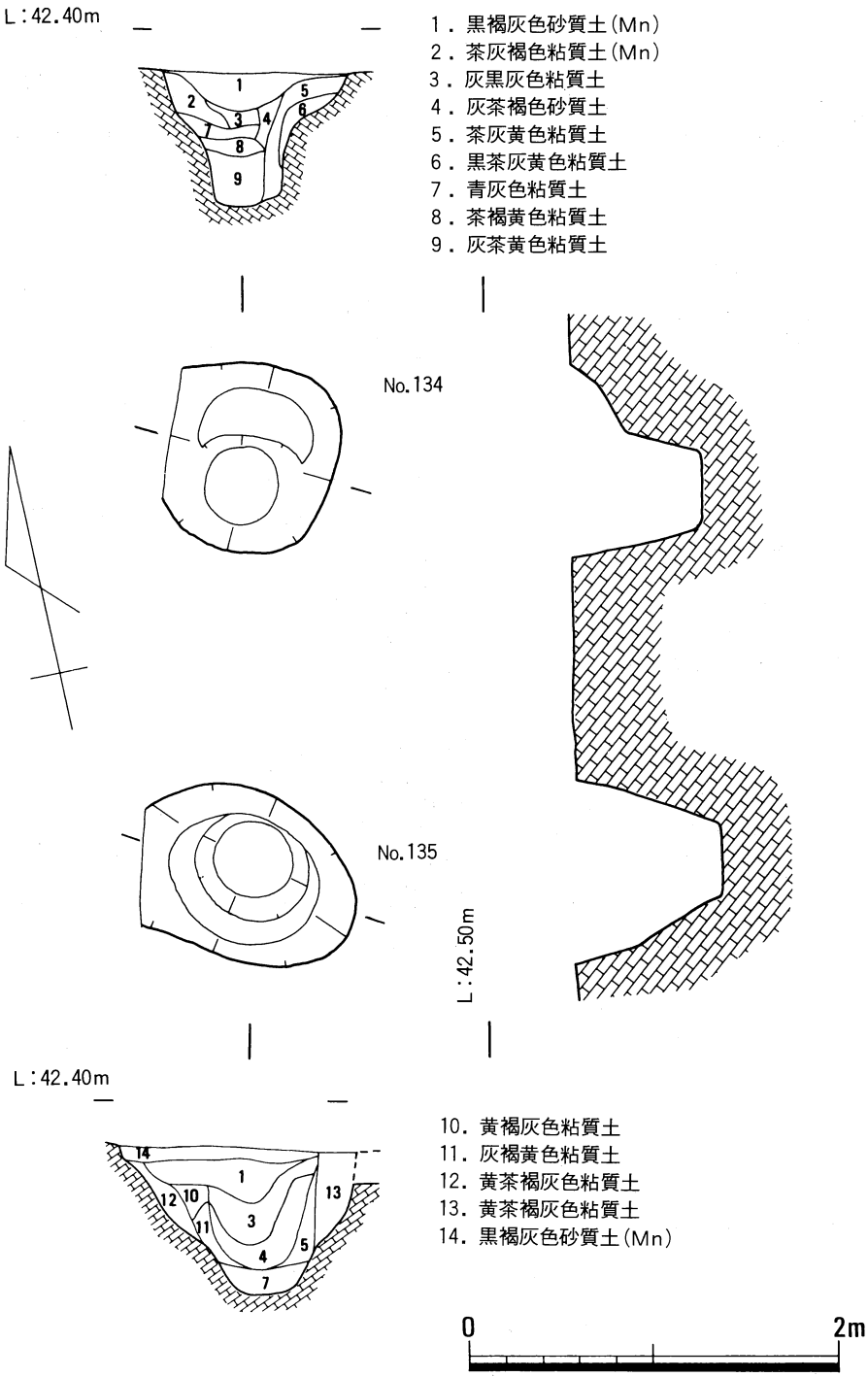
1．灰黒褐色粘質土
2．灰黒褐色粘質土
3．黒褐灰色粘質土
4．灰黄茶色粘質土(Mn)
5．淡赤茶灰色粘質土(Fe)
6．白灰黄色粘質土
7．灰黄色粘質土
8．青灰黄色粘質土
9．淡茶色粘質土
10．淡茶灰色粘質土
11．淡茶灰色粘質土(Mn少ない)
12．暗灰淡赤茶色粘質土(Fe)
13．灰淡茶色粘質土
14．黒茶褐灰色粘質土
15．黒褐灰色粘質土
16．茶黒褐灰色砂質土
17．灰淡茶褐色粘質土
18．淡茶褐灰色粘質土
19．淡茶褐灰黄色粘質土
20．灰淡茶褐色粘質土
21．灰淡茶褐色粘質土
22．黒褐灰色粘質土
23．黒褐色粘質土(炭、焼土を含む)
24．灰茶褐色粘質土(炭を含む)
25．茶灰黄色粘質土
26．灰黒褐色粘質土
27．淡茶灰黄色粘質土
28．淡茶褐灰色粘質土
29．灰淡茶褐色粘質土
30．淡茶褐灰黄色粘質土

第117図　F－16、No.132溝土層断面図（S：1／60）

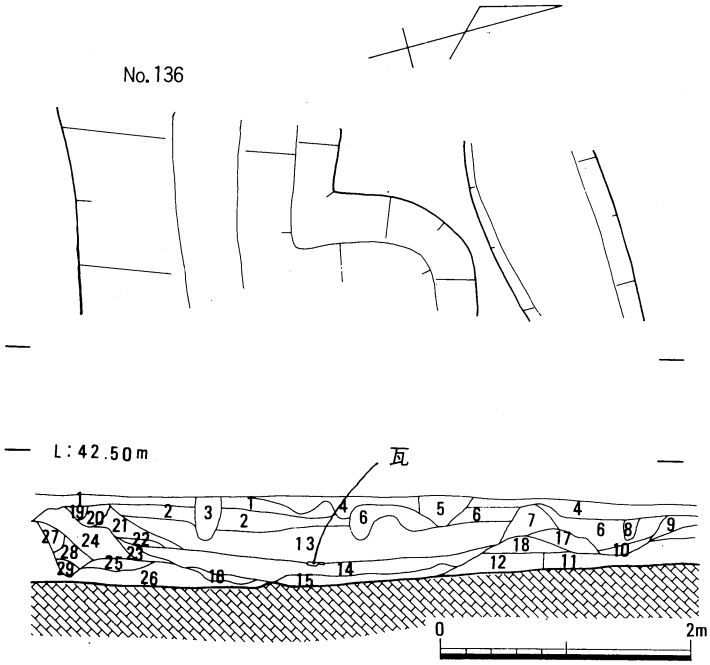
調査区南端部に位置し，東西に延びる。検出された部分は幅約230～300㎝，深さ約40㎝を測り，断面形は鈍いU字形を呈している。遺構埋積土中から，須恵器（杯高台付底部），土師器小片，淡白灰色の椀口縁（？）と思われる細片，丸瓦（玉縁付），平瓦（縄目文・格子状文叩き）等の遺物を出土している。また，底部から軒丸瓦（第124図・128），平瓦を出土している。（第119図）（図版18）

各遺構は旧水田層下に検出され，それぞれの時代については，No.131が最も新しく，No.132溝を切ってつくられている。No.132，133溝および，No.134，135ピット，No.136溝はほぼ同時代のものと思われる。No.131は室町時代以降，No.134，135ピットは奈良～平安時代を上限とするものと考える。No.136溝については，上層の埋積土から中世のものと思われる遺物（椀口縁？の細片）の出土もあり，定かではない。

なお，No.115溝（F－13）とNo.133溝は真ん中を水路によって切られているが，同一の溝である可能性が考えられる。また，No.132溝が南側へ未調査地区を直進しているとすれば，



第118図　F－16、No.134、135ピット（S：1／40）

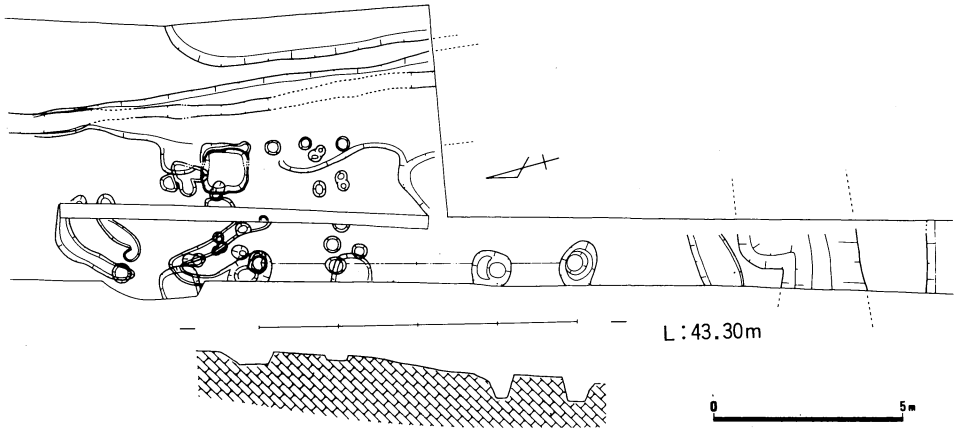


1．灰茶褐色砂質土(Mn)
2．茶褐色砂質土
3．灰茶褐色砂質土
4．灰黒褐色砂質土(Mn多い)
5．茶褐灰色砂質土
6．茶褐灰色砂質土
7．茶褐灰色砂質土
8．茶褐灰色砂質土
9．黒褐灰色砂質土
10．灰淡茶色粘質土
11．淡茶灰色粘質土
12．黄褐色粘質土
13．茶褐灰色砂質土
14．灰茶黄色粘質土
15．灰茶色粘質土
16．灰茶褐黄色粘質土
19．灰茶褐色砂質土
20．茶褐灰色砂質土(Mn少し)
21．茶褐灰色砂質土
22．茶褐灰黄色砂質土
23．灰茶褐黄色粘質土
24．灰茶褐色粘質土
25．黄茶灰色粘質土
26．黄茶灰色粘質土
27．黒褐色粘質土
28．灰褐黄色粘質土
29．灰褐黄色粘質土

第119図　F－16、No.136溝（S：1／60）

No.136溝とほぼ直交する形で交わる可能性があると思われる。No.133，115，114溝もほぼNo.132に並行しており，同じことが言える。

また，No.134，135ピットは大型の柱穴であると思われ，（第120図）に示すように，約210cmの間隔で4本のピットが，ひとつとんで4間並ぶ。北側のものは削平を受けているものと思われ，規模は一定していない。この4本のピットがつながるものであるのか，また，何等かの遺構として西側に拡張されるものであるのか，西側の隣接地区で石組みの暗渠が確認されていることも考え合わせて，今後の調査に期待したい。



第120図　F－16、柱穴列（？）（S：1／200）

F－12において検出されたNo.108，109ピットについても，規模，埋積土の状況等，No.134，135に類似しており，同様に大型の柱穴である可能性が高いものと思う。

c．遺物

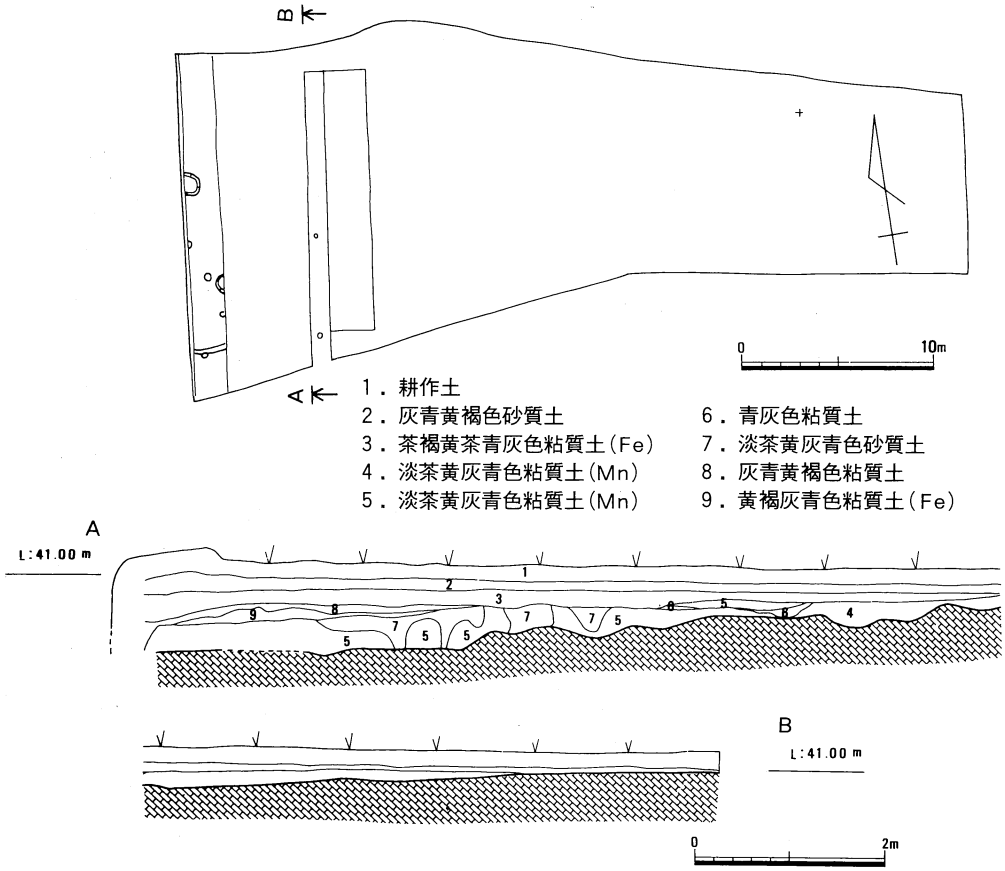
造成土中からの出土遺物は，石碾（第133図・177），軒丸瓦（第127図・155，156），軒平瓦（第128図・164）のほか，須恵器，土師器，瓦器，備前焼き等々である。（図版18，20，23）

F－15

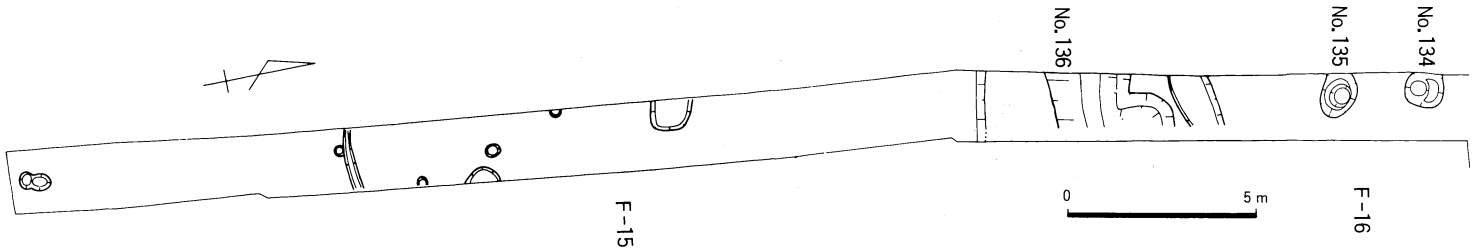
a．調査区概要

山条調査区の南端に位置し，F－16調査区の南に接続する。調査区西部にトレンチ（南北1m×15m）を入れ，遺構（ピット）を確認の後，地権者の了承を得，圃場整備の工法を変更し，保存の地区とした。（第121図）

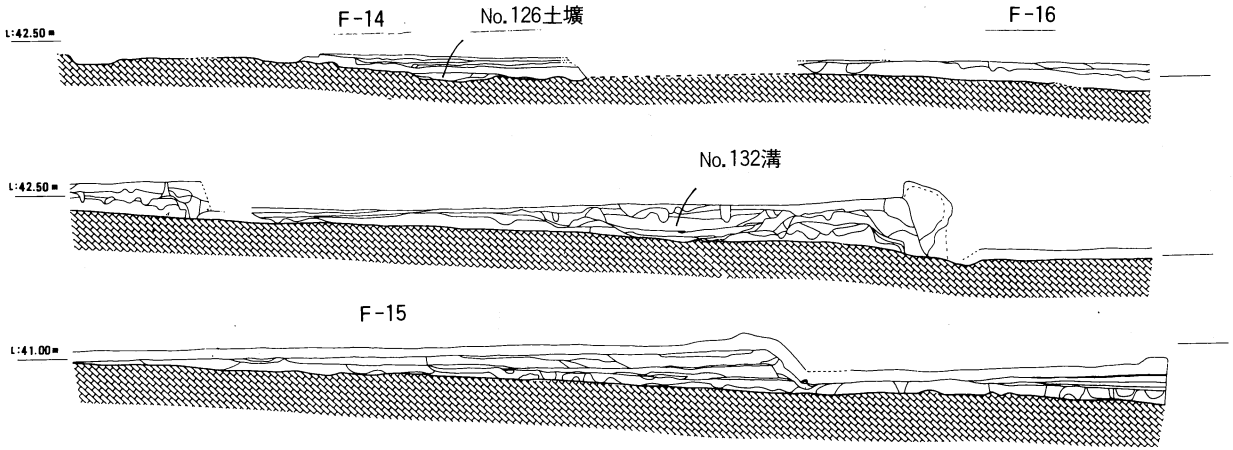
なお，当初の用排水路ＩＤ－７設置予定箇所にあたる，調査区西端部については，調査を行い，ピット，溝等の遺構を検出した。（第122図）



第121図　F－15、遺構配置図(1/400)および土層断面図(S:1/80)



第122図　F－15、遺構配置図（S：1／200）



第123図　F－14～F－15（ID－7）土層断面図（S：1／150）

第４章　山条地区出土の古代瓦について

山条地区出土の軒丸瓦，軒平瓦はその型式によって，軒丸瓦をＡ～Ｄの４型式に，軒平瓦をＥ～Ｈの４型式にそれぞれ分類することができる。（第124図）～（129図）（図版18～20）

ａ．軒丸瓦

Ａ型式…蓮弁は肉薄で中央部が軽く凹み，８枚の蓮弁の間に同じく８枚の花びら型の間弁を配している。外区は，外縁の内側に１条の凸線をめぐらしただけの単純なものである。中房は，中央に１つ，その周囲に６つの蓮子を有している。硬質のもの（128,129,145,146,148,155,157）と軟質のもの（147,156）とが認められる。

Ｂ型式…外区内縁に珠文をもち，肉厚の蓮弁は８枚で中央に陵線を有する。中房は肉厚で突出し，中央に１つ，その周囲に６つの蓮子を配する。硬質のもの（130,149）と軟質のもの（140,144）がある。

Ｃ型式…中央に飾り（子葉）を持つ２枚の蓮弁が１組となり，８つ配されている。銀杏葉形の間弁を有する。外縁の内側に２重の凸線をめぐらし，中房な，中央に１つ，周囲に８つの蓮子を配する。平城宮6225型類似のものと思われる。（141），（142）ともに軟質である。

Ｄ型式…（143）１点の出土である。肉厚の蓮弁２枚が１組で間弁を有する。外区は，２重の凸線で飾られている。中央部分を欠く。硬質のものである。

ｂ．軒平瓦

Ｅ型式…中心飾りは，直線の両脇に支葉を配する単純なもので，背中合わせの２枚の主葉が連続するものと思われる。（159）

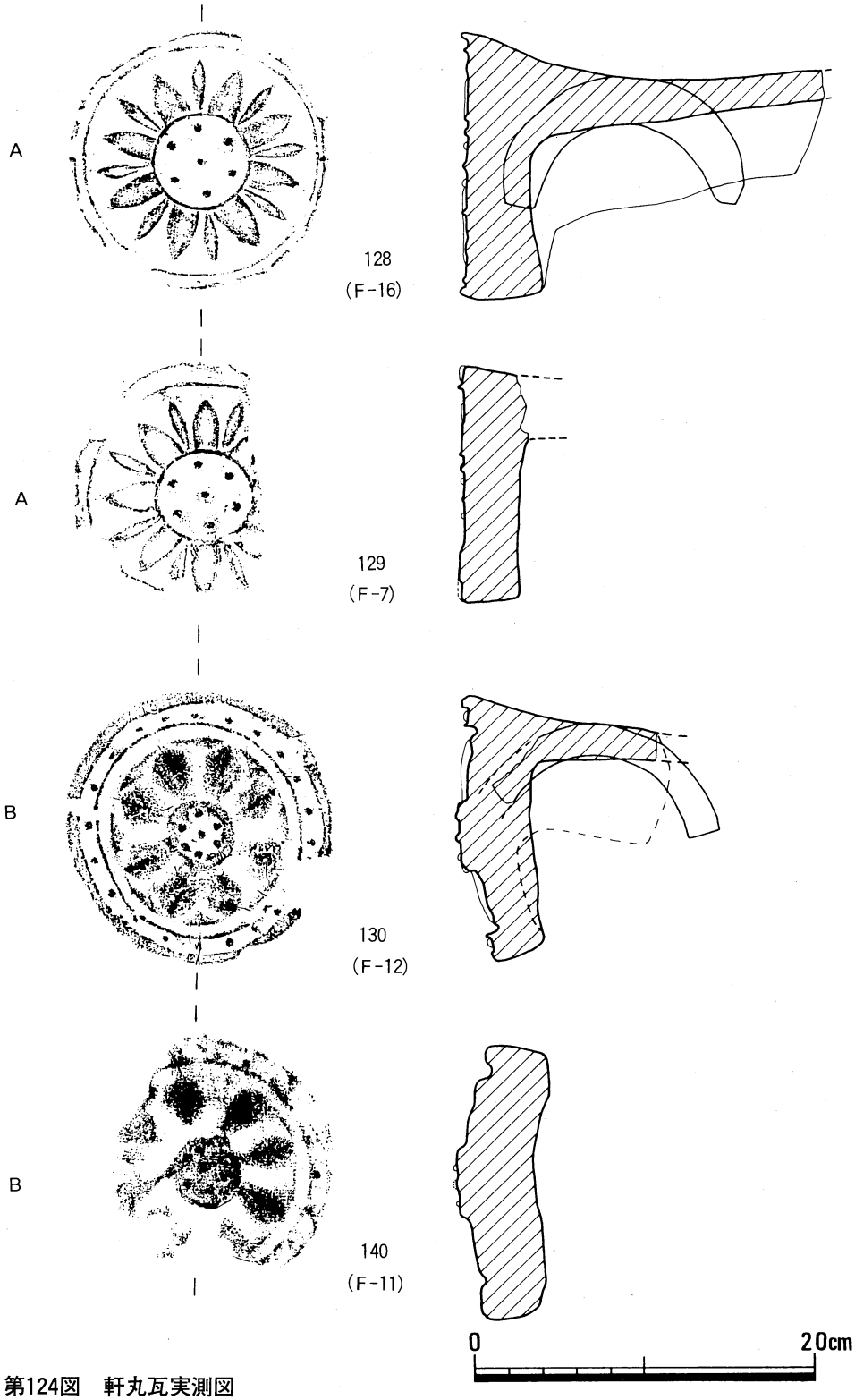
Ｆ型式…均整唐草文を施すもので，平城宮6663型式に類似するものである。中心飾りを欠いている。

Ｇ型式…主葉の配列から他型式のものと区別されるが，残存部が限られているため，全体の文様は明らかでない。

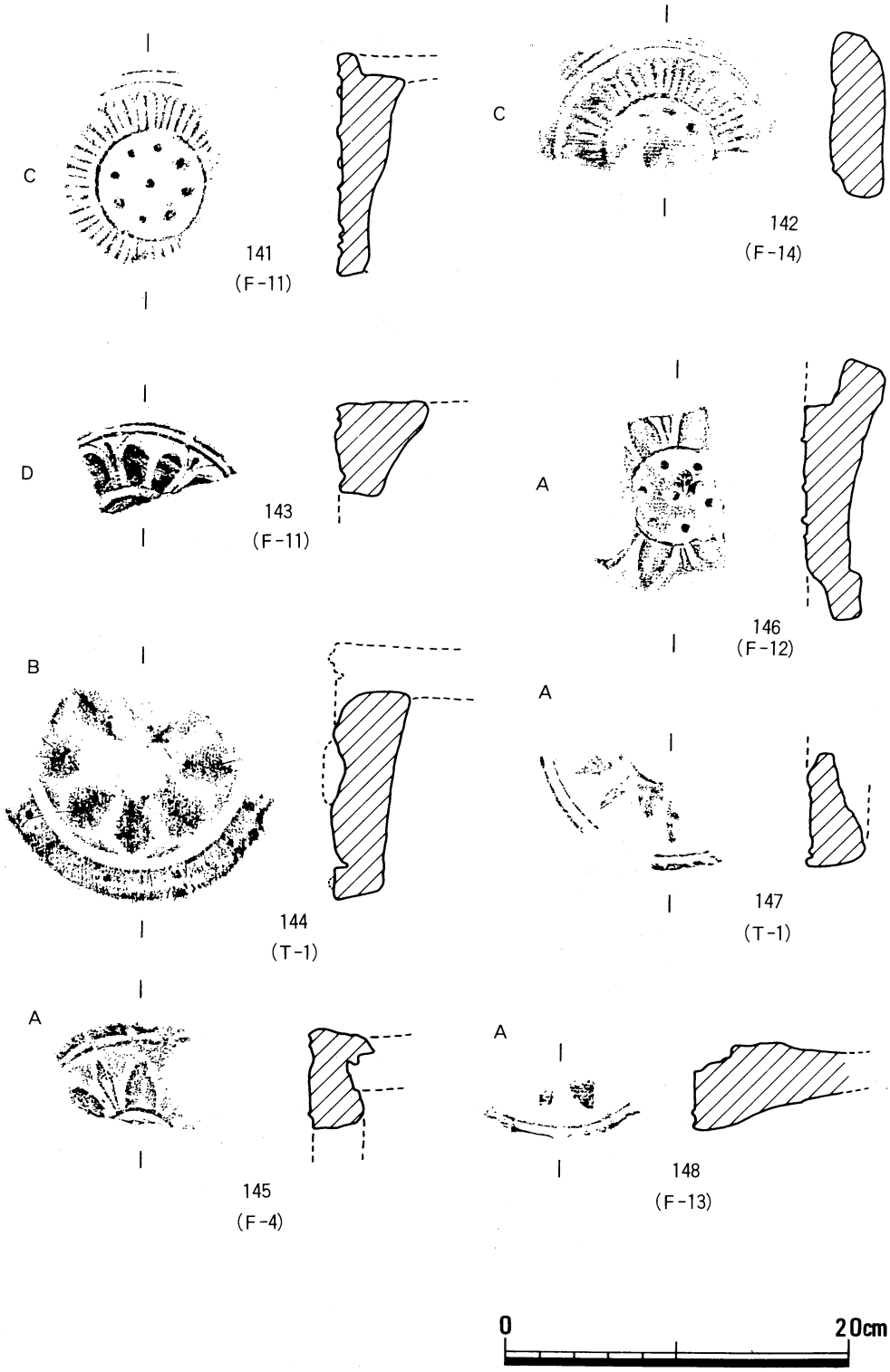
Ｈ型式…これも限られた小片で，長く延びる主葉と蕾様の支葉が認められる。

また，（158）および（163）は，中心飾りのみであるが，Ｅ型式を除くいずれかの型式に属するものである可能性が考えらろる。

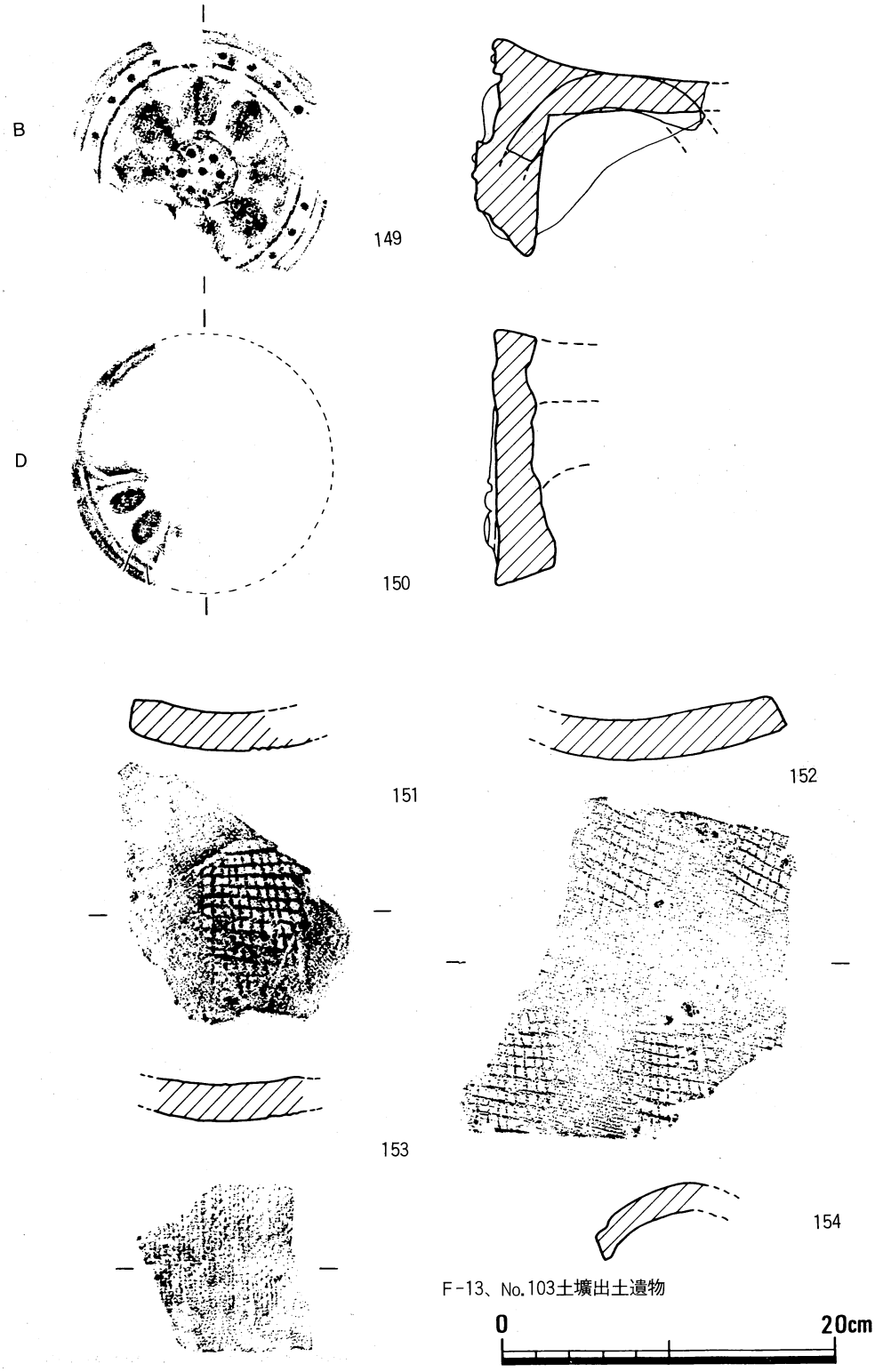
Ｂ型式は，素弁八葉華文であるが，外区に珠文を持つことから，須恵廃寺，大海廃寺，五反廃寺，栢寺廃寺，秦原廃寺，寺町廃寺，等々に見られる白鳳時代初期とされるものよりは後出



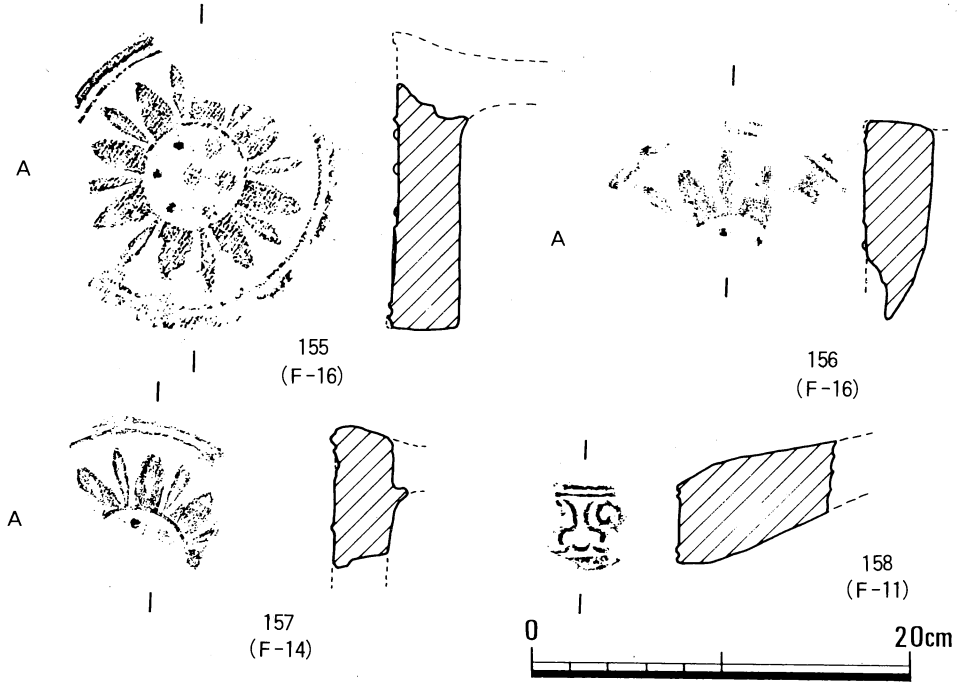
第124図　軒丸瓦実測図



第125図　軒丸瓦実測図



第126図　F－13、No.103土壙出土遺物



第127図　軒丸瓦・軒平瓦実測図

のものと思われる。

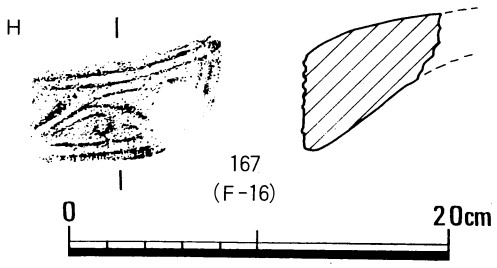
C型式は，津高南廃寺出土のものに類似しているが，外区に鋸歯文を伴っていない。

F型式のものは賞田廃寺，幡廃寺，柏寺廃寺，関戸廃寺，備中国分寺，美作国分寺，国分尼寺，等々で出土したものに類似している。

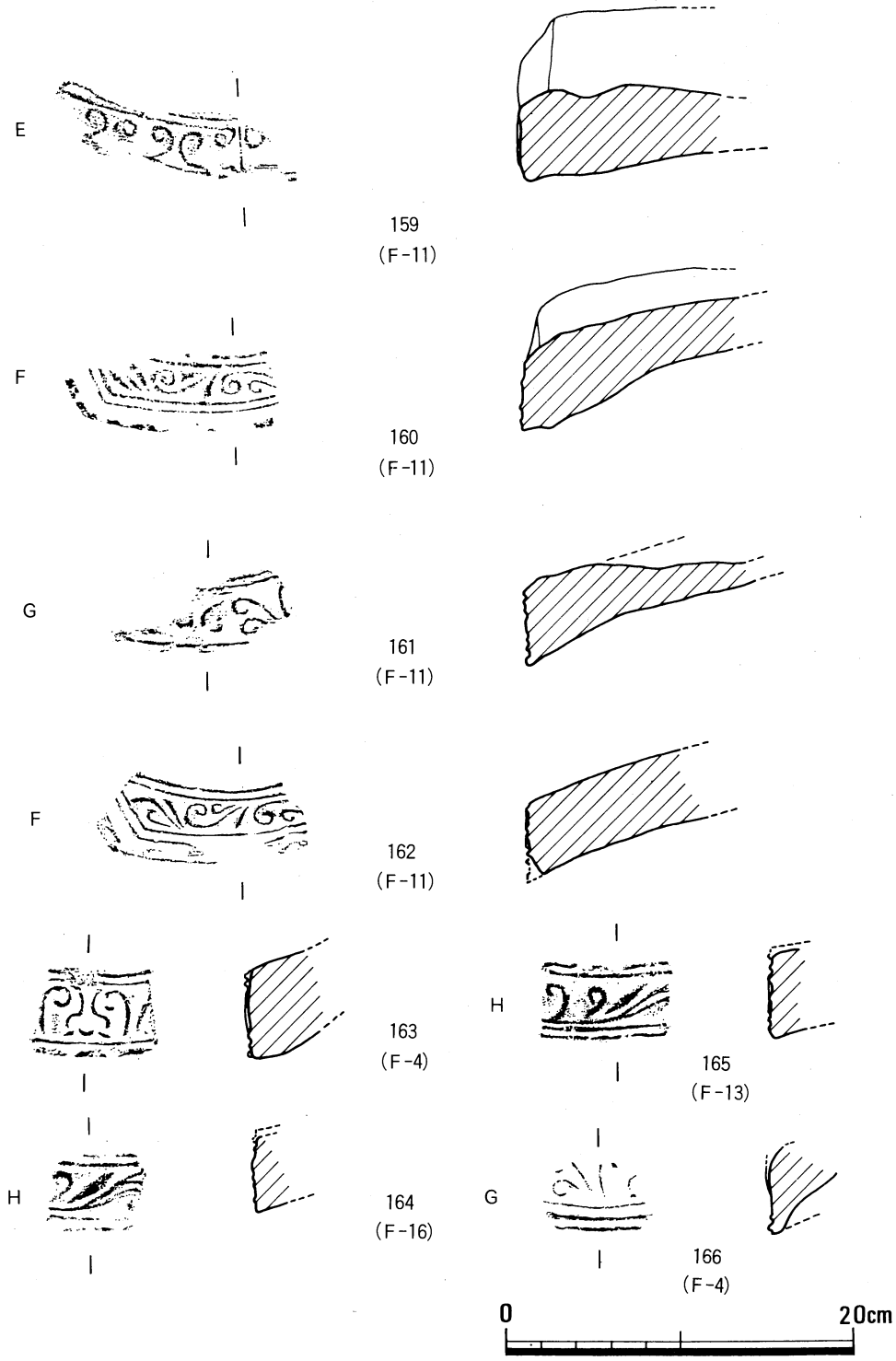
（第131図・171）は，F－4出土の淡赤褐色を呈する瓦製品である。飾り瓦の一部であると思われる。（図版21）

（第130図・168）はF－16から出土した行基葺式の丸瓦で，色調白灰淡茶色を呈し，表面縦方行にヘラによる調整痕が見られる。（169）は，F－4出土の玉縁付の丸瓦である。淡青灰色を呈し，裏面には，（168）同様，布目痕を認める。（170）は，F－4出土の表面に縄目文叩きを施したものである。（図版21）

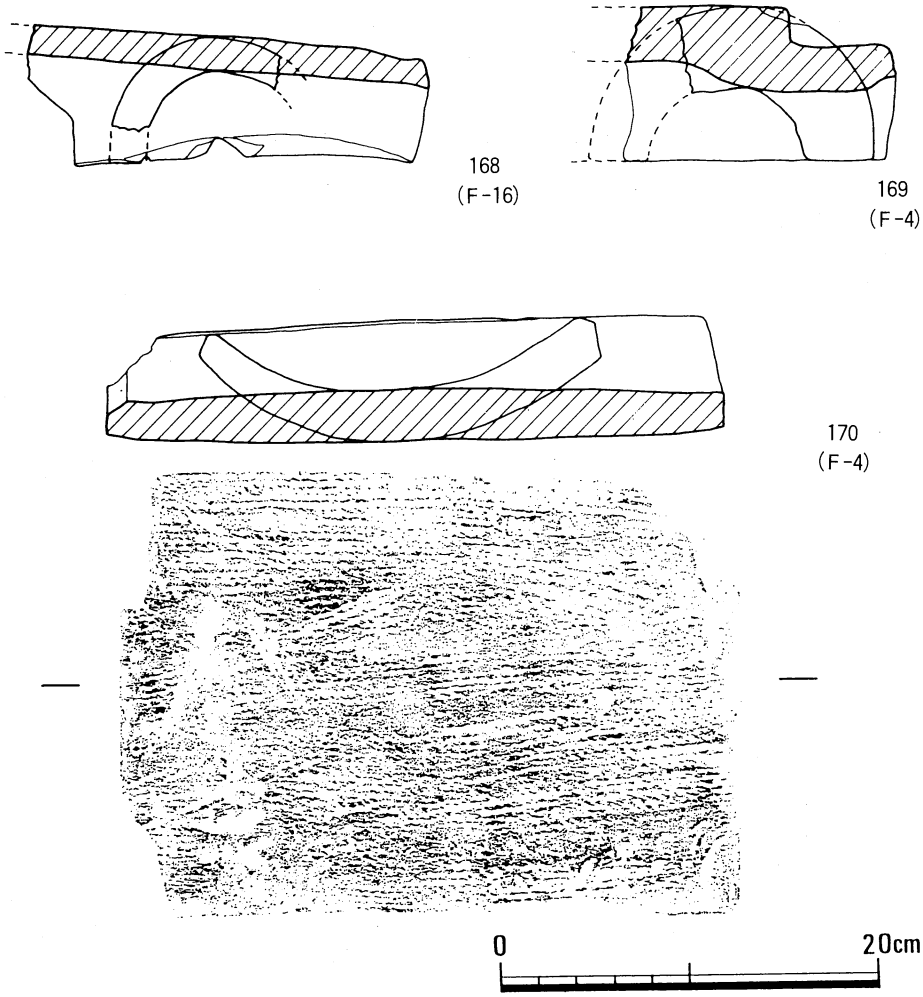
瓦の出土は山条調査区のほぼ全域で見られたが，密度としては，F－3，4，11以南の地区に特に集中している。小字に「薬師堂」と呼ばれる地域である。



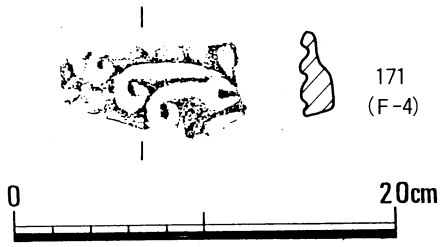
第129図　F－16 出土軒平瓦実測図



第128図　軒平瓦実測図



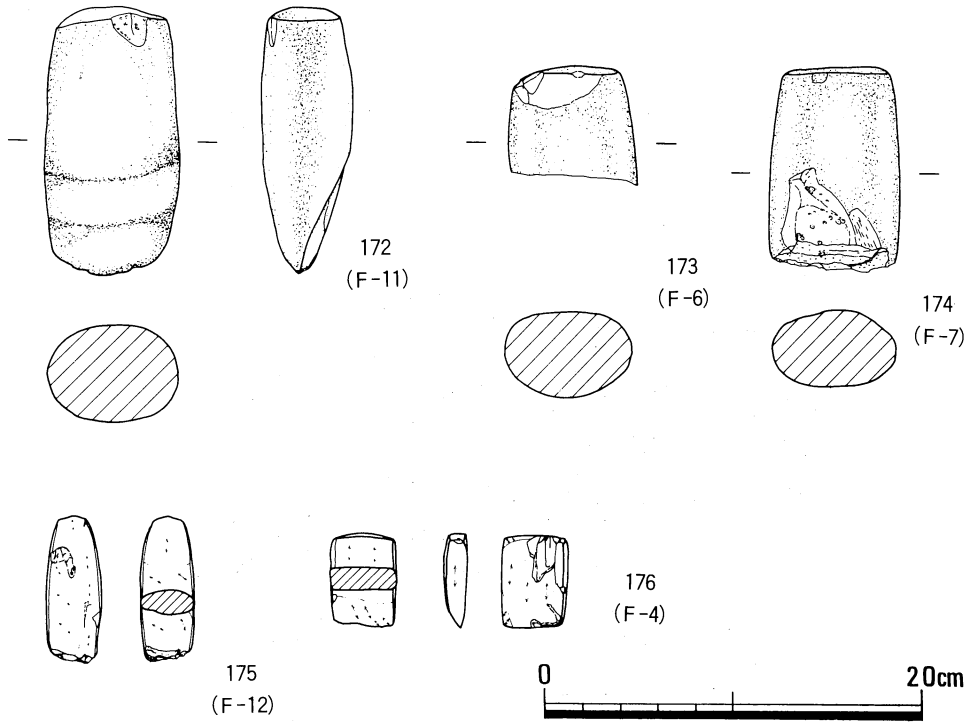
第130図　丸瓦・平瓦実測図



第131図　F－4出土瓦製品

また緩斜面の最上部にあたるＦ－７においても，少量ながら瓦を出土している。

第５章　石　　器



第132図　山条地区出土石器実測図（S：１／４）

（172）磨製石斧

Ｆ－11南側の畦畔部造成土から出土したものである。全長12.5㎝，最大幅７㎝，厚さ５㎝を測り，断面形は楕円形を呈する。刃部は一度片面を破損した後，磨いていると思われる。

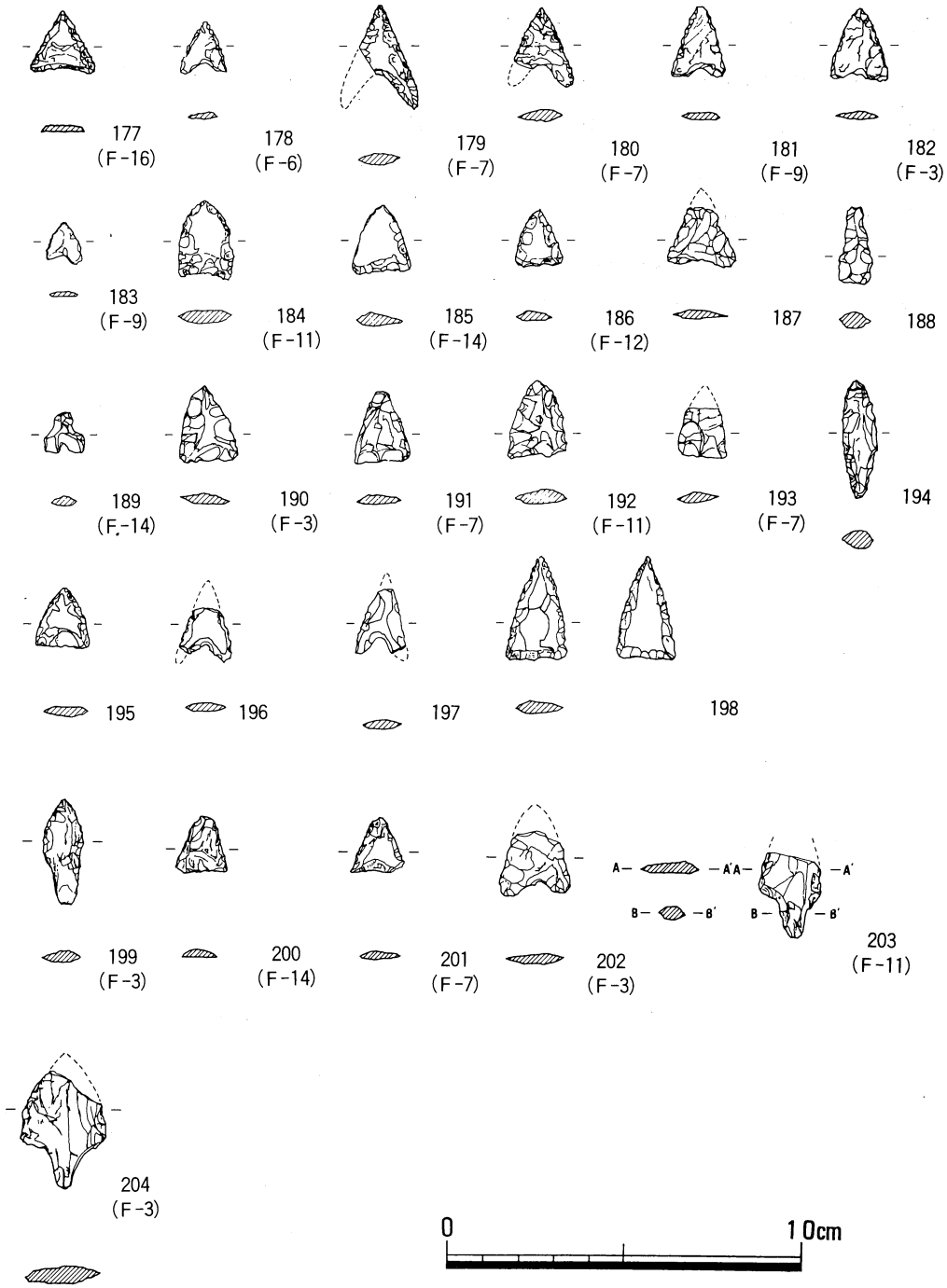
（173）磨製石斧

Ｆ－６の造成土中から出土したものである。刃部を欠いている。残存部の長さ5.5㎝，幅6.5㎝，厚さ4.5㎝を測る。断面形は楕円形を呈する。

（174）磨製石斧

Ｆ－７の造製土からの出土である。長さ10.5㎝，最大幅6.5㎝，厚さ4.5㎝を測り，断面形は楕円形を呈する。刃部は欠損している。

（175）磨製石斧



第133図　山条地区出土石器実測図（S：1／2）

F－12の造成土から出土した。色調は黒色を呈し，長さ7.5cm，最大幅3cm，厚さ1.3cmを

測る。使用によるものと思われる打撃痕が刃部に認められる。

（176）磨製石斧

Ｆ－４造成土中から出土した。淡緑白灰色を呈し，長さ５㎝，幅3.5㎝，厚さ1.1㎝を測る。平面形は正方形に近く，刃部は片面を多く磨き，片刃に近い状態に仕上げている。

（177）～（204）石礫

いずれもサヌカイト製のものである。（186）を除いては，すべて造成土中からの出土である。ほぼ，山条調査区全域に渡って散布が認められる。

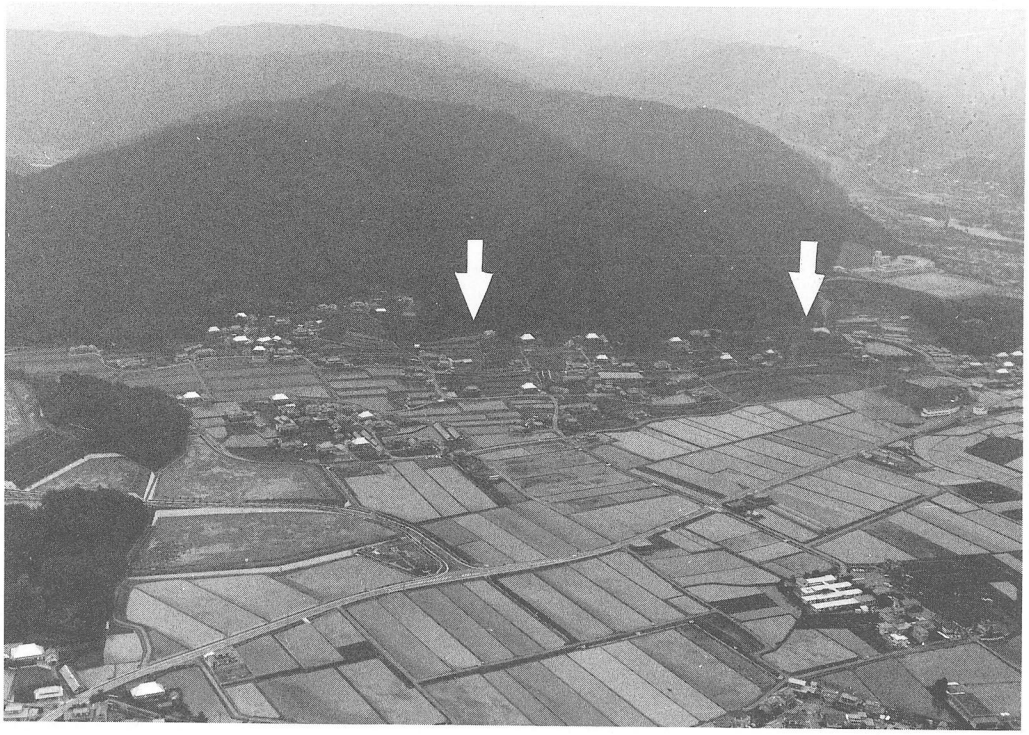
第6章　まとめにかえて

富谷，山条地区で神社・仏教関係と思われる小字を拾ってみると，富谷地区では，「松尾谷」・「本明寺越え」・「五輪谷」，等がある。「松尾谷」は天神山東側の谷で，かつて松尾神社が所在したと伝える。「本明寺越え」は，「松尾谷」へ金川方面から越える小さなたわである。「五輪谷」は，Ｆ－１調査区の南西部にあたり，宝篋印塔の頭部を祀るところからこう呼ばれる。富谷，山条地区の間を，「天神」と言う。山条地区近辺では，調査地区にあたる「薬師堂」のほか，「宮の前」，「宮の脇」，「五輪だわ」，宇根山古墳群の西にある母谷（ほおだに）分には「顕照寺」がある。本明寺，顕照寺はともに日蓮宗の寺として近世になって廃絶している。「薬師堂」はＦ－４，Ｆ－11から南，Ｆ－12～Ｆ－16を含む地区である。東西に延びる町道わきに石仏があり，『お薬師様』と呼ばれ，近年まで眼病の仏として近隣の信仰を集めていた。「宮の前」，「宮の脇」の「宮」は，現存する八幡宮をさすものである。また，調査区の西北に『生前庵』と称する小庵があるが，もとは日蓮宗不受不施の隠れ庵として，近世備前に営まれた十二庵の内のひとつである。本明寺の末寺として知られる。「五輪だわ」は，西奥遺跡から，みそのお古墳群，菅古墳群に越える峠である。宇垣周辺には「五輪」を冠する小字が多く残されてる。地名には見られないが，山条地区には「寺門」姓も多い。ただ，これらの多くは中世以降に由来を持つものと思われ，今回の調査で出土した瓦の時代に直接関わってゆくものではないように思われる。

昭和61年，「薬師堂」で古代瓦を伴った石組みの暗渠が確認され，その隣接地域に遺構の存在が予想された。今回の調査においても，遺物としては古代の瓦を多数（整理箱約25箱分）出土しているが，それに伴うべき遺構を明らかには確認し得なかった。全調査地区とも，耕地造成による削平と攪乱を受けており，遺物の出土も造成土中からのものが多い。すでに失われている遺構も多いものと思われるが，その幅広い出土遺物は，南向きの陽当たりの良い緩斜面上に連綿と営まれ続けてきたこの地域の歴史を示すものと思う。

瓦を伴う遺構として，この地区で最も可能性の高いものは，やはり寺院址であろうかと思われる。遺物から推定すれば，白鳳時代に入ってから県内に数多く造営された私寺，氏寺のひとつである可能性が高いと思われる。この地区では，室町時代までの遺構が検出されているが，各遺構の時代的なつながり，各調査区の遺構相互の関連性等，今後の課題として俯瞰的な視野に立っての検討が必要であろう。隣接地域の今後の調査に期待したい。

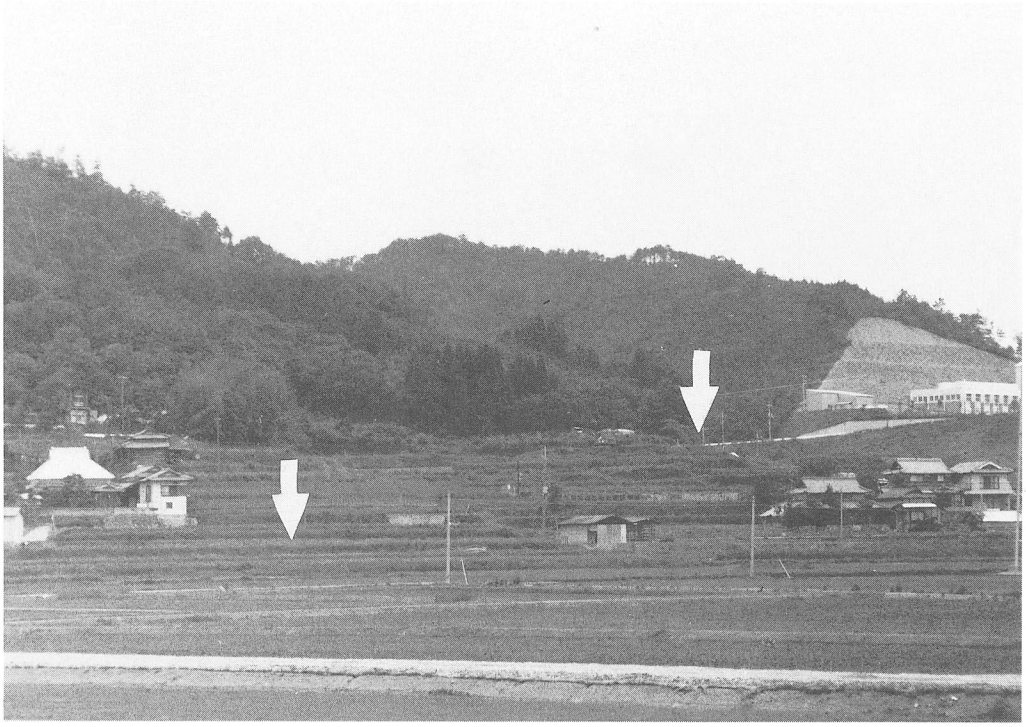
最後に，発掘調査に関わった方々，関係各位に謝意を表するとともに，直接現場で発掘作業に当たられた作業員の方々の名前を記して感謝の意を示します。（敬称略）
北山謙語，寺門和寿，寺門秀夫，西岡定勝，西田一正，舞原一志，吉村弘，花房義貞，安宗貞男，寺門静男，遠藤笑野，北山君恵，高角光恵，田口静子，寺門順子，藤原貴奴江，吉村芳子，寺門節子，以上の方々です。有り難うございました。



1．矢印左・山条地区、右・富谷地区遠景（南西から）

2．山条地区近景（南から）

図版２



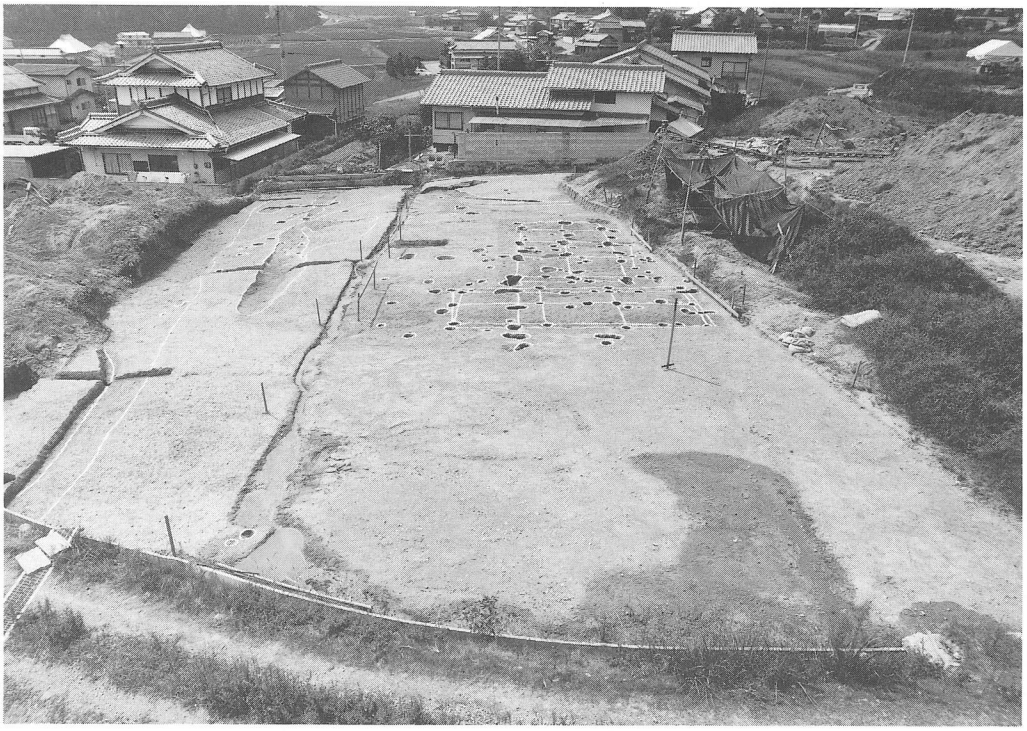
１．富谷地区近景（右・Ｆ－１、左・Ｆ－２東部）（南西から）

２．Ｆ－１完掘（南から）

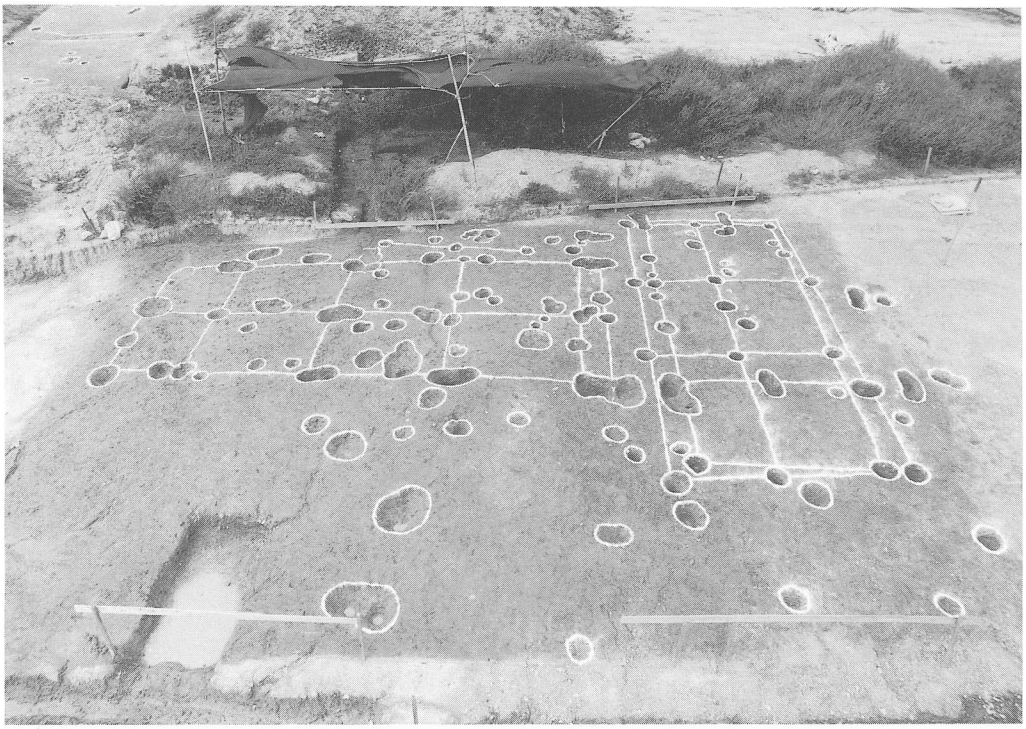
1．F－2完掘（西から）

2．F－2東部（西から）

図版４



１．Ｆ－３・４完掘（東から）

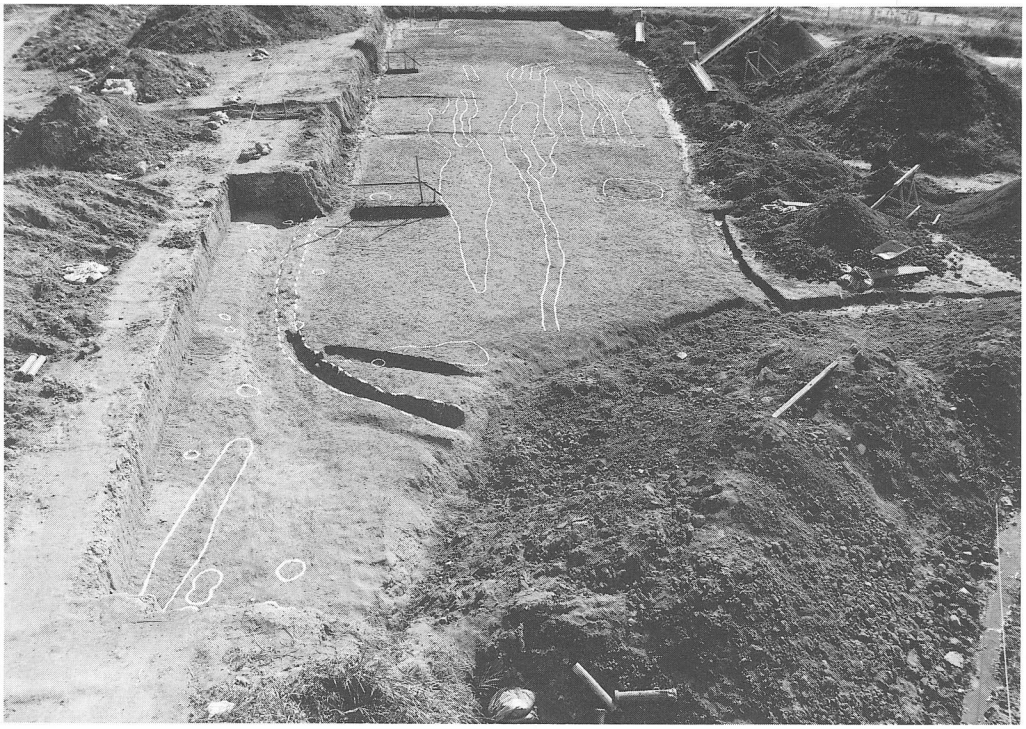


２．Ｆ－３No.26、27、28建物（南から）

1．F－3遺物出土状況（P－11)(南から)

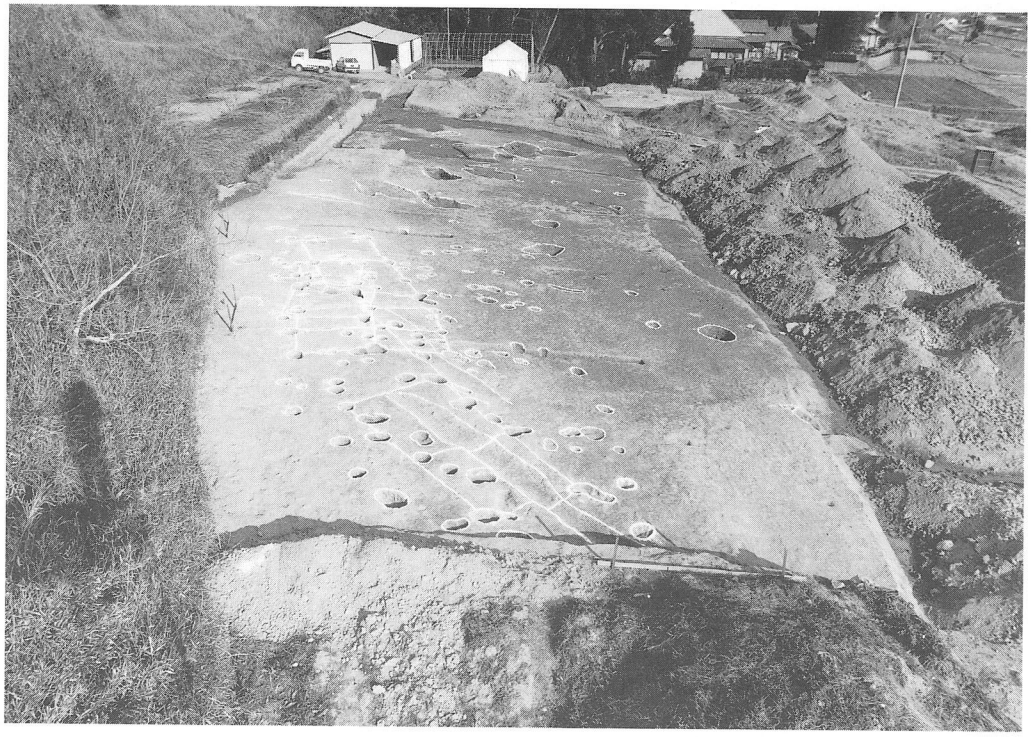
2．F－5完掘（北から）

図版６



１．Ｆ－６遺構検出状況（西から）

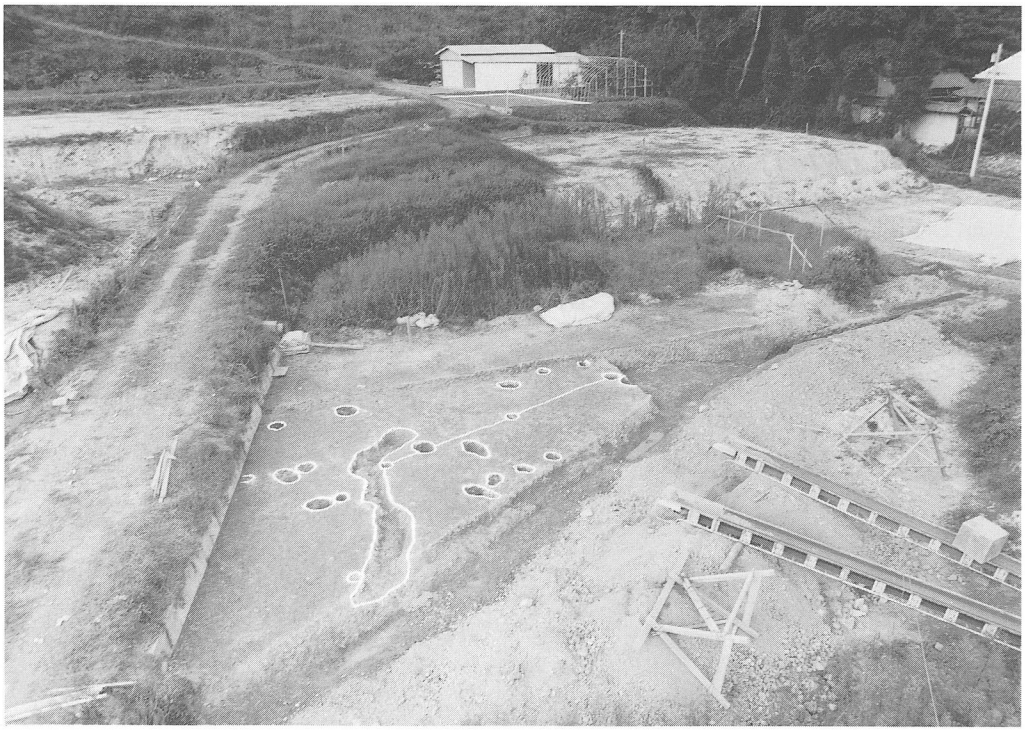
２．Ｆ－６完掘（西から）



１．Ｆ－７完掘（西から）

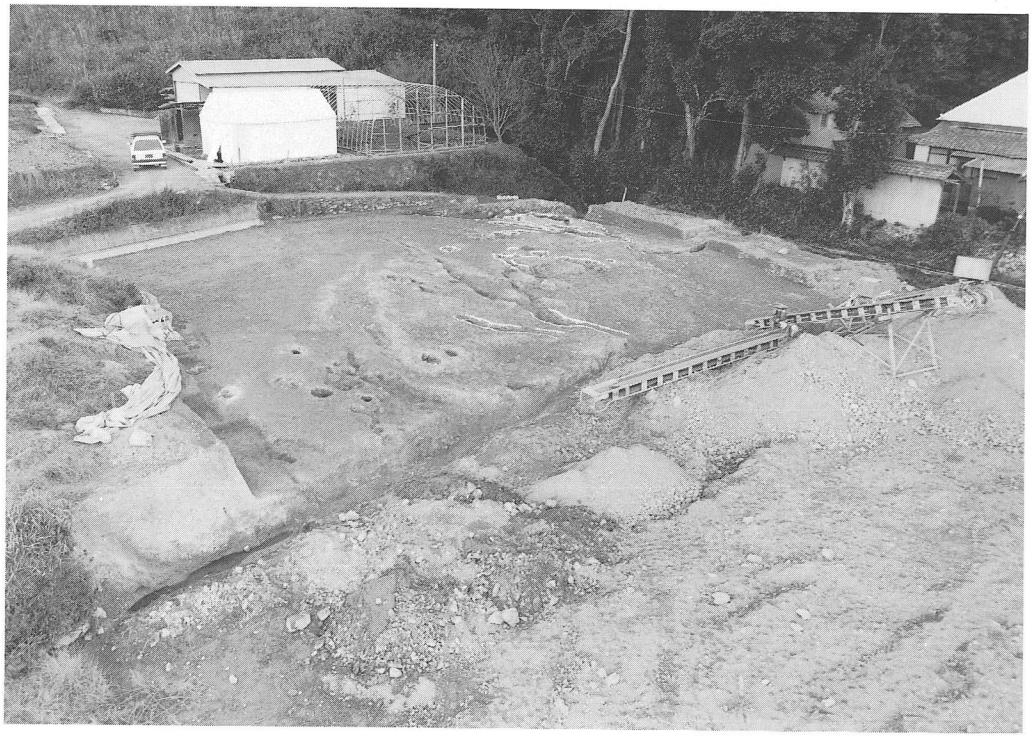
２．Ｆ－７遺物出土状況（南から）

図版８



１．Ｆ－９完掘（南から）

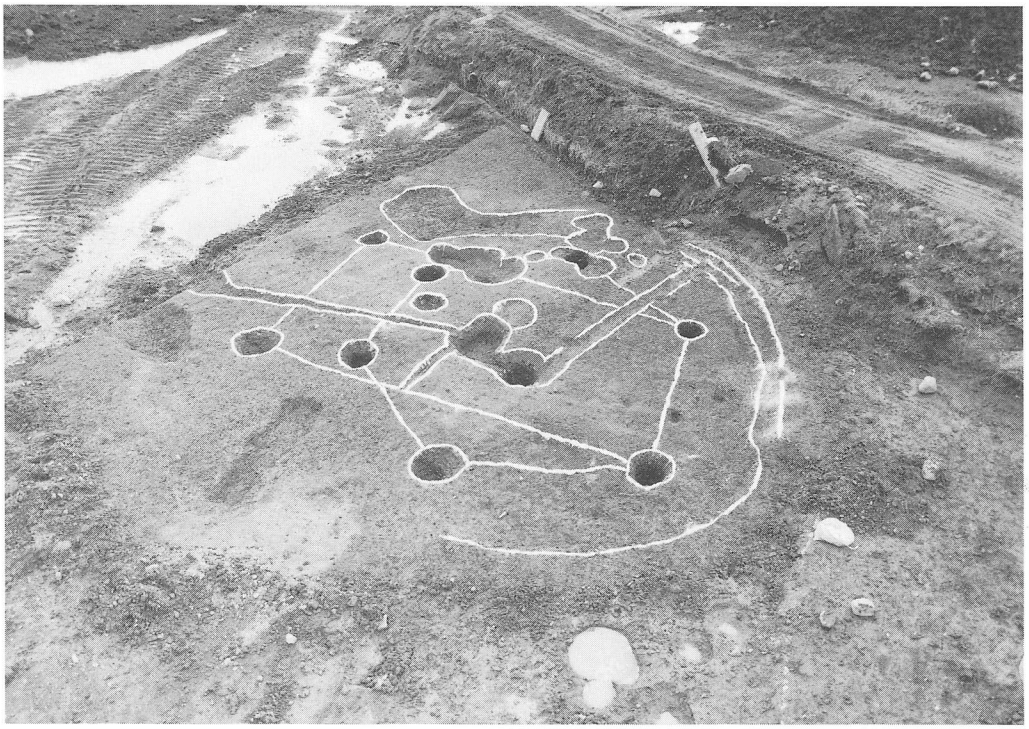
２．Ｆ－９の西道路下部分（南から）



1．F－8完掘（南西から）

2．F－10 完掘（南西から）

図版10



1．F－11 No. 18住居（東から）

2．F－10、R－8新設道路部分トレンチ（東から）

1．F－11 遺物（青銅器）出土状況（南から）

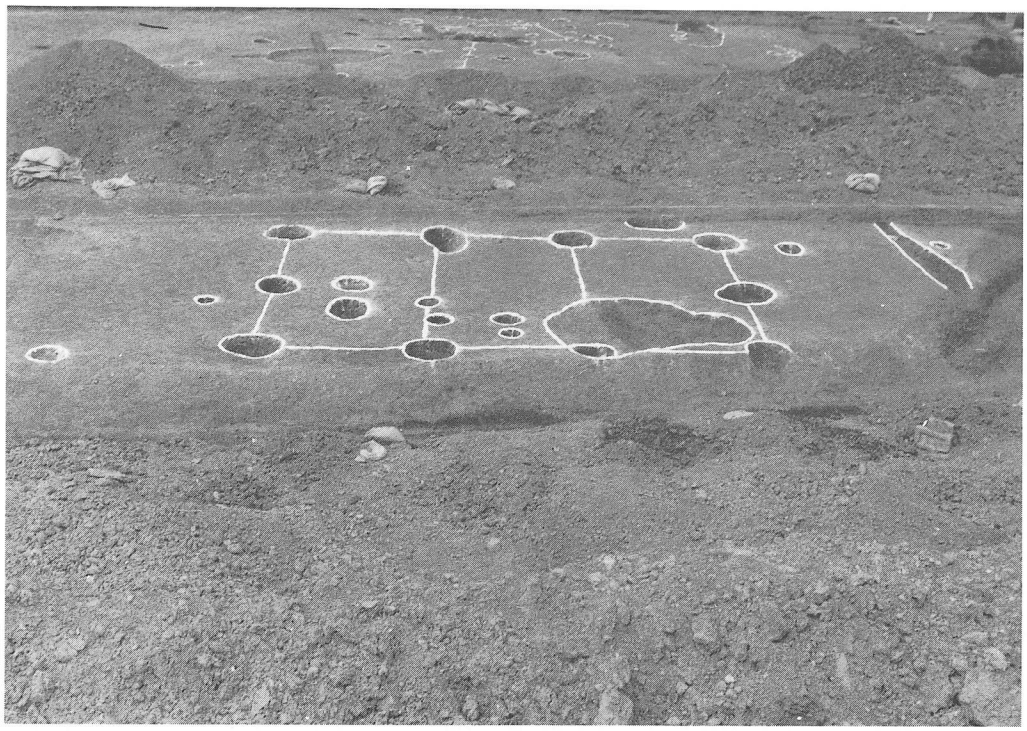
2．F－11 No.19ピット遺物出土状況（南から）

図版12

1．F－12 完掘（西から）

2．F－12 No.103土壙遺物出土状況（東から）

1．F－13 完掘（西から）

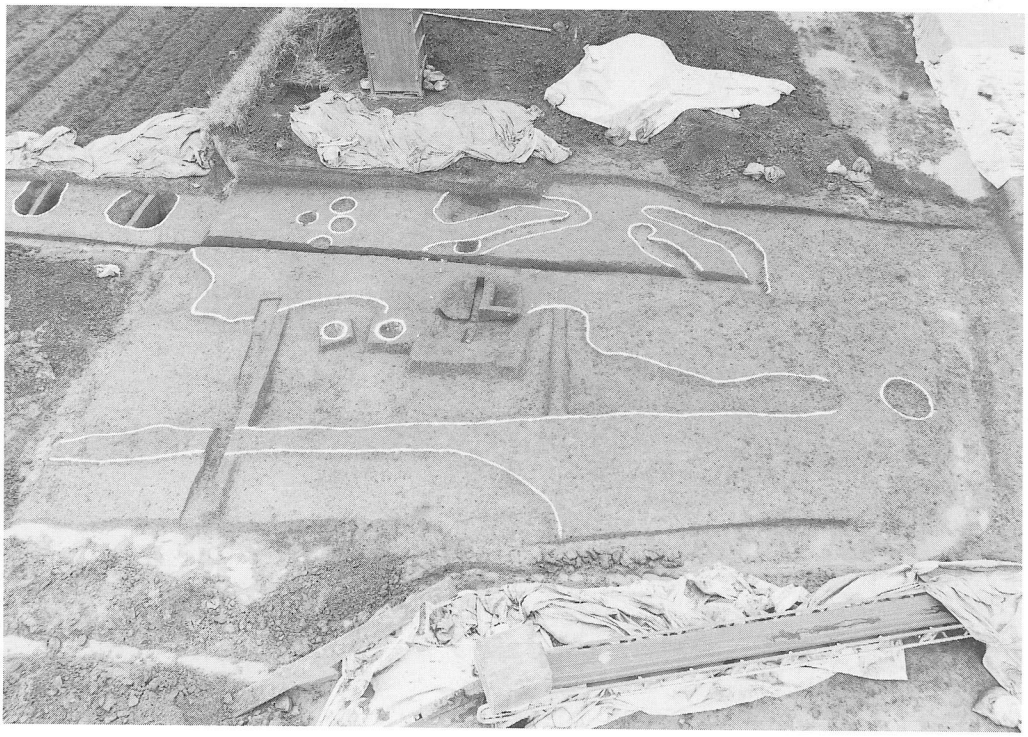


2．F－13 No.118建物（南から）

図版14

1．Ｆ－14 完掘（後方左・Ｆ－12、右・Ｆ－13）（西から）

2．Ｆ－16 完掘、手前Ｆ－14（北から）

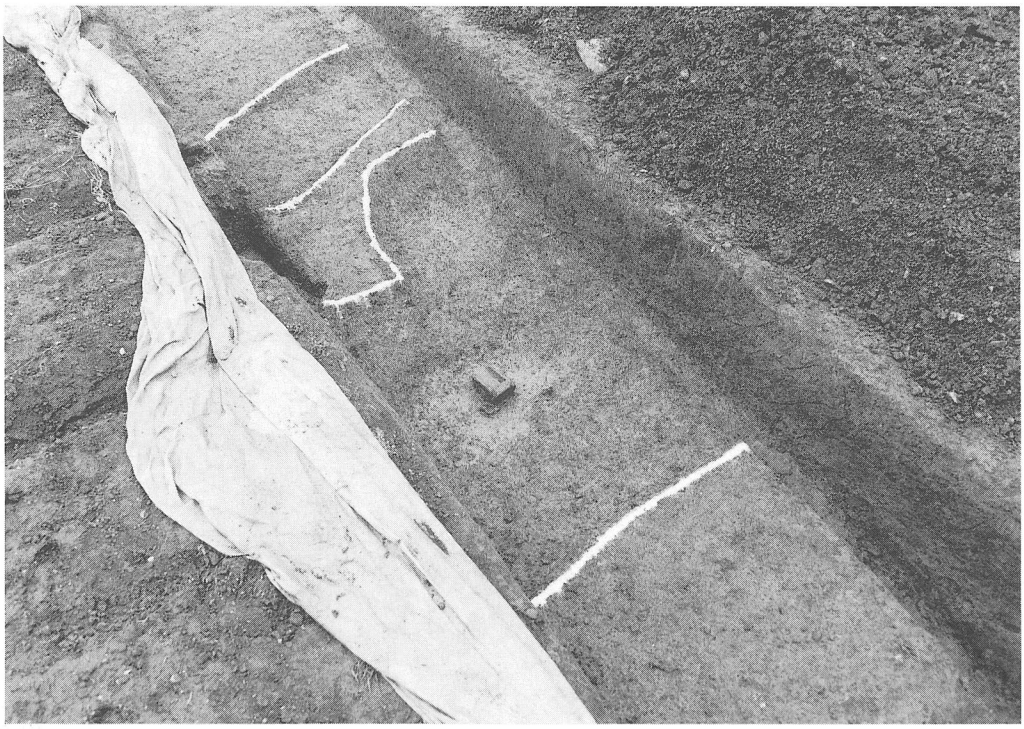


1．F－16 遺構掘上げ状況（東から）

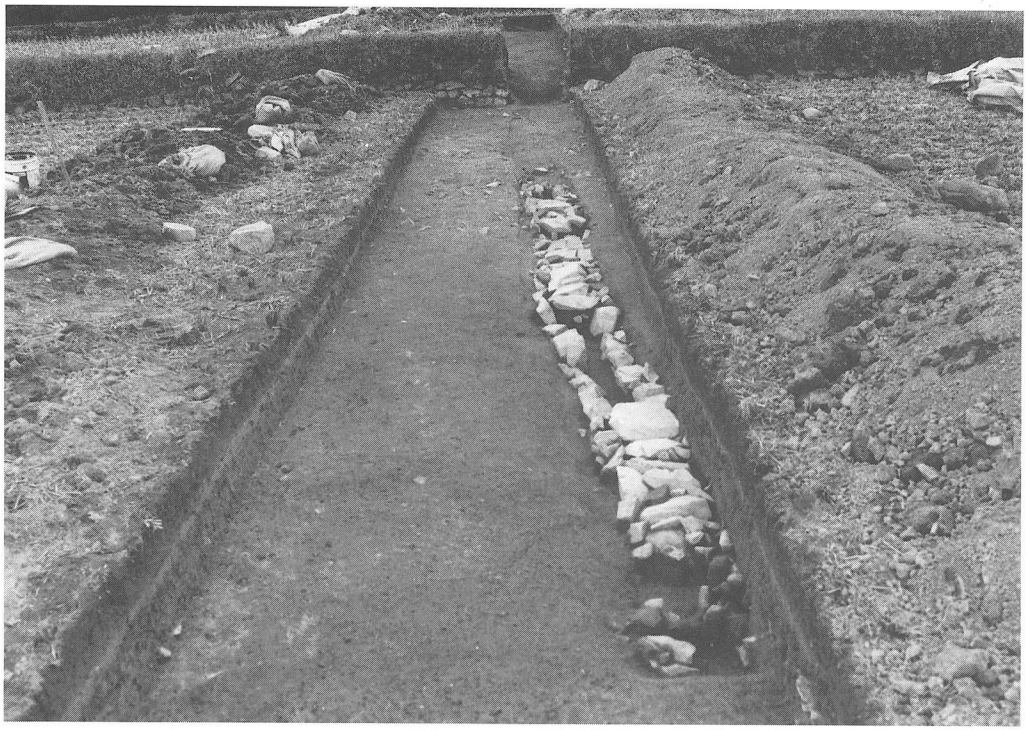
2．F－16 No.131土壙土層断面（北東から）

図版16

1．F－16 No.134ピット土層断面（北から）



2．F－16 No.136溝遺物（128）出土状況（南西から）



1．昭和61年に検出された石組の暗渠、奥はＦ—14（南から）